

觀樹
將軍
豪快錄

11.2
92



072
47

072
47
4838

4289
213

47
613

觀樹
將軍
豪快錄

將軍
豪快錄

33689

荻市立圖書館



蔣總會女政軍
蔣總會政憲蔣加

軍將國數道三
理總黨民國漢大

新軍
應博
蔣
蔣

緒 言

信仰の人として、軍人として、政治家として、其他あらゆる點に於て、三浦將軍の偉大なる所以は、世上既に定論のあることであるから、今更、更めて嘖々する必要はない。此處には唯、三浦將軍の言動には、何時如何なる場合にも、常に一種の靈能が作用する、そこが將軍の偉い處だ、といへば、それで事は足るのである。

自分は是迄、將軍の談論を一纏めにして梓に上し、頌廢せる現代の人心に、所謂頂門の一針を加ふると同時に、光彩ある好個の記念品として、天下後世に貽したいと考へて居

つたが、幸ひ將軍の允許を得たので、世に出すことにした。斯くして自分は、茲に多年の素懷を遂げ得た事を悦ぶと同時に、この腐敗せる現社會に向つて、本書を提供したこと其だ満足を思ふや切である。

大正七年九月

編 者 識

觀樹將軍豪快錄 目次

俠の字義……………	三
彌次馬論……………	四
以小制大……………	四
以小凌大……………	五
士風の類聚、意氣の下落……………	五
彌次馬は江戸の特産物……………	六
四十七士觀……………	七
先君の遺志を繼ぐ……………	七
宮様の識見……………	八
學問の要義……………	八
衰に點火する學問……………	八

(1)

目次

女

人格とは何か

人間の尊貴特許

お前がお前なら俺も俺だ

鶴 善 者

絶對界に超越せよ

山に登つて山を下りよ

犠牲と人格者

氣骨のない現代の青年

先輩が悪い

尾張の大根畑は何故いゝか

昔の青年に今の青年

佐久間象山

鳥羽伏見の戦

毛利家の勤王

薩長聯合の真相

藩兵を三田尻に集む

明石瀬戸の危難

山崎關門の談判

目出度迷惑

土産の生首

ヤツた縛めた

俺の 負 傷

伏見、淀、大阪の戦勝

藤村の戦死

藤村の人物

千兩松原の役物語

萩の 前 原

女

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

次

事件の原因	四〇
萩の逃獲	三〇
萩の包圍	三二
前原の行衛	三三
浪なき同郷の先輩	三五
勝海舟	三七
山岡鐵舟	三九
西郷の眞價	四〇
島貫の引倒し	四二
情の人西郷	四三
温泉泉宿	四三
西郷の胸中眞に豁如たり	四三
英雄の心事一人英雄ぞ知る	四四
犠牲の精神	四六

次

犠牲の意義	四六
おひどんの首が必要か	四七
西野文太郎	四七
俺との初對面	四七
原川の説諭	四七
御門達ひの御前	四七
檢事の懺悔談	四七
杉村溶と王妃事件	四七
朝鮮事件は杉村の筋書	四七
関妃は傑物	四七
杉村の手習、當夜の土産	四七
朝鮮事件と廣島監獄	四七
國民と憲法	四七
憲法と國民精神	四七

伊藤博文

荒波を乗つ切れ……………六二
 ナアベルト勳章……………六三
 金の女には極く綺麗だ……………六四

山縣有朋

長州の三尊……………六六
 陸軍組織の各意見……………六七
 木戸西郷の兩首領……………六八
 征韓論……………六九
 臺灣征伐……………七〇
 俺等の反對運動……………七一
 辭表提出……………七二
 罷職の皮切り……………七三
 大隈會議……………七四
 刺身のツマ扱は御免だ……………七五

桂 太郎

開拓使拂下一件……………七六
 俺の洋行……………七七
 山縣が脱むも無理はない……………七八
 内輪から奮闘打破……………七九
 宮様の御同意……………八〇
 紅葉館の喧嘩……………八一
 山縣と對決……………八二
 山縣の覺書……………八三
 山縣は用心深い堅固な人……………八四

山本權兵衛論

壇の浦の觀說……………八五
 政黨首領はお興に乗れ……………八六
 公爵の手盛……………八七
 汽車中の對談……………八八

凄い手際	二六
金に汚れない	二七
政治家と金	二七
落閑の心理作用	二七
薩摩人はクラモウだ	二八
俺との會見	二九
俺の買取り	三〇
高杉東行	三二
五十年祭	三三
鶉の白姦	三四
英雄の半面	三四
天京の才	三五
梅處と行脚	三六
大阪の危難	三七
琴平詣の真似	三九

自然の妙機	三九
奇兵隊	四〇
幽閉より脱走	四一
徳地から馬關九州へ	四二
馬關の爆發と檄文	四三
順逆を説く戦書	四四
繪堂、大田村の戦	四五
四境の戦(一)	四六
四境の戦(二)	四七
病床に梅花	四八
愚を學べ	四九
天下第一人	五〇
川上、赤編	五一
梅花一絶	五二
三頭首會同	五三

會同の本旨	五九
水入らずの熟談	五九
日獨開戦以來の宿題	六〇
奉還一致の方法	六一
對外策の紛雜	六二
三回の會同	六四
牛と云へば牛であれ	六六
權兵衛と牧野	六七
停車場の喜戯	六七
先づ自己を信せよ	七一
德 不 德	七三
犬養と頭山	七四
俺の戦争哲學	七七
弱い者の適者生存	七九

犬 養 木 堂

味のある話せる奴	八五
俺が喧嘩の仲裁役	八六
門前の黒犬	八七
活殺自在天下一品の演説	八八
俺も心配してる	九〇
俺が犬養を男に見せる	九二
明治天皇の御事ども	九四
泰 德 無 量	九四
明鏡の如くあらせらる	九六
天佑に就いて	九八
慨 世 談	一〇三
乃木に天死をさせたくない	一〇五
輕薄千萬な識者	一〇六

目次

目

次

乃木の葬儀と會葬者……………105
 上流社會の腐敗……………105
 禍は上から……………106
 中以下はまだ健全……………106
 俺の地祖増徴反對……………107
 今日の自治政治と以前の自治制度……………107
 議員選挙の醜態……………107
 主智教育と諸込主義の弊……………108
 教育 中 毒……………108
 乃 木 大 將……………107
 罷理屈を許すな……………107
 何も言はねが一言ぢや……………108
 遺言狀の第一……………108
 頂門の一寸……………108
 其の成化……………108

目

次

俺と御所での別れ……………109
 御養生なさいとの一言……………109
 居眠り和尚と袖引小僧……………109
 國民の無自覺……………109
 居眠り和尚の語……………109
 幕がらちがよ……………109
 早稻田のボンブ……………109
 山縣も一言なし……………109
 日 獨 戦 争……………109
 即 事 而 眞……………109
 三 重 の 教 綱……………110
 諸能生の本元……………110
 教育の大本……………110
 政治の力用……………111

(14)

目次

社會の制裁力……………二四二

新の目を張れ……………二四五

星亨と伊庭想太郎……………二四八

諸惡莫作、衆善奉行……………二五〇

百 雜 碎……………二五二

鳥巢禪師と白樂天……………二五三

ブ 禪那の真相……………二五八

業力相應の果報……………二六〇

正法外護の眞面目……………二六一

先 導 者……………二六二

佛教の死活……………二六三

その衰頹を挽回すべきは今……………二六四

佛教衰退の歴史……………二六五

衰頹挽回には共同一致を要す……………二六六

(15)

目次

基督教の修進……………二六七

頭燃の急を救へ……………二五八

雲照律師と觀樹將軍……………二六〇

贈釋雲照律師書……………二六一

贈觀樹居士書……………二六二

名稱の偏用……………二六三

心法と教育……………二六四

宗教教育の必要……………二六五

心育 衛心……………二六六

各宗諸大徳の反省を請ふ……………二六七

結 論……………二六八

本 論……………二六九

僧服改正餘論……………二七〇



觀樹將軍豪快錄

觀樹將軍豪快錄

目次終

(16)

目次

俵の字義

ひわくれやの連中が、また六ヶ敷いことをやり出したナ、まるで分獄でもして詩を作らせるやうなものぢやないか。俵の字。字ではあるが少々月並の匂ひがあるね。一體人間といふものは、豪傑ぢや、英雄ぢや、凡人ぢや、俗人ぢやといつた所で、何處等が英雄で、何處等が凡人だといふ、その境目になると評の分るものぢやない。それと同じやうに、凡人と狂人との區別も、却々容易につけられるものぢやない。志士だ、義人だといつて、世の爲め人の爲めだなどい、頼まれもせぬことに自分の食ふ物も食はずに狂奔する態を、唯だ世の中を樂に思つて行けばよいと思ふ者から見たら、本當に狂氣ぢみた眞似をする連中だと思ふに相違ない。見やう見かたで、どうにも變るものである。現に死んでから十年になる京都の東福寺の老師は

非常に學問が出来て豪い人であつたが、誰れでも彼れでも、人を見ると怒鳴りつけるので、その老師は氣が狂つて居るといふ評判が専らであつた。俺れが會つた時、世間では貴僧を氣狂だといつて居るが、自體どうしたものかと聞くと、當り前ぢやないか、此の癖り切つてる世の態を見て、氣が狂はぬ奴があるなら、それこそ本當の氣狂ぢや、といはれた事があつたが、實際其の通りである。自分さへよければ、人の事などは如何でもよいといふ觀念の盛な今の世の中から見たら、所謂身を殺して仁をなすといふ使者の行ひなどは、到底本氣の沙汰とは思はれぬであらふ。則ち「俵は狂なり」とでもいふ字義の解釋が出来るかも知れない。併し斯いふ狂者が日に増し少なくなつて行くのは、實に困つた事ではないか。

彌次馬論

以小制大

大久保彦左衛門が刺客の元祖だといふが、何もそんな事があるものか。彼奴の仕事は、一から十迄、家康といふ御親爺と馴合の狂言だ。天下を取れば第一に起るのは、功臣の知行争ひだ。家康は流石に早く之れを察したから、其の四天王に對しても、大名には取立てたが、比較的小祿に安せしめると同時に、元老たる大久保彦左衛門は、更に微祿を以て、旗本の列に伍せしめたのだ。

當時功臣の隨一たる四天王すら、此の如く、元老の彦左衛門すら如此とすれば他の奴は不平を言ふ事が出来ぬ。つまり漢の高祖が、雍齒を封じた手段を、家康は地に行つたのだ。高祖は之を以て、一時沙上側語の人心を鎮めたが、家康は之れを以て、功臣の跋扈を制する手段に用ひたのだ。

以小凌大

併し物事は、一利あれば一害ありで、彦左衛門が、以小制大的手段は、後に至つて旗本共に誤解せられた。以小制大といふ一時的政略が、以小凌大といふ一種の氣風を醸成した。寛永又右衛門の仇討騒動の如きも、旗本對大名の争である。旗本八萬騎の額に係る、徳川譜代の名折になるといふに至つては、その意氣は如何も面白いが、徳川の政治上から見ると、統一上少からの損害を受けたものだ。

士風の頹廢、意氣の下落

夫れから天下の泰平に伴ふて、旗本八萬騎が、お定りの積蓄を爲すと共に、白粉組などといふものが出来て、以小制大的意氣が、ソロンコ以小凌大といふ惡風にな

(6)

つてしまつた。町奴なるものが、反抗して起つたのも此時で、即ち士風の頹廢と共に意氣が、次第に下に移つたのだ。今では、魚河岸、八百市場、商人足、兩徒等の間に、僅に其面影を残してゐるが、それさへ、其の大立物の腐敗と共に、次第に其の意氣は、メッキリ銷沈してしまつた。只だ徳川三百年間に養はれた、所謂江戸っ子といふものは、今只だ彌次馬に存するのみだ。

彌次馬は江戸の特産物

彌次馬は江戸の名物、イヤ江戸の特産物ぢや。甲乙二人が喧嘩をやる、審査が概柄づくに物引せうとする、丙が出て来てイヤナヲ審査に筒先きむけて、じやアト、やらかす。審査は甲乙を捨て、とうとう警察に連行せられるのは第三者たる飛入り丙である。コンナ事は、江戸っ子の外には、トクモ出来なない藝當だ。近くは交番の焼打でも、電車の焼打でも、皆な彌次馬の仕事だ「何ンデイ、ベランメイ」此

一句の間に、利害得失の念は毫もない。自からの利害を忘れて、他人の急に赴く、只だ此の單純なる意氣が、江戸っ子の真面目だ。即ち曰く「江戸っ子は、今は僅に彌次馬に在り」と。

四十七士觀

先君の遺志を紹ぐ

(7)

赤穂四十七士の義舉は、今更論する迄もない。只だ當時の漢學者輩が「先君の遺志を紹ぐ」とある大眼目を棄て、イヤ腹舞だ、イヤ義舉だと、俗論を聞はしたが可笑しいのだ。只だこの一語を玩味すれば、一切萬事の解決が出来るではないか。泰西などに至つては、當時義士の好評と、各大名が競争的に之を抱へんとした形迹を見て、扱てはと自己の中心から推論したもので、偶々本人の了見のさもしいもの

を現はしたに過ぎぬ。

宮様の識見

殊に成すべきは、當時有力なる命乞を斷平として斥けた、上野宮様の識見である。四十七士が千載の後に芳名を保ち得たのも、此純身的精神が、百年の後までも、人心を刺戟するに至つたのも、一にこの宮様の經世的識見の賜だ。明治に於ける親孝心の敵討が、鼻缺けになつたり。或は敵討の孝行者が壯士になつて、果ては仲間の人殺しで、赤い衣を着る様になつては困る。

學問の要義

藁に點火する學問

先年牛込の或る演説會場で、只だ斯様いふ演説をした事がある。

「學問をシヤツボに冠るな、襦に穿け」

なんと簡単な演説ではないか、すると中から、此れは何の意味だい、と反問した人も大分有つた。其時俺は、後で考へたら分る。分らない様な男なら、分らせる必要がないと云つて、其れ切り演壇を下りた。今の學問する奴には此れ位の事の解らぬ奴があるから、俺は今時の人間が厭になるのぢや。

一晩今時の學問する奴は、修養と云ふことをやらない。頭ばかりに力が入つて、脚の下に一向力が入つたらん。頭が重くつて、脚が軽い、妙な不具者許りだから、いろ／＼の間違ひをやらかすのだ。あの忌はしい社會黨などいふものも、斯様な奴から出来る。何にしても修養が肝心だ。

修養々々と口で許り言つたとて、念を入れてやらなければ何んにもならん。俺は藁に火を點ける様な學問は厭ぢや。藁に火をつけろ。藁の火は長持ちがせない。

直ぐ燃えつく代りに、直ぐ消えて了ふ。薪は燃えにくいが、火さへ附けばなかなか消えぬ。學問をしたつて、河岸の兄弟や、橋場の船頭許り出来たつて何になるかひ。

赤いフロック

彼は先年、二十年振りで、樞密院のお役人になつた。それで、二十年前に持へた赤くなつて居るフロックを引懸けて行つたところが、樞密院の友達が、

「こりやア、このフロックは餘りにひど過ぎる、一着新調したらよからう」と新様い、のだ。フロック許りがハイカラでも、人間が出来て居なければ何んにもならんやないかと、さう云つてやつた事がある。

此れも亦先年、未だ先帝陛下御在世の時の事だが、陛下が大演習から御還幸になつたので、俺もまた赤くなつたフロックを着て、新橋まで御迎へに出たのだ。すると曾我が、

「赤いフロックは珍らしい」と言ふと、又寺内が笑ひながら、

「茶色のフロックコートは全く妙ちや、多分洋行時代のものでせう。洋服はいくら古くつても着られますが、靴がよく穿けました」と言つた。

靴か、まさか四十年前のものも残つては居ないから、此れだけは買つたのちや。皆があまり他の洋服の事を云ふから、周囲の者を見るとき、なる程、他の様な洋服を着て居る者は一人もない。何れも立派なフロックを着て居る。そして、然も胸にはピカ／＼する金時計を下げ居る。彼の胸には、其代りに眼鏡がぶら下つて居た。

俺は全く時計の必要がないのちや。人に持せて置けば何時でも聞ける。時計の蓋を開けたり閉ぢたりして居る間に、充分時間が聞けるぢやないか。處が俺は眼鏡は

(11)

學問の要義

必要だ、物がハツキヲ見えぬからぢや、洋服を着て時計を下げぬと惣裁が悪いと云ふが、俺等は、惣裁などはどうでもよい。惣裁の爲めに、不必要なものをよら下げて居る奴等の了見が分らぬぢや。

繩 暖 簾

矢張り其の赤いフロック問題の頃ぢや、又た寺内が話の序に斯様云つた。

「あなたも樞密院顧問官になられたのだから、モウ繩暖簾をくゞる事はおやめでせう」

といふから、

「俺はお役人になつてからモウ二度許り繩暖簾をくゞつた」

と云つたら、寺内も聊か驚いとつた。

何で俺が好んで繩暖簾を滑るかと思ふのかひ。俺が長年最負にして居る日本橋久

松町の居酒屋の亭主が、

「此頃は三浦さんが少しも被入つしやらない」

といつて、大變膽ひで居ると云ふ事を聞ひたから、俺は亭主を慰めに行つたのだ。

俺が繩暖簾を滑るのは、不思議だと思へば不思議かも知れんが、それには俺に理由があるぢや。

今この人間は、頭の上の高い處許りを見て居るのぢや。足下が一つも見えとらん。之れが甚だ間違つた了見ぢや。そこで、俺は最下等の居酒屋で、酒樽に腰を落して一杯やりながら、下々の人のする事を、見たり聞いたりして居るのぢや。左様すると下情がよく分る。いゝ學問が出来る。處で此の間も、惣芝居と犬芝居を見に這入つた。家内や娘が、頻りに止めたが、俺は平氣で、押し切つて入つて見た。併し、何にも俺は、犬や猿の芝居を見るのぢやない。斯様な處には、どんな人が集まつて居るか、それを見に行つたので芝居を見るのではないのぢや。人間を見に行くのぢ

(12)

學問の要義

や。そうすれば、どんな人間が、どんな商賣をして居るかよく分かるぢやないか。

(14)

おちさんは威張とらー

他の近所の人達は、俺の事を種々に呼んで居る。殿様と云ふ人もあれば、あの人の、この人と云ふ人もある。小供などは、大體、オヂさん〜と云ふて居る。俺は子供が大好き、よくからかつて遊ぶ。するとどうだ。まだ俺の家では門を閉めて居る頃から大勢の子供が連れ立つて来て

「おちさん〜、遊ばふよ〜」
と大きな聲を出して、ドン〜と門を叩くのぢや。威が、俺が今度役人になつてからは、小供達がおちさんと言はなくなつた。あの人とか、この人とか云ふ。多分親達が言ひつけるのだらう。

先年も亦俺が、あの赤いフロックコートを着て居ると、小供達が後から追ひかけ

て来て、

「おちさんどこへ行くの……」

と尋りに聞いたが、俺が黙つて行き過ぎると、石を後から投げつけるぢやないか、俺が少し怒つた風をして見せたら、

「威張つて居やがらあ〜」

と小供達は一齊に口を開けて云ふ。實に小供は面白いものぢやないか。

丁度、日露戦争の時に、俺が洋服を着て出ると、子供達は、俺をいろ〜に批評する。おちさんは軍人だと云ふものもあれば、い〜へ、おまわりさんだと云ふものもある。中には、おちさんは復して居るから、戦争には出ないんだよ。と言ふものもあつた。子供達を相手にして居ると、親の職業から、家庭の様子までよく分る。何事も修養をつみさへすれば、分らないつて云ふ事はないのぢや、

(15)

人格とは何か

人間の專賣特許

ナリに人格だ。人格とは人間の性格だ。人間の性格が人格なら、鳥には鳥格、獸にも獸格のある筈だ。人間は萬物靈長だから、その性格も高等だといへば成程さうかも知れぬが、鳥獸のやうに單純でなく、複雑なだけそれだけ性の悪い處もある。智慮をめぐらして他を害しやうとするのは、性の悪い人間の專賣特許だ。今日普通處で人格の高いといはるる人には、この專賣特許を手控へにする者だ。孟子が性善説を主張しながら、惡の起源で行き詰つたやうに、人間の性分には、本來善もあれば惡もある。人格的の人間は、惡を避けて善につくもの言ひだ。

お前がお前なら俺も俺だ

併し善といひ惡といふその定義は、人間相對の間では、決して見出せるものではない。お前がお前なら、俺も俺だといふ事は、口こそ出さないが、人間世渡りの立前ぢや。宋襄の仁をやつては生きて行けぬ。處が、お前がお前なら俺も俺を、露骨に出すと殺風景だから、あまり目立たぬ様に、如何にも調子よくやる。俺のする事は、俺のためにもなるが、同時に他人のためにもなる。これを名けて、自利即利他とは巧妙な言分だ。名は實の實といふが、其の實が、其の名と一致しないから困る。

偽善者

自利即利他から一歩進んで、我空他愛といふ、如何にも仁者めいた真似をする奴

人格とは何か

があるが、彼奴等のする事が一番罪が多い。己れを欺き世を欺く偽善者はこれだ。浮海が鏡の上に法衣を着たやうなもので、表面には如何にも柔和に見えるが、一皮剥くと毒々しい残忍な性分を持つてゐる。見ろ、世の中には斯ふいふ残忍な奴等が、博愛とか慈善とか、如何にも立派な看板をかけて、盛に偽善を働くぢやないか。斯ふなつては、人格もヘツタタレもあるものか。

絶対界に超越せよ

阿とかいふ若い博士が、「吾人は須らく現代を超越せざる可からず」といつたが、これは件々面白い言草だ。併し俺は「吾人は須らく相對界より絶対界に超越せざる可からず」といひたいので、不完全な人間同士の相對界では、何をいつても、何をしても、その大部分は嘘ばかりぢや。相對の小徑から絶対の大道に出て、始めて本物になる。絶対の大道とは悟の境涯ぢや。悟人の境地に立つてやる仕事でなけりや

ホントの意義も價値もないのぢや。

山に登つて山を下りよ

山に登つて山を下れぢや。田圃道ばかりマゴツイで居ては、世の中の事は、何も明るものぢやない。高い山に登つて眼界を開いてこそ、はじめて本物を見、真相を知る事が出来るのぢや。小我の田圃道から、大我の山嶺に登り、大我の山嶺から下つて来て、さうしてやる仕事は、それが本當の仕事ぢや。人格の眞の光輝は、さういふ人のみに閃くのぢや。

犠牲と人格者

處が、目の先き三間ばかりしか見えぬ尋常人の目玉には、高處大處から手を下さず大人格者のする仕事は、あまりに大きく、あまりに廣いから、容易に合點が行かな

人とは何か

(20)

氣骨のない現代の青年

いのちや、それで死もすると誤解を生ずる。誤解の結果が迫害となる。古今東西に、其類例は乏しくない。併し迫害せらるゝものは、固より覺悟の前の事であるから、別に苦痛とも何とも思はぬ。迫害が来れば来るほど、迫害するものを怒む心は深くなる。犠牲は大人格者につきものぢや。それが現れて、生きて居る間に解れば結構ぢやが、大人格者の眞價は、まあ死んだ後でなければ解らぬつて。

氣骨のない現代の青年

先輩が悪い

日本の青年に元氣がない。併しこれは青年が悪いのぢやない。何といへば直ぐ維新の青年がといふが、何も別に維新の時だけの青年がよくて、今の青年がわるい譯ではあるまいせ。今の一般の氣風がわるいから、従つて青年もよくないのぢや。青

(21)

年それ自身よりも、今の風紀を作つてゐる先輩の奴がわるいのぢや。一つ其處から宜いのが出れば、それにつれていろんなのが出て来るものだ。

尾張の大根畑は何故いゝか

見ろ——、信長が尾張から出た時、あの當時の英雄豪傑といふのは、皆な尾張から美濃にかけて出て来たぢやないか。何も天は尾張の大根畑を肥す譯ぢやないのだ。尾張に大根をよく作る奴が、一人出て来たので、皆ながそれに習ふのぢや。一般にさういふ風になつたと同じぢや。それを今時のやうに、詰め込み教育をやらせてから、氣の利いた青年が出来る筈がないぢやないか。無窮矢野に、ヤレ法律で御座れ、ヤレ何で御座れ、と詰め込み事ばかりやつてゐる。世の馬鹿者共が、ヤレ法律といつて、世の中を法律づくりにせうにするが、全體この法律は、どうして出来たか考へて見るがよい。何とかいふ毛唐人がこしらへたのぢやないか。ぢやによつて

氣骨のない現代の青年

最善のない現代の青年

その毛膚人以上の考へを持つた人間があれば、その法律は何の役にも立たん事になる譯ぢやないか。それを後生大事に、法律く〜といつてナラダ、困つた世の中ぢや。今の世の中はこんなもので、青年は矢鱈に詰め込んで、頭ばかり重くするから、足の方はいつもフラ〜してゐる。人間の頭には限りがあるから、限りある頭に、限りなき學問、それを無理遣りに詰め込むから、青年が元氣がなくなつて、拙句の果には馬鹿になるのは、それは當り前ぢやないか。頭が重くなりや、足がヒョロついで、腰がフラ〜するに極まつてゐるぢやないか。

昔の青年に今の青年

そこで、頭を軽くさへすれば、胸から下に力が這入る、胸から下に力が這入れば、一寸突かれても、ヒョロ〜せぬのぢや。一寸風が吹いた位ではフラ〜しない。然るに今の詰め込み教育で、青年が否應なしにキメツケられるから、フラ〜し

た、風が吹けば飛ぶやうな、青年の出来るのは當り前ぢや。頭が重くて、頭筋鉢巻で、何として元氣なんか出るものか、可哀想なのは今の青年だ。
昔の青年が、元氣があつたとか、エラかつたとかいふのは、頭が軽かつたからだ。それで智慧も出たのだ。俺も何も長い教育論をする必要はないが、イツカ何んとかいふ大學の教授が、黙のつけ損ひをやつて、人の子一定教したではないか。如何に今の教育なるものが、生徒に不親切であるといふ事が、よく解るぢやないか。人に親切がなくて、どうして人物を養成する事が出来るか、何物でも親切を缺いたら駄目だ。親んや教育に於てをやだ。こんな世の中に生れた今の青年こそ、いゝ面の皮だ。そこで此上は、青年自身學問を憎みに彼らす、靴に穿くやうにせなければならぬ。學問を小説を読む位に心得て居れば、それで丁度いいのぢや。本と首引きの學問だから、本に書いてない事は、少しも解らんぢや。然も世の中には、本に書いてない以外の事が、中々必要なぢや。これは今時の文部省や、今の先達が、決し

最善のない現代の青年

氣骨のない現代の青年
 てどうもしては来れぬから、青年自身で氣をつけてやるの外はない。

佐久間象山

佐久間象山は喧はす嫌ひだ。我郷の先輩たる吉田松陰が、我師象山と書いて居られる。我師云々は唯業の師で、道の師ではないと屢々品川と議論した事もあるが、象山の一世を通じて俺には不承知の點が多い。人は記憶せぬが、象山が幕末時代に、或る二人の秀才が居つて學問上、到底象山が企及すべからざるものありと、宍陰先生(？)から忠告せられ、即ち毅然として儗の朱船の大刀で威かし始めたのだ。夫から彼が畏友として居つた星屋の歿後、僅に五日を隔て其未亡人に妾の周旋を頼んで、割付けられた事もあるさうな。更に直接に聞いたのは、高杉晋作が松陰先生から象山に紹介されて、江戸から徳々木曾街道を下り、始めて象山を訪ふた時、高杉は無論青年であつたが、刺を通すと社社をつけて来いといはれた。貧乏書生の輩

作に、社社のあるべき筈もない。旅宿に歸つて主人の社社を借り、漸つと會つて見ると、其態度の尊大なるは固より其談話の勢頭、世界に學者がいまだ發見せざる七個の星を發見したと吹き出した。爾來高杉はあいつは一個の法螺吹きだと輕蔑し、流石の松陰先生を驚かしたといふ事がある。四十にして五大洲を蓋ふなど、其當時は成程吹きあてだに相違ない。書を信すれば書なきに如かず、天下の史眼あるものは、眼光紙背に徹せざれば人物を評する事は出来ぬ。今や死すれば直に神となるものあり、生きながらにして神となるものあり、神さんにも無論申分があるが、神さんにケチをつけると罰が當るかも知れぬて。

鳥羽伏見の戦

戊辰戦役の總體の議論は、これまで色々の著述もあり、一通り先づ覽つて居るといはねばならぬ。そこでその大綱は語らぬ、唯此戦役の口聞けをした、正月三日

鳥羽伏見の戦

からの餘緒に就て、先が直接關係しただけの實際を語すことにする。

毛利家の勤王

處が茲に一つ前へ戻つて、大體の上に就て、一言曰ふて置かねばならぬ事がある。それはどの書籍や記録を見ても抜けて居るのぢや。その第一は、王政革新の大改革を起すといふ、根本上の問題である。この問題は形の上から論ずると、所謂討幕といふものになるけれども、實質上から考へると、討幕はその本来の目的ではない。勤王そのものが目的である。徳川幕府を倒すといふ事は、勤王實行の手段の爲めに、已むを得ざる次第であつて、討幕といふ非常手段を取つたのぢや。

それからその第二は、勤王といふ目的遂行の由來に就てであるが、最初その事に與かつた列藩中、無論何れも勤王は勤王に違ひはない様なものぢやけれど、その勤王の精神の由つて起る事情が、他藩では、色々と複雑した關係から起つたといふの

鳥羽伏見の戦

が至當であるが、毛利家の勤王といふものは、頗る純一なものであると同時に、根本的のものであつて、毛利家創始以來の因縁と、離る可からざる關係から來たのぢや。それは今日、毛利家は歴史上皇統の支流であつて、皇室とは切つても切れぬ關係にあるといふ事は、天下の諸藩中、唯毛利一家あるばかりぢや。それが歴史上では、勤王實行の上に、唯毛利家勤王實事として現はれて居る。けれども、既に開祖元就公の時代に、其の當時の朝廷は、式微衰微、申すもまことに畏れ多き御有様、戰國騷亂の世に於て、天下朝廷を顧みる者も無いに拘らず、主君大内氏の爲めに、逆臣陶氏を討伐するに當り、これを毛利一家の私戦にせず、殆ど見影もない朝廷に向つて、畏くも朝命を請はれ、武門として慎重の行動に出られたことは、固より英君元就公の、識力の卓絶した御胸中から出たものであるけれども、其の原由を深く探ねると、家の起りが王室と切つても切れぬ深縁があるといふ事に歸するのぢや。それがずつと續いて來たが、中頃、關ヶ原の悲惨な歴史もあるといふ譯で、一時

(28)

影が暗んだけれども、勤王といふものに就ては、前後些つとも變りはなかつた。世は豊臣の天下滅びで、徳川新府の時代となつてから、幕府が毛利家に對する態度は、常に制壓を事とし、百方警戒、非常に統制の眼を以て注意して居たにも拘らず、所謂參預交替の時、三度に一度は、毛利家に限つて、伏見から必ず朝廷の御機嫌伺を許して居つたものぢや。これは言ふまでもなく、毛利家の源流が朝廷から離れられぬ關係にあるから、流石の徳川も大目に見ざるを得なかつたのぢや。そこで等しく勤王といつても、他列藩の勤王は、色々様々な關係から來て居るが、長州毛利の勤王といふものは、一家の源流が、皇室と離る可からざる因縁から起つて居るのぢや。だから其の根柢が頗る深い。これは少しく其の邊の事を調べると、明白なる事實である。然るにどうしたものか、今迄此の事が、何の書籍を見ても書いてないから、一言接に加へて置く。

薩長聯合の真相

第三に、明治御一新を爲すその原動力は、薩長兩藩の共同動作といふ事になつてゐる。成程それはそうだが、これもまた物には主があり従がある。兩藩の聯合に就ては、土佐の坂本龍馬が、其の間に介在して周旋したといふ只一の出來事によつて、それが始めて起つた様に考へ込んでゐる者があるが、それは間違つた考へ方である。無論坂本の周旋が、兩藩の聯合提議に資する處はあつたが、これは何もあの時坂本の周旋で、思ひ出した様に起つといふ譯のものではないのぢや。薩州に於ても長州同様、勤王の手段として討幕を決行しなければならぬといふ事は、薩摩も既に立派な識見のある志士が澤山居つたから、トクに定まつてゐたのぢや。處が彼の伏見寺田屋の事件で、志士の多くは非常の最後を遂げ、又薩摩に於ても政府側の變更などに依つて、一時薩摩の有志間に、表面上討幕論は、一時立消えの様であつた

(29)

けれども、決して其の種は消えて居らなかつた。此の間に於て長州では、例の長井
 豊樂が出て、公式合體論を唱道した。この公式合體論とは、勤王と佐幕との折衷論
 であつて、長州本来の主張たる討幕論とは、大にその趣きを異にしてゐる。そこで
 この公式合體論は、長州の國論に反対され、遂に君命によつて却けられたから、議
 論も討幕に一變し決定したのちや。

斯くの如く、薩長兩藩に於けるその事變の大小や、行き道などには相異がある
 けれども、勤王討幕の大趣意に就ては、薩摩も最初から長州と、同じことであつた
 らうと思はれる。只この兩藩に於て異つて居る點は、長州では長井が退けられたた
 めに、全藩一段の士氣を喚起したが、薩摩は寺田屋の一件から、兎角有志の士が、
 物陰に隠れる様になつたといふ事である、つまり歴史的に勤王討幕の原因は同じぢ
 や。それがその幾多の紆餘曲折を経て、廻り廻つて、結局御一新の薩長聯合が出来た
 ので、これが實にあの折りに、唯坂本の周旋によつて、その趣意に於て全然没交渉
 な薩長兩藩が、卒然として相提携し聯合したといふ譯ではないのちや。先づ斯ふ
 いふ事を一言附加へて置く。これは餘事の様ちやけれども、戊辰戦役、王政維新と
 いふことの因みについては、これだけの事を、一應冒頭に述べて置く可き必要があ
 ると思ふのちや。

藩兵を三田尻に集む

長州では彼の國境戦争の後、慶應三年の秋、幕府から長州の家老を呼出した。其
 の間、或は大久保とか西郷とかいふ者と長州との間に、薩長共闘の語が起んで、
 薩摩も出兵する、長州からも兵を出すといふ事になつた。そこで我が長州では、薩
 兵を三田尻に集めた。此の折に集つた兵といふものは、實は今日から見ると、頗る
 少數なもので、兵の實質は兎に角、數からいつたらまあ四五百位のもので、大抵和
 蘭式の小隊編成ぢや。一小隊が四十人、餘計出しても五十とは居らなかつたと思ふ。

(32)

鳥羽伏見の戦

それが十小隊であるから、四百乃至五百位にしかならぬ。それからそれに人足から何から入れて見た所で、長州の兵は千人未満であつた。薩摩は三千といふ事になつて居る。けれどもこれも實際三千は居らぬ。二大隊と思ふ、千五百位のものであつた。

明石瀬戸の危難

扱て愈々上國の様様も定まり、兩藩聯合の保障も整つたから、長州からは毛利内匠が、兵を率ひて三田尻港を出られた。それは確か十一月の十日前後であつた。其の折り長州の軍艦といふものは、小さな蒸汽船が三つあつただけぢや。それから後は帆船船が二つしかない。これは下の關の攘夷騒動の時に、一運海底へ沈められたのを、騒動後また引き揚げて、修繕をしたものであつたが、この帆船船は、小蒸汽で引張つて行つた。すると途中で、引綱が切れて大騒動をした事が度々あつたが、

(33)

瀬戸の事で御手洗へ着いて、修繕をしたり、引綱を買集めたりして、それから明石の瀬戸へかゝつたのが、幾日かの晩であつたが、夜の十二時過ぎであつた。さうすると、突然我が船の横へ大きな軍艦がやつて来た。氣を附けの喇叭を吹いて、よくよく見ると幕府の軍艦富士艦、阿天丸と外一隻である。これは大變、チア事だと、じり／＼船を後方へやつた。陸へ上つての戦争なら兎も角、船といふ生き小荷物で死んでは大變だといつて、皆々非常に驚愕したが、向ふは大艦、こちらは小船、戦争處が動く事さへ出来ぬ。只此の間敵艦航行の妨げをせぬ様にするより外、別になんとも致方がない。其の内にこちらでは、煙筒を見た様なものを取り出して、若し撃たれたら何處へでもよいから、撃たれた穴の開いた處へ吹き込んで、應急手當をしてくれと、一生懸命になつて、防禦の用意をした。處が向ふは此方が居るものに氣がつかかなかつたものか、すつと遠くへ行つてしまつて、今は船の影さへ見えぬ。こちらは其の内に船を急がせ、漸く兵庫の打出に着いた。後になつてから此の時の様

(34)

鳥羽伏見の戦

子を聞いて見ると、薩摩人が江戸の番邸を引き揚げて、春日殿其他の船に乗つて歸還した。それを幕府の兵が追つかけて来たが、幸ひにも薩摩の方の春日殿といふのは、脚の早い艦ちやから、遂に幕府の船に追附かれなかつた。先きのはその出来事であつた、といふ事がわかつて一回大笑ひをした。

山崎關門の談判

長州勢はそこで打出へ上がり、其内に愈々京都へ這入るといふ事になつたのちや。何でも先きが急ぐから、皆々晝夜兼行でやつて居つたが、例の山崎の關門に近づくると、此所には幕室が守備を固め、嚴重に京都への出入りを取締つて居る。何でも幕室の方では、朝廷からの御沙汰がないから、長州勢の通行を差止めるといふ。ナリに此方は朝命によつて入洛するのちや、といつて双方とも盛に水掛論をやつてゐる内に、皆はこれにお構ひなく、ズンズン這入つて行く。今止めて居るのにさう這入

(35)

られては困ると、幕室の方では極力その入洛を避つた。處が丁度此の隙の中に、土佐の後藤深造、其後の宮田半四郎杯といふ、長州人以外の者が居つたが、後藤が幕室へ應接に行つて、此度主人の命令で、我等土佐の兵隊を以て長州兵を誘引せよとの君命であるから、此處此處に止まる譯には參らぬと云ふ。俄に土佐の兵隊が出來た譯だ。彼是れその應接中に、まづこれつきり這入る事は出來ぬといふのを、又ズロ／＼這入る。慌ても止める。又這入る、まるで幕室の制止をきかぬ。この談判中に長兵は、何でも晝夜兼行でやつて來たのであるから、暫な草臥れてゴ／＼寝て居たが、其の内に、モウ先方も近いから、一發撃つたら斬込んだがよからう、俺は三發彈丸を込めた、といつて居る。これ等がみな自然の働きぢや、誰も命令をせぬ其の内に誰とはなしに山越をして、粟生の光明寺の方へ廻りはじめた。斯ふなると如何に幕室の方で争つて見た處が最早や無益と諦めたらしく、只今朝命にて、通行差支へなしといふ、御沙汰があつたといひ出した。それは實は本當ではないのちや、

斯くして長州勢は、馬々と後方から追入られた。追入つて見ると、あつちでもこつちでも、塵を運び土俵で急に草場を築く最中である。この大騒ぎをしてゐる中を、此方は情に見て、粟生の光明寺へ着いたのちや。

目出度迷惑

其の翌日相國寺へ歸入つた。當時相國寺は薩摩勢の宿陣所であつた。我々はまた舊の如く、宮門の守衛を仰付けられ、相國寺から東福寺に宿陣を轉じた。而して薩摩勢は東寺に移り、専ら鳥羽街道警戒の任に當り、東福寺に居る長州勢は伏見街道の敵に當る譯となつたが、我が奇兵隊は、諸兵中の精銳と認められ、且つ首位に居る譯からして、御所の御守衛のために、後方に殘すといふことで、目出度迷惑のため先鋒には立たれぬ。そこで俺は一計を案じ出し、三日の日、俺は僅少の兵を連れ、鳥羽の戦況を視察することを名として東福寺を出た。

土産の生産

其の時幕府の兵は、段々進んで来たが、朝廷からの御命令がなければ、無論入浴は出来ぬ。入浴進捗は伏見も鳥羽も同じことぢや。處が幕兵の入浴につき、スツタモンダと談判中に、モクバリ〜やり出した。鳥羽の方面へ来たのは、幕府の歩兵と、大垣、高松、重に此の三つだ。忽ち、叩き飛ばしてしまつた。最初敵軍から應接として、田中何の守とかいふ御使番が来たが、それが一番先きに打ち取られたのぢや。俺は初陣にお目出度いから、田中の首を土産に貰ふぞといつて、その首を風呂敷に包んで、東福寺に歸つた。すると東福寺はガタガタ大騒ぎである。何事かといふと、斯ふ幕府の大兵を引き受けては、逆もいかぬ。モウ京都は動ききれぬから、實は朝廷では、丹波地へ風雲を移し申す事と相成つたとの事ぢや。其所へ飯田行藏といふて、其頃の糧重隊長と、中所仁藏といふ軍醫長とが、頻りに「今は誰も彼

も、我な戦線に出て居るから、何としても人手なしに移動は出来ぬ、彼我人も彈藥も、持ち運びがつかぬから、議論をして居る處へ俺が歸つたのちや。そこで俺は、今戰が始まつた計りぢやないか、勝つも敗けるも、夜が明けぬと分らん。それに鳥羽の方は大勝利、兎も角鳥羽口からよい土産を持つて来た。と、例の風呂敷包を指し出した。長松文輔が、これは何で無座いますかと、早速あけて見たら、血潮に染まつた田中の生首が出た。俺はこの生首を初陣のお祝ひに貰つて来たといつて、皆なといつしよに祝杯を舉げて大に飲んだ。

ヤツた締めた

其の中に夜が明けた。俺はまたどうかして出てやらう、何とかして戦線に立ちたいものと色々と思案をめぐらして居た。處が丁度其折に、色々風聲鶴唳の流言が行はれる。東福寺の裏の繪具谷といふ所へ、水戸の浪人が出て来たとか、又彼方の方

から、彦根の兵が現はれた杯と、尾鷲をつけてガヤガヤいふのちや。俺はそこで、兎に角自分が兵を連れて、行つて見て来やうといひ出した。此時井上侯も、今若きかけの處であつたが、それがよろしい。兎に角御苦勞ぢやが、君に頼むといはれる。俺は心の内でやつた、締めたと大よろこびで、一隊の半を東福寺に殘して、今夜中に何とか報知するから、報知したら直ぐ来いと言ひ置いた。その半分を率ひて、繪具谷の方へ行くといひぬけ、再びまた鳥羽の方へ向つたが、午後四時過ぎ位で、戰争を一先づ切り上げた。それはこれ以上は地形が不利であるから、明朝を期して、伏見方面と同時にやらうと薩摩と約束して、俺は更に伏見に向つた。處がその途中で或る隊が出て来たが、何分地形が不利だから、今日は止めた方がよろしいといつて、俺は其の隊を止めなければ、今初めて出て来た計りの處であるから、俺の中止を聞きませず、サツサと出たが、怒らやられた。俺は其晩伏見へ行き、或る寺に這入り、直に東福寺へ使をやり、殘りの半隊に逃く来いと知らした。彼れ是するけ

れども、此の日伏見の戦争はどうなつたか、一切わからぬ、その内に草臥れたものだから、俺は白河夜船で、ぐつすりと寝てしまつた。

俺の負傷

朝起きて見ると、最早やバタバタ音がする。モウ初めたなと思つて、只音のする方へ進んで行つた。町をすぎて千兩松原の近くに到ると、モウ伏見の手は大袈裟で味方は一兵の影さへ止めぬ。俺は淀へ向ふ千兩松の土手へかゝつて見ると、其處に薩摩の大砲が一門残つて居つた。遙に敵勢に應對して居る、成るほど今打上げられた跡だから、大砲を打つ位が圓の山ぢや。俺は何もそんな事は知らぬから、是から大砲を先きに進めといつたけれども、薩摩の大砲方はこれに應せぬ。其處で俺は氣がイライラするから、失禮と言ひ捨て、駈け出したのぢや。話が前へ戻るが、其の時味方の者共が、この土手を行つて、會津の伏兵にやられたといふ事は俺は夢にも

知らぬ、だからドン／＼駈けて行つた。すると淀近くの土手の松の間に、白いものが一寸見えたかと思ふと、バタ／＼と變な音がして、敵が土手の兩側から鎗を掲げて現はれた。所が此方は不注意にも、空銃をさげて駈出したから、突發の間に、何とも應戦のしやうがない。その内に向ふは地を這ふ様にして、キラ／＼する鎗先を揃へ、隊伍を整へて進んで来る。俺はこの場合、何とも止むを得ないから、刀を持つて座れ／＼と地をたゞし、各兵の體形を調べ、更に大勢で座れと號令した。其の内には敏捷い奴は丸込めをしてドン／＼打ち出した。向ふは此方が空筒とは思はないから、座して鎗先を向けられては急に飛びこむこともならず、双方共一時睨み合ひの姿であつたが、此の時、我隊長藤村英二郎は、勇氣に任せて軍刀を上段に構え、大勢をあげて、チチチチチチと眞先に進み、危險云ふ可からざる有様であつたから、俺は藤村の體形をつかんで引き戻した。此の時討ちあつても、俺は足を棒か何かで打たれた様な氣がして、土手の上から轉び落らした。草を攀ちて這ひ上れば、また落らる。

(42) そこでどうしたのかと思つて、靜に足部をしらべて見ると、血がダラ／＼流れる。キア是れは打れたなと、初めて気がつき、刀を鞘に納め座つたなりで、モウよいから行け／＼と、一氣に攻め立てた、此の勢でやつたから敵の鎧隊は全滅したのぢや。

伏見、淀、大阪の戦勝

我が隊は橋に掛つて臺場を築いたが、俺は其の間に一同が聲をかけて、勇ましく突進するのを見て、これならよい、淀も一氣に落すであらうと思ふて微笑を洩らした。何分負傷してゐるから、其の内に後方に送り返された。此處の地形は、道は一本筋であつて、左右は河と沼とであるから、一時に多数の兵が前進することは出来ぬ、全く屍が塞がつて居る。それで物といふものは、知るも良しまた知らぬもよし、前に鎧隊の鎧襖に、味方の者共がやられた事を聞いて居たり、かゝる地形の處で、あんな無茶駆もせなかつたであらう。さうなればこの大勝の結果も得られなかつたに違ひないのぢや。それは兎に角として、一氣に淀を落してから、大阪までは一萬千里、戦争はそれで止んだのぢや。それが五日の午前で、十二時迄に淀城は落ちた。處が埜に面白いのは、初め我が長州勢の入洛を、山崎の關門で遮つた、あの難攻の兵が、今度は初めと打つてかはつて、幕兵の逃げる奴を、横合から打出したから堪らない、幕兵はナンザンに破れた。

藤村の戦死

俺は俺我をして東福寺へ戻つたが、百姓が袋で梅らへた、所謂雜物を入れるフオに乗せて貰つた。此の時山本常次郎といふ奴が、是れ頼むといつて、俺の膝の上に重い包んだものを置いていつたが、それは何かしらぬ。途中の病院で療治をしてやらうといふ。その療治といふのは、焼酎で傷口を洗ふのぢや。そんな事をされて堪るものか。長州では最早や、そんな馬鹿な療治はしない、それは御免を蒙るといつ

て、東福寺の病院に這入つた。モウ定は落してしまつた、それで終つとも心配はない。東福寺へ歸つて、常附いて風呂敷包を取つて見たら、これ意外にも藤村の首ちや。勝敗期す可からず、何分吾戰の事だから、敵に取られぬ様に、藤村の首を掻き取つたのは、山本の周到な注意である。俺は藤村が戦死した事を今初めて知つて、悲傷に堪へざるのあまり、大聲をあげて啼いた。さうすると誰やら、一寸俺の脊中を叩く者がある、見ると鳥尾ちや。これも矢張り鬨帯をしてゐる、共に藤村の死を驚き且つ悲んだ。この戦で最も親密と頼む三人の友人が、二人は負傷し、一人は戦死したのちや。

藤村の人物

藤村といふ男は、歳は十九であつた、頗る英邁な男であつた。初め打出村上陸の時、遙かに淺川を指して、あの邊が淺川であらうといふて、腰の矢立を取り出し、

淺川きくより船の早きにて
膝折にするひまもなかりき

と一首の歌を作つて見せた。勇氣もあり學才もあつた男だが、實に惜しい事をした。藤村の兄の太郎といふ男も、既に國難の折りに繪堂の戦で戦死した。たつた二人きりの男の子を、兩方とも失つたその母親の心事は、如何にも氣の毒である。その後氣衰の時語堂の席に、藤村の母御は兩度出られた事がある。その時は、いつも先きになつて、歌つたり踊つたりなどして、我が内心の悲願を、踊りや歌にまぎらして居られたのは、その心の裏は如何にも哀れであつた。

千兩松原の役物語

此の戦争の時に、會津藩隊の中にあつて、いまだ生存してゐるものの中に、與津某といふ八十に近い老人がある。其息子が大藏省の官吏をしてゐるが、その息子が

(44)

盛日（きんじつ）俺（おれ）にいよには、父は戊辰（ごしん）の折りに、伏見（ふし見）で戦つた會津藩隊（えいしんはんたい）の生き残りであるが、あなたにお目にかよつたら、聞いて見てくれろと申しました。それは、あの伏見の戦争の折に、あなたがお出でになつたが、あの折り千瀬松の土手の上で、長州の隊長が刀を抜いて、逃げる部下の兵士を斬つて居つた。あれは誰であるか、と訊いた。そこで俺は當時を思ひ出して、それは私だ。あれは斬つたのではない、突撃の場合に、後へ引いてはいかぬ、座れ〜といつて、刀で地を叩いて居たから、向ふから見ると、丁度兵を斬る様に見えたであらう、といつて大笑ひをした事もある。それから六月になつて、負傷も平癒して、俺は早速越後口の戦争へ出かけたが、此の方面の戦争には、丁度中途から参つた譯であるから、精しい事は最初から参戦したものに訊くがよい。俺は唯京都方面の口切り戦争の話だけに止めておく。

萩の 前原

事件の原因

(45)

多く記憶も多きはんやりして、地名や人名なども忘れたものも多いから、其時分の記録でも調べて見なければ、充分精確な事は述べられないと思ふ。

一體、前原騒動でも、佐賀の暴徒でも、熊本の亂でも、又西南の役でも、畢竟同主意から起つた事で、前原なり、江藤なり、西郷なりが、急激なる歐化主義に反對した意見を以て居たのが、其の根本義であつた。而して、彼の征韓論が近因とも、導火線ともなつて、各地に暴卒の火の手が揚つた譯けなや。ちやから、よし自分等とは意見を異にしたにしろ、暫く不平を抑へて、同じく廟堂に立つて居れば、其中に自然と互の諒多も出来、融和もはかられる機會もあつて、あんな結局を見ないで

(48)

も済んだのちや、よし又、假令官を辭したにしろ、同じ東京に居れば、友人の往復もあつて、其間に、次第と折合ふ様にもなつて来るのちやが、官を辭した、田舎へは引込んだ、とあつては、意思疎通の導線が全く断たれた事になつて了ふ。其上、人の噂や、世の風評と云ふものには、尾に鱗が附くものであるから、相互の間に設けられた溝渠は益々深くなる許りで、遂にはあゝした行動に出なければならぬ様に、徐々なくされた事は實に残念な次第な事ぢや。

斯様いふ行きがかりで、佐賀には江藤が亂を起し、續いて熊本には、神風連が暴動を起して、一夜の中に、總司令官種田少將以下多くの官吏を惨殺し、非常な猛威を振つて、九州を席捲すると云ふ報道が傳はつたので、其の鎮撫の爲めに、故の大山大將と林友幸と佐の三名が熊本へ急行すべく命令されたので、大坂から汽船に乗つて出かける事になつたのだ。其の汽船は鹿兒島から航納された吉野丸と云ふので、其頃では最も快速な汽船であつたから、割合に早く小倉に着く事が出来た。

(49)

小倉に着いて見ると、政府から電報が來た。其の電文の意味は、決して前原が暴動を起したから、三浦は直ちに山口へ急行して、其急急の手段をとり、他の二人は豫定の如く熊本へ進行すべしと云ふ命令ぢやつた。そこで、大山と林は、引連れて行つた人数を纏めて、直ちに熊本へ向つて進發した。佐は單獨で山口へ行く事になつたが、山口方面の消息が、一向に分つて居ないから、一先漁舟で馬關へ渡つた。此處でも矢張り雲を圍む様な消息のみで、更に偵察が判別されない。併し風評丈はなか／＼高い。やれ山口は敵の暴徒の手中に歸し、聯合も殺された、誰も惨殺されたと、噂して居るかと思へば、山口は未だ安全だ、暴徒は未だ其途中までしか來て居ない、僅か十八里の馬關と山口との間で、其の風評は所様であつた。尚ほ其の眞狀が明かにされないで、兎に角、山口まで行つて見なければ仕方がないと決心して再び軍備で山口へ急行した。山口へ着いて見ると、色々に騒いで居たが、先づ無事で、略ぼ實狀も明かにする事が出来た。

萩の前原

萩の逆襲

山口には、其當時一大隊の兵が駐在して居たが、萩の騒動が傳はつて来たので、聯合が大隊長と、一中隊の兵を引率して、状況視察の爲めに、萩へ向つて出發した。其以前、既に前原は、其の同志を纏めて萩を圍立したが、山口へは向はないで、北海岸を東に傳つて、地方を設き附け、北國筋へでも出るか、それとも廣島附近へでも出て、鎮臺でも襲ふかと云ふ方針でもあつたらしい。それだから、聯合なり大隊長が萩に着いた時には、前原の徒黨は、萩の土地には居なかつた。が、血氣壯んな前原の徒黨は、其の風評を耳にすると、大に怒つて、何に官兵が来たとあれば、引返して一泡吹かせて、出陣の血祭にせう、行掛の駄賃だと云ふ意氣込みで、引返して来たと云ふ事である。

丁度、晝は十二時頃、山口から行つた逆中や兵隊などが休憩して飯を喰つて居る

萩の前原

萩の包圍

最中引返した前原の徒黨が、ドクと間を作つて襲撃して来た。官兵も即時に此れに應じて、中を距て、對戦する事になつた。其の結果の爲めに、聯合は逃げ、大隊長、隊士好和は負傷して、兵士の死傷も多いと云ふ注進がドクへ山口へ来た。余が山口へ着いたのは、其少し前だから、殘餘の兵を擧げて、應戦の爲めに、萩へ出發せやうかとも考へたが、さうすれば山口が空虚になる、此時作戦高層、山口を以て主編として居たので、若し一朝敵の乘する處となつては一大事である。殊に毛利の支那たる徳山では、前原に一味して居ると云ふ風説も専らで、いや、之れは風評許りではない、信すべき事實もあつたから、到底山口は空虚にして置く事は出来な

い。どうしたら宜いかと考へて居る矢先に、都合よく、廣島司令官に任ずると云ふ政府からの電報に接する事が出来た。

(註) 前原

之れで自由に兵を動かす事が出来るから、手配を定めて、先づ廣島鎮守に、歩兵二大隊、騎隊長之を率ひて、晝夜兼行、山城郡を経て、北海岸に出て、進軍し來れと云ふ命令を發した。此れは、中國を中斷して、四備地方へ出やうとする、敵の方針を挫くと同時に、敵の逃路を遮断するの計略であつた。又大阪へは之れと同時に、歩兵一大隊と、砲兵一中隊とを、山口へ向けて至急派遣して來れる様に請求した。之れは、其の頃にしては非常に迅速で、二晝夜にして山口へは到着した。そこで此の命令を發すると同時に、余は實地を見聞するの必要より、又た單獨で萩へ向つて出發した。山口と萩とは、其頃では七里と謂つて居たが、頗る間延びがして十里餘りは充分あつた。それに大山脈が横過して居るので、非常な惡路であつたから一日で往復するなどは、一應の手段では出来なかつた。併し解時も忽せにする事の出来ない時であつたから、余は大急行で、朝に戰場を觀察して、夕方に漸やく歸り着いたが、輻の先引き後押しで、人足の二十人許りもかゝつたのである。

(註)

又た海軍からは、今の有地中將が艦長で、一隻の砲艦を續して、馬關の港へ着いたと云ふ報知があつたから、之れは時日を期して、萩沖へ廻はつて來れる様に約束した。之れで全く萩は包圍された事になる。そこで余は、大阪の兵が着くと同時に出發して、夕方には萩に着いた。そして翌朝の一戦で、全く敵を撃退し待たので一日にして萩の區域は靜謐に歸したのである。其内に、山城郡から迂迴して來た廣島の一大隊も無事に到着したので、始めて、前原は、先に縣令等の來たのを見て、引退した途中の中へは這入つて居なかつたと云ふ事が明かにされた。前原は、後になつて、島根縣の何所(忘れた)かに匿れて居たのを捕へられて、其騒動は殆ど全落着いた次第である。

前原の行衛

其の以前、前原も引退した中に居る事と思ひ、よし又居ないにしろ、轉信して届

萩の前原

蘇の自序

くだらうと思つて、嘗て新聞やなどに出た、例の手紙を敢陳に送つたのぢや。が、
 届いて居なかつたらしい。其文句は忘れたが、主意を云ふて見ると、先づ願書を
 明かにして置いて、天下の大勢に及び、さて、今の時勢は君の考へる様なものぢや
 ないから、速かに歸順して、己れ一身の爲めに、大勢の人に難儀をかけてはならぬ
 俺は今も朝命を奉じて、君を征伐に來たが、親友の誼を以て注考するから、速かに
 所決する様に、と云ふのであつた。

此の騒動の爲めに、尤も氣の毒に堪えなかつたのは、前原の父と、玉木文之丞と
 云ふ二人の老人の事だ。此の二人は共に七十を過ぎた老人であつて、騒動には一
 向關係して居なかつたのであるが、自分等の子弟が、御上に對してかゝる不都合を
 働いたのは、實に面目次第もないと云つて、見事割腹して相果てられた。實に氣の
 毒千萬な事である。が、併し、貴の武士が、其の責任を重んずる事の如何に嚴格で
 あつたと云ふ事が、之れで見ても分るぢやないか。

二十二年、憲法發布式の時、大赦が行はれて、西郷等を始め、江藤、前原皆罪を許
 されたが、余の郷里の先輩等も主唱となつて、西郷等の爲めに祭典を催すとか、祝
 宴を開くとか云つて、騒ぎ起つて居たが、一人として前原の事に及ぶものがなかつ
 たのは残念である。

涙なき同郷の先輩

西郷として、前原として心事は前に述べた通り、更に變つた處の有るではないのに、
 一には厚くして、一つには薄いと云ふ事は、實に遺憾に思はれる。殊に同郷者より
 見れば、世間が此の有様に見れば、更に同情の増して來なければならぬわけであ
 るが、然るに、前原に對しては、同郷者の一人として、祭典も、祝宴も、聞いてや
 らうとするものもないから、余は其折、貴族院の相取と、林友幸を發起者に加へ
 て、紅十字館に於て、前原の爲めに祭典を催した事があつた。其時、同郷の先輩は

(54)

蘇の新聞

一人も参會して来れず、集まつたものは皆後進の輩と、書生連位であつたから、式も至つて賀表に行ひ、多少の金も剩つた故、前原の母と、其末亡人にと送つた所、非常に篤き禮狀を送られた。今も尚ほ残つて居る。

又た二十五年、始めて山口に歸省した時、表に行つたが、其翌朝直ちに前原の家を訪ふた。それには、前後の内に、前原の一族、又は故舊の人々に來着して来れる様にと、言ひ送つて置いたから、皆な揃つて集まつて来れた。そこで人々に向ひ、余と前原とは、昔親友であつたが、其後一朝事あつて、あゝして敵味方となつた次第である。併し今日では何等の隔てる雲もない。昔の親友に返つて、昔様と共に此の供養を營む次第である。と話したら、一族の人々は厚く體を遣へ、且つ皆で涙を浮べて居た。余も亦た感慨の念に堪えず、胸塞がり言葉の出ない有様であつた。實に人生の變遷は豫想し難く、一に運命の手に支配されるものである。

勝海舟

勝海舟、機智の人であつたらうが、俺は好かぬ人であつた。あの海軍卿は何を成し得たか、身を處する事は巧みであつたらうが、夫れがあつた時代に、あの弊風を打破するに何の効果があつたか、西南戦争の時にも、彼を起して南海軍に説かしむべく鼓吹された事があつた。江戸城引渡以來互に知己を以て相許したとすれば、十年の時に彼は最も適當なる役目であつた。然るに彼は巧みに、之れを避けた。城山懐古の一篇は後世に殘るだらうが、達人の大觀なるものは、こんな無責任のものであらうか、それは疑問ぢや。

山岡鐵舟

神主の勤王論と、劍術道ひの眞劍勝負は知れたものだ。山岡鐵舟といへば、聲

(57)

勝海舟 山岡鐵舟

(8)

山岡 舟

の名人と呼ばれた男だ。然るに山岡が斬付たといふ薄井龍之の劍痕を見ると、苟くも人を殺すといふ目的の下に、斬つたものとしては、あまりに手薄である。薄井といへば彼が話した事がある、あの英學者の中村敬字の母の事だ。何でも其頃中村が廢帝論を唱へたといふ事が、誰いふとなく傳へられたから、薄井一派の若者が、五六人オットリ刀で中村の宅に押しかけた。敬字不在といふときかばこそ、血氣に逸る面々土足の儘、亂入する、一同に向ひ「私は敬字の母で御座いますが、見れば御一同土足の儘である、凡そ武士たるもの、聞には、式作法もあるものを、此爲體を拜見しますれば、何か火急の事にも存せらるゝ、全體何事でも御座います」と来た「實は御息敬字どのの廢帝論一條だ」といふと母はきつとなり「敬字が果して左様の事を申したとなれば、第一此母が承知なりません。不束ながら貴公方の御手は借らずとも、私が成敗仕ります。たゞ本人只今不在で此れは追つて歸宅の上、確と取質して御返事に及びますれば、明朝再び御出で下さるやうに願ひます」と追られ

た時には、一同顔を見合せて返す辭もなく、背に汗を流したと薄井が話した事があ
る。今のハイカラ女に聞かしてやつてくれ。

西郷の眞價

蟲負の引き倒し

西郷の眞價に就いては、世間往々間違つた議論をするものがある。それが殊に薩州人に多い様ぢや。全體薩州人は、西郷の眞の眞價を知らないといふて宜い。此れは、つまり西郷をいやが上にも高くしやうと思つて、何にもかも、西郷がやつたやうにして子ふから、蟲負の引き倒しで、西郷の其の眞價を没却して、ほんくら以下にまで落して下事になるのぢや。

西郷だからと云ふて人間ぢやから、多少の缺點も有り、左様完全無缺な神様ぢや

西郷の眞價

(9)

ない。有形上の點から云へば西郷も別に何んも云ふ事もないが、無形上の點に於て實に西郷の家かつた所が分る。夫れを凡夫心の淺から、西郷の無形的に深い所のあつたのが、分らない爲めに、自分等の考へで、家相に思はれるものをして、あれも西郷が、此れも西郷がと、家相な物の展覽會々場にして居る。それが、西郷をつひ凡夫以下に落す所以の道である事を知らない。英雄の心、只だ英雄が知るとか云ふが、凡夫に知られないで、其の眞價を滅却され相にする、其處にまた西郷の深い所があつたかも知れぬ。

情の人西郷

西郷の美點は情に厚い、慈悲深い、全く自己と云ふものが眼中になかつた點に有る。十年の役などでも、あれ位の成敗利害の分らない男ではない、あゝなる事は整然と西郷の心の底では分りきつて居たが、多年相提携した子分等の、みすゞ河に

沈んで行くのを、彼の説もろい心は、それを我れ聞せず焉と、所觀して居る事を許さなかつた。逆賊と云はるれば云はれても、此れ迄に我子の様にして来た健兒の爲めに、彼等が思ふ存分に、やればやらせてやれと云ふ心から、健兒に押されるまゝに陣頭にも立つた。彼れは彼れの云ひなり次第に引き廻はされて、從容として死を待つて居たのちや。

私學校の生徒が、事を擧げやうとして、火藥を投擲したと云ふ事を西郷に話した時に、西郷はこれまでになく立腹したさうぢやと云ふ人もあるが、こんなものも矢張り最負の引き倒して、そんな事なら、西郷も亦凡夫以下のものぢや。三年も引つ込んで居て、其間に子分共がどういふ事をする、どう云ふ成り行きになると云ふ事も知らずに、愈々と云ふ場合になつて、初めて分つて立腹するなどは、尋常人以下の考へと云つても宜い、又分つたとしても、それ迄は、叱りもせず、止めもしないで、其の場合になつて立腹すると云ふならば、それは益々目先の見えぬ凡くから、其場

合になつて立腹したとて止立てしたつて、止まりつこはない事を知らない様ぢや、西郷も少々心細い人物になる様ぢや。勝負の引き餌しも、此處に至れば、又極まれりと云ふべきぢや。凡人の心を以て、英雄の心事を付度せうとなると、其結果は斯様いふ間違ひになつて來るやうぢや。

温 泉 宿

河野主一と野村忍助から聞いた事ぢやが、私學校の連中が、愈々事を擧げると云ふ日は、西郷は近郷の温泉へ往つて居た相ぢや。其處でこれくたこと聞かされた時には、ウン左様か……と云つた切り、温泉旅館の柱に、首を凭せて、眠と暫時瞑目したまふぢやつた相だ。稍々暫時くしてから、靜かに眼を開ひて、左様か、それぢや俺も歸るから、お前達は一足先へ歸れと云つて、自分の者共を歸しておいて、後から一人深然と宿を立つて歸つて行つた相ぢや。其處ぢや。左様なくて

はならぬ處ぢや。其處に、西郷の西郷たる眞價があり、又た偉大な尊さがあるのぢや。それだから、あゝ云ふ拙い戦争をしたり、ふざまな眞價をしても、一向に構はず、毎日子供等を集めて、座り相撲をとつたり、冗談を云つたり、兎釋をしたりして居られた譯けぢや。それで終始別府新助に向つて「オイ俺どんが死んでよか時が來たら、此れを頼むせ」と云つて、頸を叩ひて見せて居た相ぢや。其れを謂つて別府が、先生のあれには困ると苦笑して居たといふが全く左様であらう。

西郷の胸中、眞に豁如たり

いくら自分の一身を、自分の犠牲に供したとはいへ、見て居る前で、無謀極まる戦をしたたり、或は色々ふざまなねをししたりされて、人間として生き居る以上は、つひ小言の一つも云ひたくなるのが人情ぢや。それを一言半句も干渉せずに、河野以上の我武者な連中のやり次第に全然任せ切つて居たと云ふ點に至つては、今古東西

幾千年來の歴史にも、まだ其の例を見ない豪らひ處で、西郷の眞價も此處から見なければ分るものぢやない。眞に西郷が萬人に卓越して居た所は此處であるに、凡人は凡知でもつて種々考へて見て、あゝも豪らくせやう、斯様も豪らく思つて、何にもかも指揮してやつたなら、あんなへまな戦もやるまいし又、新政——だの、賈札の幾多反逆に類したつまらぬ事を行ふ筈がない。甘んじて自分の犠牲たるを覺悟して居たからこそ、あちらに引張られたり、此方に引き廻はされて、平然として、あの最期をなして居る、あれが實に尋常人間の爲し難い處だ。

英雄の心事一人英雄ぞ知る

柴田勝家ですら、時勢の順應を知つて居たからこそ、一戦の敗をとつた後、尙ほなすべき手段は幾何もあるにかゝはらず、前田利家に勸めて、秀吉と和を講せしめ、

自分は從容として自殺して居るではないか。天命の如何を知り、時勢の非を悟ると共に、多くの無辜の民を苦しめる事の愚なるを知つて、斯様した立派な處決をして居る。然るに西郷が若し自分で指揮をして居たと云ふなれば、時勢の非も知らず、所在罪を犯し土地の人民にあれ丈の迷惑をかける迄、己の非を遂げやうとして、あそこまで押して行つたものとするが、さらば時勢を見る事、一個武士たる柴田勝家にも及ばざる處しと云はなければならぬ。若しも又、知つて非を遂げたと云ふならば、其の無道は天地に容れられざる暴將の行ひと云はなければならぬ。多く西郷を眞價にする、薩州人の果して何の答へがあるか。流石は此點に至つては海舟は豪かつた。西郷の此の美點を認めて、此の事をいつて居る。全く西郷の美點といへば、斯様した處にあるので、常人の容易に考へ及ばず事が出来ない。西郷として人間である以上は、缺點もあつたのは云ふ迄もない。彼れを有形的に見れば、たゞの一文奴と大差はない。此の家ひ處は、人情に厚い涙の多い、全く自己を没却した無形的な處にな

るので、矢多羅に家らひ者にせうとするのは、却つてひいきの引き倒しになる許りである。それは畢竟西郷を有形的に見る凡眼の患ひである。有形的に見て凡人たる西郷を、有形的偉人に仕立させようとする處に、此の滑稽が生ずるのちや、英雄の心は英雄が知るぢやらうよ。

犠牲の精神

犠牲の意義

犠牲的人物だと云へば、それはビンからキリまである。何んとか云ふ若い士官であつたが飛行機からおつこちで死んだのも、俗世間の眼から見れば矢つ張り犠牲だらうし、同年かの焼打で殺されたのも、犠牲だと云へば、それまでの事である。併し犠牲にも有形的なものと、無形的なものとある。見方に依つては随分と違ひ犠牲的人物

もある。

俺が、一雷成服してゐる所では、まあ老西郷だらうよ、此の先生の履歴や何かは、今更事々しく述べ立てる必要もない。西郷の西郷たる根本的意義が、果をしてあの境涯にまで、立至らしめたる所以の唯一點、此處が云ふに云はれぬ西郷の頼もしひ處だ。薩南の健兒が、あれ丈の事をしてのけたのに、西郷は全く與かつて居らんだつた。

西南事件の當初から、少しも割策に參じて居らんだつた。西郷の全く與り知らん間に、健兒等は既に軍樂庫を奪ひ、歴然として亂を爲す勢を示したつた。果等の言ふ所を聞けば、西郷を陣頭に立てるといふのであつた。亂既に發して後、西郷の處へ、どつかと後釜を擔ぎ込んで來た。その時、西郷は何んとした。

おひどんの首が必要か

(63)

一通り、我等の語る所を聞き終つて、西郷は頭を柱に打付けて、目を瞑つたまひ、ソツと暫時考へ込んだ。其瞬間は、煙草を吸つて居つたかどうか、それは知らん、此瞬間西郷の胸中、最早大なる犠牲を拂つて居たのである。事密しく敗れて、城山の落と消えるといふ事も、自分の死後は天下の形勢がどうなるといふ事も、ちやんと其中に含まれて居る。俗世間の思想では考へつけん特權の下されん、千萬無量の感慨が、其中に托されてあつたのである。

此場合、微細な事には、些とも心が向か無つたと思はれる。世間徳の所謂「順」の節目には頓着せぬと決心した後、幕がる老體で役に立ては契斗をつけて呉れてやると、即座に決答してやつたと云ふ如きは、到底凡人の計り知るべからざる、偉大なる犠牲的精神である。非常の時として、何事も何物も眼中にはない。長年親を慕つて来た子供等が「是非に」とせがむのだ。今は順逆のヘチマのと被是いふとる時ではない。宜しい、首ヲ玉をくれてやるから持つて行け官軍 賊軍、名前は何んどても

附けえ、之れが老西郷の、實際の心事であつたらう。

戦争は大分長く継続したが、此の長年月の間、熊本に出で、可爰處に敗れ、末期の時に至る迄で、一言半句と雖も、戦争の事に關係しなかつた。下手をやる。間違つた事を仕出かすが、老西郷は片言隻句たりと雖も、是もいはず、非も云はず、多人數の爲すがまにまに、遂にあ、云ふ悲れな末期を遂げるに至つた。而も其事たるや始めから歴々と掌を指すが如く、柱に凭掛つて瞑目しつゝある間に於て、モウ充分な含蓄があつたのである。併し後に至つて、西南事件には西郷自ら與らざることが、明白になつたので、子孫は侯爵にまで叙せられた。此れは西郷が少しも豫めせざるところで、而も極端にまで至つた實例である。

是非分別を離れて、首ヲ玉に腕手をつけて投げ出すなどは、逆も普通一般の人間には解るまい。問題が無形になつて來るから、解る丈の頭が今時の世人にはない。其處で、飛んだ飛行機や、焼打の途中にまで、犠牲的精神の御接待に與る事になる。

(60)

大尊、僅耳に入らずとは此事である。まあ、他の見た處では、其の犧牲者と云ふし、老西郷ぢや。蓋し、此れだけは忘れてはならぬ。幾何西郷が大きな犠牲を拂つたからと云ふても、全世界の大聖孔子だとか、空前絶後の精進だとか云ふものと来ては別問題である。同じ犠牲者にしても、同じ壇上で語は出来ぬ。孔子精進の御兩人などは、又アナンデ問題が違つて来る。

西野文太郎

俺との初対面

西野文太郎との因縁は斯うぢや。何年の頃であつたか、俺が長州へ歸へると云ふ噂が新聞にのつた事がある。すると、夫れをきっかけに一青年が訪ねて来て「私も

長州のものです、此度御歸國と承はり、乍失禮を願があつて罷り出た。外の事でも云らぬが、國に居ります老母の許へ、只だ一つの肩物が願ひたいとある。歸國の事は事實無根ぢやが、國への肩物ならこちらでしてやるから、まあ上がれといつたが初対面ぢや。スルと青年は、頻りに防長三州土氣の類服を説き、今にして之を恢復せすんば、維新當時の元氣は銷磨して仕舞ふ。其回復手段としては、俺に歸國して青年を指導せよといふ議論である。夫から色々話して見ると、なかなか確かりして居るから、以來時々話しに來いと云つて歸したが、老母への肩物とは、俺に面會を求むる一端であつたらしい。

兎に角小遣取りでもして、學問をせよと云ふてきかせて、其頃内務省に居つた原川魁介といふ者に頼んで、嚴禁生活で餘暇に勉勵する事になり、土曜日日曜日には下宿屋から、乾度宅に來て、本箱から引すり出して、本を讀んで居つたものだ。

原川の説諭

處が廿一年奈良に行つて、歸途伊勢大福に参拜して、森の事實を聞いたらしい。あの騒ぎの當時、俺は熱海に居つたから何も知らなかつたが、突然西野が森を刺したとの電報が来た。可哀想に誰も引取人がなからう、原川も迷惑だらう。よし俺が高事死後の世話をしてやらうと。そこで俺の名で死骸を引取れと電報を出しておいて、俺は新橋に着くや否や、今川小路なる彼の下宿に行つて、萬事葬式の指圖などをしてたのみか、葬式の日には、俺は馬車で葬送者の一人となつた。當時俺の頭には、只だ可哀想な事をした。死者に恩怨は無し、有縁の者が同向をしてやるのに、何の不思議はないと思つて、何事も無心で居るから、警視廳が俺の身邊に、嫌疑の眼を注いで居るなどは無論夢にも知らなかつた。

段々原川に聞いて見ると、決行の數日前、西野が来て一個の包物を出しながら、

三浦さんが歸られたら之を渡してくれといつて、何気なくいつては居るものゝ、ドコか不審と異つて居る様子が見える。マア緩くり夕食でも共にしやうといつて對座して居ると、胸のあたりに白箱の端が見えた。ナテ不思議と思つて原川が「何か思詰めた事があらう、委細を包まず話したらどうだ」と圖星をさゝりて、西野は實はこれこれだと白状する。原川は懇々その不心得を説諭すると、西野は私も餘程考へた上の決心でゐる。一夕の御説諭でまだ初一念を續へす事は出来ませぬ。併し其身體は今明日中に決行せねばならぬ事でもムりませねば、更に熟考した上の事に致します。夫迄は此短刀は隠んで貴殿にお預りを願ひますと、包物と一緒にそこへ投出して仕舞つたさうな、是が出刃を用ゐる事になつた次第である。

御門違ひの御禮

斯んな事も歸つてから聞いた事である。すると成日の事、突然海江田信義と、吉

田清成が俺の宅へ訪ねて来た、何事かと思ふて居ると、イキナリ御禮を言ふ。俺も少々前坐つた。全體何の事だ。イヤ實にヨクやつて呉れた、事體森といふ奴は昔から國體を無視する論者だ。明治の初年森から選ばれて洋行した時、我々兩人は米國で、既に森と刺違へて死なうと思つたが、こゝで死んでも大死だと我慢しつゝ、到頭今日まで来たのであつた。面目ないが實は今日其お禮に来たのだ。といふ。何度言譯しても、どうしても承知せぬ。とうとう俺を暗殺の要本人にして歸つていつた。

検事の懺悔談

夫から何年立つたか、或日の事、當時検事をして居つた阿南尚と、林某とが訪ねて来て、實は今日偵察に来たといふ。段々聞くに西野一件だ。實はあの時、モウ貴公を縛らうか、モウ縛らうかと考へた。併しマア待てイカニ貴公が、大膽不敵だといふ言ひながら、本當の殺敵者なら、アンナ公然たる態度は取れぬ筈だ。死體引取の

電報から刺違のお供まで、アンマリ平氣過ぎるモ少し待たう、モ少し待たうと言ふて居る内、何分證據がないのでよう縛らなんだ、と話した事があつた。嫌疑の限と無心の仕事、世の中の事は愛に味が存するのぢや。

杉村濬と王妃事件

朝鮮事件は杉村の筋書

朝鮮事件で知つたのが、楠瀬幸彦と杉村濬だ。楠瀬は近頃やつと身を出したが、杉村は不幸にして我々少數の人の外には、其有爲の大材である事を知られずに仕舞つた。朝鮮に行くまでは俺も杉村も共に知合でなかつたが、赴任の時、仁川迄出迎に来てくれた。其の時船の中の雑談が彼の留任する動機となつたのぢやさうな。當時彼は外務省に歸る事になつて居たのだが、俺が話の節で、コイツ何か仕さうだと

思つたから、阻止まつたのだと後で彼自身が話して居つた。アノ事件は昔な杉村の篤書ぢや。俺の役目は、無論井上の尻扶ひさ。對韓方針につき何度問うても、廟議で指圖をせぬから、俺の方針でやつたのさ。

閔妃は傑物

閔妃は無敵傑物ぢや。呂公や西太后のお仲間ともいへやう。俺が拜謁の時などは王の背後から常に練を巻いて居られた。大院君も一種の烏雄だ。日本代々の公使は朝毎に赴任すると、早速大院君の許へベコ／＼して行つたものさ。處が俺は、惣と一度も行なかつた。萬事歴代公使の裏をいつたのさ。

杉村の手習、當夜の出生

俺が杉村をエウイと思つたのは其夜の事さ。其前から世間を装ふために、公使館では天孫降の用意といふ事に就して、人の世人の目立たぬやうにしてあつたが、何といつたものか、其晩方に某々二國の公使が突然やつて来て、何か覗き出した様な語氣がある。丁度其晩日本領事の祝宴會があつたので、俺は之からそこへ行く處だ。どうだ御一緒に參らうかと言ふと、二人共安心の體で歸つて行つた。俺は宴會の席で徳と夜を更かし、歸つて杉村の部屋に行くと、杉村は今しも獨り机に對して、靜かに手習をして居る。「マダ少し時間がありますから、お休みなつたらどうです。其時にはお知らせします」と平然として居る。其内藤君が子を産むといふ願ががあつて、俺は室に引取つたが、今將に一大事を擧げんとする其時に、悠然として手習をして居つた彼の態度を見た時は、俺は以て大事を托するに足ると、大に意を強うした、不幸今や此人亡し。

朝鮮事件と廣島監獄

(78)

昔の奴は決して口は達者ではなかつたが、其のする事を見ると、行なつた事にはどつしりした偉い處があつた。

俺も首は朝鮮事件では、廣島の牢に入れられたが、其時……一體俺も負けぬ氣のつひち曲りだつたから、大に癪に障つたのぢや。自分で頭の毛を引き搦つたやうな事も有つた。

廣島の監獄で俺を風呂に入れるとだまして、裸にして調べたから、大に癪に障つた。すると二三日経つてから、ふいと氣がつひた。俺は其時に格子の中に入れられて居たが、其時格子の中に居て考へて見れば、格子の外に居る奴が皆な國賊で、格子の中の俺は、立派なものであつた。と斯く思つて見た。すると何處か氣が噎々して、次第に心が愉快になつた。自分で自分の髪を濯ぐ様な事もなくなつた。

それから俺が、東京に歸る、と云ふ時に、田中首相が、伊藤さんからだと云つて來て、東京青生連が君を迎へると云つてゐるから、君は其中に君も這入らない様にせんと、君の爲めによくないぞと云つたから、俺は斯く言つてやつた。

「伊藤さんが、そんなに親切があるなら、大臣の一人や二人はよこして、俺のやつた事を聞いたらいよいよではないか」と答へてやつた。

其時、谷(故谷干城)の夫婦が静岡まで迎へに來て呉れて居たが、汽車の中の話に、

「俺はもと／＼熱海の山に居たのだから、此の儘熱海の山へ歸つて了ふと思つてる」と云ふと、谷夫婦が、

「まあ一遍東京へ歸れよ」

(79)

と違りにいふので、一緒に其まゝ東京へ歸つたがそれから三日目に、熱海の山へ歸つて行つた。俺はもとゞ熱海の山に居たのを、無理に引張出されて、朝鮮三景にやられたのだから、山に歸るは自然だらう。

國民と憲法

憲法と國民精神

伊藤さんが矢多羅に憲法、憲法と云つて、憲法のお蔭で、日本の國家が出来上つた様に云ふて居た。憲法の出来な以前に日本人は、まるで黒闇の中に居た様な事を……左様な餘計な事を云つて何にする。これだから國家に元氣がなくなるのちや。何にも左様なものが出来なかつて、國民は其位な事は皆な判つてる筈だ。憲法が出来た爲に、國が繁昌すると云ふのなら、土耳其やペルシャは、大家昌して居る日

ればならんぢやないか、それが愚鈍ぢや、皆な亡びかゝつて居るではないか。

いくら憲法があつたつて、國民に其の精神がないぢや！ 眼目ぢや。日本のよくなつたのは、憲法が出来なかつた以前からの事ぢや。ちやんと憲法以上の精神が日本の國民にはあつたのぢや。それを無闇に憲法々と騒ぎ廻はる氣が知れない。

法は人に依つて運用されるものぢやないか、一家の中にも、家憲と云ふものがある。いくら家憲が宜いからつて、家内中にさう言ふ精神がなくつちや、何にもならないものぢや。家内中にさう云ふ立派な精神があつてこそ、家憲が始めて立派になるのではないか。それと道理は同じぢや。

荒波を乗つ切れ

何時までもオンパ日本では駄目ぢや。外人の土地所有問題に就いて、俺の處へ移し、誰がやつて来て、非常に憤慨した事があるが、俺は其の時さういつた。何にも外

(49)

國人に土地を賣つたからつて、さう心配する事もなからう。高々銀座か何處かのどへ五階の商館が出来た位のもが國の由だ。左様なことはちつとも差附へはない筈ぢや。一般日本人は、孫子の事まで考へる風がある。其考へは決して悪い事ではないが、併し、何時もオシバ日傘で育てた子供は決して大きくなれない、偉いものが出来ないのでちや。そんなに可愛い子供なら、偶にや荒ひ風にも當てゝ見るが宜いぢやないか。そんな事を一々くよくよく考へて居て、何にが出来たものか。乃公は昔に左様云つたら黙つて歸つた事があつたが、一聞日本人には取越苦勞が多すぎる。それと一つには、日本人には、自分で自分を見送つて居る風がある。何にも出来な、かにも出来ないと、只だかよわい女のように思つて心配許りして居る。やる時には荒い波も乗つ切て見なければならぬ。此の腰が弱いから、日本の外交は何時もへまをつくのぢや。

伊藤博文

サアベルと勳章

(50)

伊藤とは、俺は小僧の時から知合ひだから、まあよく知つて居る方ぢやらう。あれはなか／＼豪い奴だよ。井上がいふ様に、伊藤の頭腦は随分組織的だ。それに懲がない。金の點に於ては大限……伊藤は全く綺麗なものぢや。併しな、懲といつても、金ばかりが懲ぢやないからのう。

懲といへば、それは名譽さ。全く名譽の點に至つちや、伊藤は三つ四つの子供だよ。何故かといふと、サアベルを下げたり、勳章を光らしたりして、頻りに喜んで居る。まるでお坊つちやん見たいだな。

何時だつたか、末松説澄の所に、何とかいふ朝鮮の豪い奴が死な事がある。實は

彼が招待せうと思つたが、他の様な注意人物が招待しては、却つて向うが可哀想だと思つたから、それは止しにした。それで末松が招待をして、俺にも来て呉といふから、いつて見た。

丁度夏暑い時であつたから、俺は帽子を着て、僕講師のやうな風をしていつた。處がどうだね、伊藤がそら、僕のナアベルをぶら下げ、勳章を花のやうに着けて、豪さうに構へて居る。車會見たやうな處へ来るのに、何もナアベルや勳章をぶら下げて来なくてもよいのぢや。

然し其處がまた、伊藤の子供らしく可愛いところで、乃公は伊藤だ。之れでも乃公の豪いところがわからぬかといふ様に、勳章やナアベルで後足を見せやうとして居る人だ。どうも其名譽慾は非常のものだつた。

金や女には極く綺麗だ

それから伊藤は、世間から女々と言はれるけれども、伊藤が女を寄せるのは、女が無ければ淋しいからの事だね。一人でも二人でも、ただ傍に女を置けばねられるので、何もそう女と同食しなければならぬといふ事はない。人のいふやうな事をし居つた日には、伊藤の體は、鐵で作つてあつても駄目な筈ぢや。

それに世間は、伊藤ばかりを品行がわるいといふけれども、強ち伊藤ばかりぢやないよ。いや世間の奴は、矢張りやつてゐるよ。唯彼奴等はもういふ事をやつても丁度飯を食つた後で、口を拭いて知らぬ顔をしてゐるやうに、コッソリやる。其處へ行くと伊藤は大ビラだから、世間に廣まる。高事山縣と反對に、事を秘密にする事を嫌ふ伊藤は、女にかけても體裁のいふ食逃げはしない。極く綺麗にやつたものぢや。

金なんかと来ると、實に綺麗なものだ、伊藤はこの點に於て珍しい男ぢや。だから新聞などでも、伊藤を皆なわるくいつたけれども、それは皆な女にかけての事はか

(86)

りて、外の事でも、わるくいはれる事は減多にない。仲々豪い男だったよ。

山縣なんつていふ男は、君子見たやうな風をして居つて、如何にも傲格に見えるが、あれで其實姿もあるや。飯を食つても食はぬやうな顔をするが、矢張り食ふのだね。チアペルを下げて、腹を掛けて、如何にも傲然とした風的面をして居つても、矢張り金に要るのぢや。

山縣有朋

長州の三尊

山縣の人物論はそれは他に迷惑ぢや。何故かといふと、山縣は品川の所謂長州三尊の一人ぢや。三尊の一人に對して悪口でも言はうものなら、この口が腫れるかも知れぬ。悪口を言ふて口が腫れる位なら、二十年來三尊に衝突いて、よく腫が縮き

ますな、故島尾さんからも、三浦半生の歴史は、對山縣だと聞いて居ります。馬鹿をいへ、夫れは島尾も同じ事だ。元來俺や島尾や、山田顯義などは水戸系統のものぢや。俺が初めて東京に來たのは、元來は山口に騒動があつてその方に居つたから、明治二年であつたらう、何でも兵部小丞といふが仕官の始まりました。

陸軍組織の各意見

俺は當時洋行する筈であつたのを、山田、山縣の仲が悪くて困るから、是非其うちに居てくれと、木戸さんから頼まれて留まつたが、元來陸軍の組織といふ事については、長州の大村益二郎の計畫が最初のもので、關山の意見は、東京の兵部省は、唯だ一の政務を取扱ふ所にして、陸軍の樞軸は大阪に設けて、夫れで天下に號令せうといふ考へて、大村の暗殺後、山田顯義が其遺跡を襲ふて大阪に居た。前原一誠も兵部大輔で東京に居つたが、是は兵部省の真中に、劍道の道場を立てよう

(87)

いふ様な青嵐のもので話にならぬ。そこに山縣が熊本から明治二年に歸つて来て、親意見を述べる。是が大村造鉢の山田の議論と合致せぬ。併し議論は公平に見て山縣の方がよい。殊に山田は正直一片の勇で、山縣とは丸で型が違ふ。遂には山田の子分であつた柱なども、後には山縣の方に鞭撻をして仕舞ふといふ様な事もあつて、山縣・山田の間には、常に一種の溝渠の有つたものだ。長州の内輪にこんな暗流もあつたのちや。

木戸西郷の兩首領

扱て天下の大勢を見ると、強藩の聯合で御維新は出来たが、各藩の中には尙ほ風雲を望んで居るものがあると共に、共同の敵たる幕府が倒れて仕舞へば、長州人の頭には、薩長會黨なる感情が再び芽を出して来る。とても抑伏は出来ぬ。殊に西郷は薩摩に歸つて出て來ぬといふ一の事實が、幾多の不安を朝廷の上に與へて居る。

そこで木戸の發案で、西郷を呼び出す爲めに、山縣を使者に立てるといふ事が出来た。當時彼は實際其事が不平でならぬ。ヌメて出て來ぬものを、態々お出でを頼んでは不見識千萬だ。西郷が兵を率ひて東上し、萬々の事があつたら誰が之を可受けるかといふので、山縣の薩摩行に反對した。行く事に定まつて居たものが俄に變更した。木戸は驚いて様子を聞くと、俺が後頭人だと分つたから堪らない。俺は木戸から散々大眼玉をくつた。假令彼れに如何なる野心があつたにしろ、此の儘にして打棄つて置けば、朝廷の御徳に缺けるではないか、若し萬一の事があつて成敗地を易へやうとも、國家の爲めに最善の道を盡してやつた事に何の恨があらう」と諭された時には、木戸といふ人の至公至平の誠意に打たれざるを得なかつた。斯くて山縣が薩摩行となり、西郷の出京となり、薩長の間の暗闘も征韓論迄は無事であつた。

征 韓 論

(10)

處が明治六年十月に至り、有名なる征韓論で内閣の大破裂となり、大西郷は智志野から兵を率ひて薩摩に歸つて仕舞つた。さあ事だ。朝廷は大恐慌を來たした。當時伊藤博文などは、俺の家に來て薩摩の方はどうだらう。大丈夫か知らと心配さうに言ふから、イザとなれば遣つてける分の事さといつたら、大機嫌で「さうさやる時にはやるか」といつて歸つた事もある位の形勢だ。加之七年の一月には、民選議院の建白書が出る。二月には江藤が佐賀に亂を起す。土佐には立志社が起る。天下の氣運は今や大に動きかけた。

臺 灣 征 伐

征韓論の破裂で、廟堂は大損害を受けたが、尤も痛切に打撃を蒙つたのは薩摩で

ある。大久保一派の文治派は、岩倉、木戸と相闘して朝廷の中堅となつたものゝ、武力の大中心たる大西郷の起死は、中央に於ける薩摩勢力の消長に大關係がある。そこで軌立られた芝居が、臺灣征討の一幕となつた。此狂言の作者は確に西郷從道である。彼れは征韓論以來、鬱鬱たる薩摩健兒の不平を外に洩らしめ、之に依つて一種の妥協を試みると欲したのだ。従つて征討軍は皆な薩摩人に依つて編成せらるゝといふ仕組である、之には無論大久保も岩倉も賛成したが、木戸は頭として之を承知しなかつた。

俺等の反對運動

木戸でも大久保でも岩倉でも、征韓論に反對したのは、内治を先きにするべしといふ論據から割り出されて居る。此主張のために、内閣の破裂を犠牲にしたのは昨年の五月である。爾來未だ一年も立つか立たないのに、何の理由があつて外征の師を

(91)

出す事が出来るか、是れは餘りに矛盾したる政策である。只だ薩摩人同志の交誼安撫のために、天下の公器を動かすとは不埒千萬だ。といふのが木戸の主張である。山田顯義や、島尾小彌太や、俺などが大反對の運動を起したのは此時の事で、其結果、一時征討は中止となつて、御使者が長崎迄往つたが、そこは流石に従道、さつさと鎮を抜てしまつた。木戸が冠を挂けたのは此の時、伊藤博文が木戸より、轉じて大久保派となつたのも此の時である。

辭表提出

是より先き山田顯義は、歐米視察から歸つて來た。其留守中に山縣はスツカカリ勢力を扶植してしまつたから、山田が歸つて來ても差向き地位がない。當時俺は東京鎮臺に居つたから、俺の地位を山田に譲れば差支へないではないかといふと、山縣も仕方なくこれを承知した。そこで俺は鎮臺から、陸軍の第三局長といふものにな

つた。當時陸軍の第三局長といふものは、兵器彈藥供給の命令權を握つて居るから堪らない。俺は勝手として臺灣征伐の鐵砲を一挺も渡さぬといつた。無論果敢も來れば説諭も來る。併し俺には理窟がある。朝廷に於てお取極めになつて、朝廷から派遣になつた征討軍なら無論の事だが、一私人が而かも、朝廷の命令に背て行くものには鐵砲は愚か、彈丸一つも遣る事はならぬ。夫程鐵砲が渡したければ、第一朝廷で征討軍の組織を改め、公然たる政府の出兵にするがよい。左なくば、此橋樑の首をお斬りなさいと争ひ、とうとう自ら辭表を提出に及んだ。處がなか／＼辭表を聞届けてくれぬ。今は是非ないと覺悟を極め、親父を伴れて郷里に歸省する事にきめた。

非職の皮切り

其一兩日前から、俺は家内の里に妻をかくして、人の訪問を避け、親父を携へて

新橋から汽車に乗り横濱で降りると、そこに藤原實がまごころして居る。ハテコイ
ク俺を探しに来たなと思つた、元來藤原は大の近視眼だから、眠つて過ぎれば分り
はせぬが、折角舊友が探して居るものを眼前に見ながら、打過ぎるのも殘酷だと思
つたから、オイ／＼と呼ぶと暴して俺を探して居る處だ。伊藤や井上も大心配をし
て居るから、兎に角一應歸つて呉れといふ。大方そんな事であらうと思つたから、
眠つて行き過ぎやうと思つたが、近視の君を出抜くのも氣の毒だと思つて聲をかけ
たのだ。俺は明日の船で歸國するから、こゝで逢つた事は、誰れにも洩言するなと
いつて、其晩は横濱の小さな宿舎に渡邊と共に泊り込んだ。

すると其夜の十二時頃であつたが、神奈川の屬官といふものが尋ねて来た。何事
かと逢つて見ると、只今伊藤井上の兩公が富貴樓にお出でになり、是非其お目にか
かりたい、此方へお出で下さるか、それとも此方から推参しようかとの事である。
俺は何も知らずに、久し振りに慕戀すると喜んで居るものと、この狭い處で、夜中

に大尋をきかせる事もない。出帆は明日の正午だから、朝の中にこちらから出かけ
る事にしていつて見ると、伊藤が眞赤になつていきなり「貴公は軍律を知つて居る
か」と大上段に出て来る。「イヤ現役の軍人が無闇で歸國すれば脱走だ。脱走すれば
軍律も承知の上だ。併し西郷が兵を率ひて晋志野から、無闇で歸國した事に軍律は
何の効力があつた。日本の軍律が、この三浦橋様によつて初めて其實行力を見る事
が出来たら、願ふてもなき軍人の本懐だ」とやると、ガラリ伊藤の調子が變はる、
「ア夫れだから困まるのぢやと、それから井上伊藤の兩人の鐵無談で、結局一週間
内に辭職を取計うといふ條件で、俺は當時非職といふものゝ皮切りをやつたのぢや。

大阪會議

此騒ぎは治まつたが、木戸の辭職が五月で、大久保の天津談判から歸つたのが十
一月、其八月には山縣、伊藤、伊知地、黒田、川村などの聯立内閣で、大久保獨り

勢力を振つて居た。併し木戸の歸隊は、天下をして豪傑に於ける典の輕重を問はしめたのみならず、是を機會として、民權の大運動が天下に起りかけたから、流石剛毅の大久保も、再び木戸を起さんとするの意があつた。斯くも早くも見て取つたのが伊藤である。當時民間に下つて居た井上と相談して、所謂大阪會議なるものを起した。伊藤や井上意志の中には、當時漸く潤澤せんとする長州の勢力、同輩も含んで居つたであらうが、兎に角表面は功臣齋藤、元老院大審院の創設、地方官會議の開設等が、重なる條件となつて、木戸板垣等の入間となり、俺も元老院議員といふものを拜命したが、柄にないから直ぐ斷つてしまつた。斯くて有名な大阪會議の結果、僅に一年間即ち九年の三月、木戸の辭職で一場の夢と化し、十年一月には、遂に西南戦争となつた。此の間に於ける諸種の事情は澤山あるが、長州人でありながら、薩摩人の勢力に附隨して、木戸の公平なる意見に反對するものゝ多かつた事は、俺は頗る不快に堪へなかつた。

刺身のツマ扱は御免だ

忘れもせぬ丁度西南戦争の歸へり途、フト山縣の邸前を過ぎたから、久振りで音づれると「今度高島や川路が洋行する事になつた。君も實は行く事になつた」といふ。豫て薩長妥協の微温的政略を不快として居る矢先きだから、直ぐ夫れが癪にさはる。そこで直接「イカンゼ」と云ふと、山縣は「行かぬとはどうだ」と氣色ばじ。「薩摩の懐柔策で多分アナタが献立で、高島川路を指名すると、西郷が其返報に私を徵擧した芝居だらう」と笑込むと、山縣は青筋を立て、「何ぞと云ふと右といへば左といふ、君の勝手にしろ、僕は知らん」と煙草盆をたゝひて大立腹、其儘別れて歸宅する。日が暮れると一臺の馬車が来る。誰かと思ふと西郷從道だ。例の調子で調停談だ、「御親切は辱ないが、刺身のツマ扱は此格權眞平御免だ。薩に頼むに長を以てするなら、此三浦には限らぬ筈。山縣にもさう言つた。多分アナタの御推

舉であらふ」と言ふと、西郷も頭を抱へてこれから三條公へ行きますと歸つて行つた。果然翌日三條公から手紙が来た。乗上すると、お前が洋行の事は既に御上に申上げて、手續がすすんで居るから、一年丈けいつて呉れとお言葉である。俺もここぞと思ふて、前年来薩長政治家が、自家のために妥協を事とする罪惡を並べ立て、一體朝廷は、どこまで薩長をお許しに相成るかと思つたら、三條公は、唯だ無言であらせられた。斯くて洋行はおぢやんとした事もあつた。要するに、西南戦争及竹橋騒動以來、是れに懲々したから山縣等が、何ぞといふと平の御機嫌を取り、其結果平の腹感となつた事は、争はれぬ事實である。

開拓使拂下一件

夫れから一年たつと、例の開拓使拂下一件が起つた。其時丁度俺は伊香保に居つたが、この一件は最初新聞で承知した。恰も好し、谷干城も亦伊香保に来て居つた。

當時谷は谷の不平がある。俺は俺の大不平がある。此二人の不平家が偶然此處に落ち合つて、此問題に迷着した。元來俺は、谷とは夫迄は左程の相識ではなかつたが、意氣の投合は妙なものだ。早速相談が纏つたから、當時伊香保滞在中であつた吉井幸輔、大山巖を説き伏せて同意させ、俺は早速歸京して鳥尾を捉へ、茲に三再同盟の大運動を始めた。この時は少々八當りの氣味もあつたが、大覚れに覚れた結果、俺は西部監軍から士官學校長に左遷せられた。而して軍人が、政治に關係してはならぬといふ勅語の出たのも之れが爲めであつた。

俺の洋行

(99) こんな調子であつたから、當時俺は、餘程頭冥不靈な人間と思はれて居たから、従つて洋行でもさしたら幾らか直るだらうと思つて、洋行を進めた者もあつたに違ひない。十七年の二月に、大山以下陸軍各人の大衆洋行があつた時、山縣から「今

度はお取次する丈だが」と前儀をして、君も洋行者の一人に加へられて居るといふから、早速「行く」と高車に及ぶと、何もそんなに即答にも及ぶまい。考へてはどうかと言ふから、今度は刺身のツマではない。一個の三浦だから行くといふと、本當に行つてくれるか、伊藤も心配をして居つたから行つてやつてくれとある。他も當て無沙汰をして居るから、いつて見ると、伊藤は行つてくれるのは嬉しいが、大山と喧嘩をしてくれば困るといふから、ナエモ俺だつて酔狂に喧嘩はせぬ。併し一圓の面目に關する事は黙つても居れぬといふと、夫れだから頼むのだといふ。いや承知した。よし又田先きでどんな事があつても、出先きでした事は出先で片づけ。決して喧嘩のお土産は持つて歸らぬから安心してくれと話して、扱ていよく出立といふ事になると、辭令は大山一行の從行であるが、指圖はせぬといふ特別命令だ。かういふ献立だから、喧嘩の起るべき筈もなく、平穩無事で歸朝すると、山縣、伊藤、井上皆大喜びで、教方からもこちらからも歓迎といふ騒ぎだ。處がこ

こに不思議な事は、伊藤井上によばれても、山縣に招かれても、藝者侍の大暢氣で、其様子を見ると、丸で新橋が内閣の出張所と思はれる。此待合政略なるものは、元來井上の發明である。此處で相談すると松方もなければ黒田もない。皆なコロコロと丸く治まつて行くと大自慢である。俺は其時僅か一年たつて歸つて見る。内閣は丸で盆倉だ」と罵つたが、當時如何に長州人が、薩州人の懐柔策に全力を注いだかが分るではないか。其時天下の不人氣不評判は、長州人が皆な背負つて、あのづるい西郷などは、待合に墮下り乍ら「今に伊藤や井上さんなどは暗殺されますよ」と嘯いて居つたものだ。

山縣が睨むも無理はない

朝廷本位で、一毫も藩閥私心の無つた木戸に、慶返りを打つた其殘虐の仕打に甘ずる他等の公憤は、忘れんと欲して忘るゝ能はざる年來の積弊である。其上薩摩

に對するおベンチャラ主義が流行するのだから、俺等の不平は、増す事はあつても減する事はない。丁度其頃であつたが、さなきだに癪に觸つて居るから、林有幸、榎取素彦などと一緒に、前原一誠のお祭を紅葉館で行つた事がある。今から考へれば子供らしいが、兎に角こんな面當までしてやる程になつて居る俺等の心理状態ぢやもの、山縣から説かれたも無理はあるまい。

内輪から藩閥打破

全體山縣にしても伊藤にしても、俺を頑冥不靈のものと思つて居る。従つて洋行でもさしたら少しは直るだらふと思つただらうが、是れが又た大違ひだ。成程是迄山縣等の軍事上の意見に就ては、聞くべきもの取るべきものがあると心私かに敬服して居つた。處が自分が洋行して見ると、ハ、ア是れを真似て居るのだとお里が直ぐ知れて仕舞つた。玉手函の内容が分つて見ればモウ締めたものだ。こいつ一冊木

戸の遺志を讀んで、正々堂々大改革の陣伍を整へ、先づ薩長藩閥の團結を、内輪から打破せんと決心した。

宮様の御同意

當時陸軍卿は大山で、山縣は參謀本部の御用掛、近衛は彰仁親王、俺は東京に、曾我は仙臺に、黒川が名古屋に、高島が大阪、野津が廣島、三好が熊本に師團長となり、山地、黒木、奥、岡澤、佐久間、乃木などが監團長格で、各鎮臺に分布せられ、所謂師團編成が始めて敷かれた時だ。今とは無論形勢も事情も違つて居る。近衛には表面宮様を戴いて居るが、裏門は其通だ。凡そ當時の役人を見ると、士魁の力は既に地を掃つて、天下の大勢を掌握して居るものは、薩長人にあらざれば、この兩閥の歸化人に外ならぬ。此際平然として藩閥の思想に因はれざるものは、唯だ宮様があるのみだ。従つて俺は先づ、現時兩閥妥協の情實政治が、維新當時の大精

神を没却して居るから、之れが矯正の策を説いて、宮様の御同意を得たのみならず、宮様を経て上間に達した事と信じて居る。

紅葉館の喧嘩

丁度其頃の事であつたが、或日紅葉館で陸軍各人の大宴會があつた。無論各宮様も御臨席に相成つて、薩州も長州も金筋の將校が居流れて居る。機曾はよしと宮様の前に進み出で、満座の中に聞えよがしに、首々と今日陸軍の情弊を指摘した。無論覺悟の上だから、窓口も言へば皮肉も言ふ。扱て座に復すると、席を蹴立て、俺の前に二人の壯漢が座つた。これは永山武四郎と山澤静吾共に薩人である。前刺の話の中に、薩摩人を平とは何だと詰め寄つた。平といつたが夫程腹が立つか、マア氣を静かにして考へ見ろ。氣の利いた平は西南戦争で昔なむくなつて居る。失禮乍ら公平に考へて居るのは平筋だ。と不滅口に口論の花が咲く。スルト向ふの

方から乃木の聲で「永山やれ〜」と喊しかけたから、俺も怒つて「ナニ此間の子め」と通つた。乃木の細君は薩摩人である。今長州の俺が薩人を相手に喧嘩してる最中だ。同郷人の情誼として俺に味方すべき筈のものが、薩摩人に味方するとは佳しからぬといふのが、俺が喧嘩の感じである。斯ふなれば乃木も黙つては居らぬ、いきなり起ち上つて来る。喧嘩の火の手は、乃木と俺の方に移りかけたから「俺とお前の喧嘩は何時でも出来るから明日にせう、今夜は此方から片付ける」と更に永山、山澤等と兼向ひに議論を始めた。俺もこゝぞと平素の不平と指論を最も無遠慮にブチまけた。スルト二人共根が正直だから「其は面白い、實は薩長對峙の感情論者とのみ思つて居つたが、そういふ事なら以來談合を致さう」之が縁となつて、二人態々俺の宅へ来た事さへあつた。乃木との方のイキツツは、其翌日兩人であつて見れば、互ひの誤解と事が分つて是も和解、是が世間で言ふ紅葉館の喧嘩の一幕ぢや。

山縣と對決

序に山縣と喧嘩の一幕だが、別に喧嘩といふ程の事ではない。言はゞ對決だ。元來明治五年以來の心理状態が前述の通りである上に、洋行以來、俺れには俺れ一個の軍事上の見地がある。始めは俺れの軍備經濟論で、是は伊藤井上も同意處が大に成服して、一應大藏大臣たる松方へ其意見を話してをいくれといつて、松方に詳しく話した事もあつた。伊藤井上が賛成しながら、之を實行しようともせぬのは山縣の反對である事を知つて居るからである。

夫れから今一つ制度上の事で山縣と意見を異にして居る處がある、俺の持論は陸軍省、參謀本部、教育本部を鼎立せしめ、一切の任免黜陟は教育本部の審査に任せるといふ筋である。行政事務を取扱ふ陸軍本省が、任免黜陟を掌る事は、情弊の基となるのみならず、教育本部以外、何を標準として、任免黜陟の材料があるかと

いふのが大體論で、是が當時の制度とは違ふのみならず、一方の眼から見れば、俺がこんな事を言ふのは、或者の權力を殺がんが爲めの立案だと、始終猜疑の眼を持つて見て居る者がある。従つて山縣が容易に俺の意見を容れぬから、或時伊藤井上が調停的口紛を洩らしたを機會とし、いつそ伊藤井上兩君に立會を願つて、山縣と對決したら、一番話が早く分ると言ひ出し、兩人も略々之を承諾した。

山縣の覺書

處が其翌日山縣が、伊藤井上の書面を携へて來た。此の通り立合の對決との事であるが、君と僕との間に今更らそんな必要は入るまい。今一度ゆつくり二人で話し合をせうではないかといふ。いや夫れは駄目だ。全體大事な事になると「君は君、我は我だといふて口を塞いでしまうのがアナタの流儀だ。失れなればこそ從來何度となく議論をして、一向事が明かぬのだ。證人なしの對決はもう懲々だ」といふと、

いやそんな事はせぬ、十分互に腹心を吐露しよう。貴人は伊藤井上にも及ぶまい。幸ひ田中光顯は君も承知の勇だ、あれを立會させて話をしよう、ナラ遣つた、たしか其年の大晦日の夕方から、鶏の鳴く頃まで議論を闘はしたが、論點は殆んど歸着を一にした。そこで山縣は「一應僕が書いて見よう」といふ事になり、元日の参内も程なければ、正月四日の再會を期して分れた。

期日を違へず自ら書面を携へてやつて來られた。一々同意である。ちと拍子抜けがした位であつたが、自分の意見が貫徹したと思ふと、流石に微笑を禁じ得なかつた。斯くも多年の異論も氷釋して互に送つて出ると、山縣は馬車に乗りかけ「君と僕の所見は先づ之れで一致したが、併し今一人大山が居るでナ」との一語を殘して歸つてしまつた。

嗚呼此一語!! 果然大山は俄かに反對の意見を示し、若し此意見行はれずんば薩摩出身の軍人は、速決辭職すべしとの大運動が起り、山縣の同意を得た彼の意見は、唯だ教育總監といふ地位が遺されたに過ぎなかつた。

山縣は用心深い堅固な人

つい脂が乗りすぎた。兎に角こんな間柄の俺に、山縣でもあるまいではないか、ただ用心深い堅固な人と云ふ事には、何人も異論はなからう。その用心深い處に堅き根底が築かれて居る。伊藤や井上の及ばなかつたのも此處に存するであらう。

桂 太 郎

壇の浦の勸説

俺が桂に政黨組織を勧告したのは、モウよほど前の事だ。當時俺は桂に向つて、藩閥々々といつて居るが、藩閥も最早絶頂だ。天下の人心は最早一轉の機が熟して

居る。唯今日此藩院が現職を保つて居るのは、全く二大戦役の賜に外ならぬ。凡そ
 派の揃になつて御黨を集めようとしても、決して集まるものではない。お前も今の
 中に政黨を組織する覚悟がなければ、他日必ず脚を噛む傷があらうと説いたら、高
 論は誠に難有いといつて、其時は可とも否とも明言しなかつたが、其後新政黨を組
 織するや、秘書官を態々熱海によこし、俺の名で賛成の書面を出してくれと、書面
 を持たしてよこしたが、書面の主旨は固より糞糞で話にならぬ、柱が書いた手紙に
 も頗る周章た筋が見えたから、俺の名が役に立つなら利用するも差支へぬが、第一
 コンナ事では物にならぬと、一々書面に棒を引いて歸へしたら、其晩電報で、署名
 依頼の一件は取消すといふて来た。

政黨首領はお奥に乗れ

其後柱に逢よと、いろ／＼新政黨の話をするから、新店の開業早々五人組の御入
 來と餘りチャホヤすると、外が直ぐヤキモキするものだ。珍客あつかひも程度にあ
 る者だといふと、柱も、餘り買被つて居つたものと見え、一體河野といふ代物は何
 ですかと呆れて居るから、チアそこだ。從來國民黨の内輪喧嘩といふものは、アノ
 五人掛りで、一人の犬養を叩きつける事の出來ないといふ歴史ぢや、犬養といふ男
 の議論には、一々同意の出來ぬ事もあるが、打つても敵いても、お前に降参せぬと
 いふ處に彼の骨は有して居る。といふと柱は、誰か外に人は無いものかと尋ねる。
 藩閥でも政黨でも、さう人材のある者ではない、先づ當分有合せの品物でやつて行
 くより外はあるまい。唯だ政黨といふ寄合世番殊にお前の講中は種類が多い。總理
 大臣ではお前の聰明が用を爲すが、政黨にはその聰明が害をなす。大隈の政黨に失
 敗するのも、犬養が大を爲さぬのも皆な之れがためだ。先づ當分御神輿になつた種
 りで、目を瞑つて黙つて昇がれて行くさ。夫も四辻に來たら、オイ／＼右だ／＼位
 の處で澤山だ。夫れ以上やらうものなら失敗だ。併し君の聰明にその幸林が出来る

か知ら、といった事があるが、本當に目を取つて仕舞つたのは氣の毒だ。

公爵の手盛

元來、桂が新政黨を組織するまでには、幾度か心理状態に變化があつたに相違ない。アノ公爵になつた時などは、儘にモハヤ是切りと思つた事もあらう。元來桂は無山のいふニコボンで成功して來た男だ。ニコボンのためには己を殺すだけの用意があつた。長州三竹に對するニコボンが立身の總緒で、又始終の用意であつたが、其用意周到の男が、韓國合併の陰謀は、全くお手盛であつた。或日山縣の誕生日に招かれた時、俺が桂に「オイ君の公爵は、コ、の大將にも内々ちやつたさうな」といつたら、桂が「ナニそんな事が」と口をモガ／＼させて居つた。現に山縣は眼の前に居るのだから言譯もならず、流石のニコボン先生、苦い顔をして居つた事があつた。他にも知らさず公爵の手盛、不音の間の此一睨みが、後の果となるやならずや、

ニコボンの智慧もコ、までには及ばなかつたであらう。

心機一轉、歐洲遊遊は、確に彼の智慧たる所以を物語つて居る。先帝の崩御、是は天下皆な意外、歸つて來れば是は又意外の金冠、ソコに目白の一睨みがありと知るや知らずや。鹿爪らしく一生の御奉公、其舌の根の乾きあへぬに、時分はよしとニコ／＼出て見ると、意外々々、初めてお手盛が降つて居るのに氣がついたが、遅かつた遅かつた本能寺の集は、既に幾尺の深さを來たして居つた。ニコボン千慮の一失だが、是れ又ニコボン心理の變遷が首肯せらるゝではないか。

山本權兵衛論

汽車中の對談

山本權兵衛は無論芋畑の掘出物だ。俺は全體よく知らぬ男ぢやが、何年前であつたか、新橋から汽車に乗ると、相客權兵衛只一人、退屈後の雑談から、軍備問題に入り、海軍は陸軍に比して自然の仕合があるといふと、權兵衛が、仕合せとは何かと聞くから「マア考へて見ろ、陸軍の方で毎年ドン／＼チャン／＼大演習は舉行するもの、御統監となれば、田園の中に新道が出来、村中の百姓は、汗水を垂らして道をならす、砂利を敷く、名は大演習といふものの、實は天覽に御都合のよい處で、雄略を決するといふ芝居がりのもので、肝心の本真劍といふ事が缺けて居る。そこになると海軍を見ろ、一旦乗り出せば最後、板子下が地獄だ。戰場其物が

即ち自然に十氣を養成して居る。其上世界中を駆け廻るから、自然に新知識を得て頭が進歩する。自然が此の如く幸して居る上に、經費の上から見ても、陸軍の方では、兵營といふ大建築が、只だ兵士の寄宿舎たるに過ぎないが、軍艦の方では、寄宿舎其物が即ち戰場ともなるのだから、一舉兩得の利益がある」といふと權兵衛が「これは初耳だ」と目を丸くして居たから、「どうだ海軍擴張も必要だが、金のなには困るだらう、どうせ陸を削つて海に持つて行くより仕方はあるまい」と夫れから話は益々住境に入つたが、最後に權兵衛が「陸軍の方も、大山彌助や川上操六で治まるから大抵のものぢや」と言つた一句に、こいつは只だの鼠ぢやないと思つた事がある。果然其頃聞く處によれば、長谷川など、頭からカミ付けられると云ふぢやないか。

凄
い
手
際

夫れから御大喪の當時、時々宮中で出くはした。あの横着物が、こんな儀式的の場所には、如才なくお勤めをして居るのを見て、こいつまだ中々愛嬌氣が失せぬ哩、と見て取つたが、あの政變に、横合から飛出して、油揚を攫つた手際はなか／＼凄いと見られる。全備川上死後の政界は、一面から見ると、薩の海軍と長の陸軍との間の歴史であるが、或る時期からいへば、桂、兒玉、寺内の三人がかりで、一人の山本と戦つた時代もある。權兵衛は、薩摩といふ一大勢力を背負つて、海軍といふ陣所に立籠つて居るのだから、實力以上に買ひ被つて居つた處もあらうが、桂などといふ男は、元來常識的の男だから、少し平仄違ひに持つて來られると、直ぐにアツを喰ふ癖がある。此前の政變でも、權兵衛が出て來ていきなり「全體君が宮中を勝手にし過ぎる」と意外の處から、大上段に振りかざされて、ギャフンと參つたのだ。

金に汚たない

世間では、權兵衛が金に汚たないといふが、夫れは薩摩人の特性だ。「我家道法君知否、不爲兒孫買美田」と大西郷が、暗に諷した訓戒も、此特性を矯正する事が出来なかつた。元來、薩摩は山國で、薩高の割合に收入が少ない。そこで士族は皆な非常な貧乏だ。外の國では二男以下は部屋住で、親の腰を喰つて居ても暮せたが、薩摩では、只だ遊んで喰つて居る事は出来なから、二男三男皆な職仕する。現に西郷從道でも、二男で御茶坊主をして居たではないか。少さい時から、金の難有味をよく知つて居るから、大きくなつて夫が發達する。薩摩人で、貧乏して居るのは高島位だらう。併し夫も金山に手を出して失敗したから、所謂清貧とはいはれない。

政治家と金

全徳薩摩人に限らず長州人でも、元老と名のつく奴は、皆な此の病がある。そこ
 になると、西郷、木戸、大久保は流石に、維新三傑といはれた人だ。西郷、大久保は
 固より薩摩の代表といはれた。大久保が死後、葬式料も無かつたといふ一事が、如
 何に天下の人心を驚ぐであらうか。只だ一身を以て、君國に捧げるといふ大精神の
 外には、何等の私心もなかつたといふ事は、確に世道人心に大感化を興へて居る。
 國家の品位が高尙になるも、國民の思想が健實になるも、この國徳の間から来る大
 作用である。權兵衛でも讓れでも、只だ政事家でなくして、所謂経世家といふ見
 識から考へて見たら、自から了解する處があるだらうと思ふ。

藩閥の心理作用

又世間では、薩摩同志の折合がわるいといふが、それは權兵衛が、一時の權力に
 任せて、先輩の棟山でも柴山でも、ナツナと逐出したものを恨みに思ふのも尤もだ。

併し兩藩併立せずとは古今の通則だ。長州でも、伊豫、山縣の對立から、其當時は
 山縣對桂の間にも初まつて居たではないか、所謂藩閥の心理作用といふものは、又
 一種格別のものぢや、あれ程仲の悪かつた山縣伊豫でも、外敵に對する時には直ぐ
 一つになる。桂の新政黨を向ふに廻して、十年不作の芋畑で、一時に收穫しようとい
 ふのだから、大抵の事は我慢をするものぢや。現に棟山でも、芳川が斷つた教育
 調査會とやらの、總員にをさまつて居るぢやないか。

薩摩人はクラモウだ

殊に薩人には一種の特性がある。若し之れを長州人に比較すると、西郷と吉田、
 東郷と乃木が恰も兩者の性格を代表して居る。乃木も神さんになつたから批評は困
 るが、神さん以前の乃木と東郷とが、戦争中から戦後に於ける行動を對比して見る
 と、そこに兩者の性格が遺憾なく發露されて居る。近來長州人は勿論、他國の人は、

一人必ず一人づつ小提灯を持つて居るから、ドンナ暗夜でも、一人歩行の出来る人間が多い。そこになると薩州人はクラモウだ、クラモウ？ 暗夜から手を引ずり出した奴さ。其代り誰か一人大提灯をブラ下げて、先頭に立たうものなら、有象無象が、ゾロ／＼として行く。この幕當は長州人などには夢にも出来ない。百人が百人意見があつて、議論百出決して纏らない。西郷南洲は固より一代の人傑、其精神が薩南健児を、成すせしむる事が多かつたとはいひながら、之を他國にやつて見よ、順逆正邪の論紛然として、兎てもあれ程の事は出来なかつたと思ふ。畢竟各自銘々が、小提灯で足許を照らして居るのは、他人の光を當てにせぬから纏まりがつかぬ。薩摩人の團結力が強いといふのは、一は三百年間、日本の一隅に立籠つて、常に天下の敵を引受けんとする覚悟其物が、凝然として自然に團結を鞏固にしたが、一はクラモウの徒が多いからだ。然るに、權兵衛が大提灯を掲げて、先頭に立つたのだから、薩摩同士のゴタ／＼などは論にはならぬ。

俺との會見

其頃權兵衛と俺れとの會見について、訪ふたのも事實なら、長談議をしたのも事實だ。俺は由來長州人では繼兒の格ぢや。藩閥擁護の念などは毛頭ないから、誰でも甘く國政を料理しさへ呉ればそれで満足ぢや。權兵衛も大政總裁ははじめてぢや。海軍の一隅にかがんで居る時とは違ふから、大局上の忠告をしてやつたのさ。何の事が時節が来れば分る時もあるだらう。併し近來支那問題の爲には何といふ事ぢや。まさか後から日露の追加も出来まいから、談話の方は仕方なからうが。

俺の買被り

あの騒ぎの起つた暗夜、ちよつとの呼喚で大きな仕事が出来たものを、大事の機會を逸したなど、其不手際は、丸であの政黨に油垢を撒つた人とは思はれぬ。十

何年不遇不変、こいつ相當の用意があると思つなは此方の買取りか、あの手際は最早や貯蓄も何も種切れではあるまいか。元來薩摩人は、人望の一點張りぢや、只だハイハイ(ハイ)と尤もらしい顔付して、世間の人氣思想を見て居る奴ぢや、其昔佐がチーベル時代に、檢閲使となつて各師團を巡視し、片端から遣つ付けた時に高島が「ア、やつては君の人望に關する」と忠告して呉れた事がある。併し佐は其時にさういつた「佐も昔は君の流義でやつた時代もあつたが、今は宗旨をかへたのぢや。あの居候を見よ、居候時代には、下女からも車夫からも、善い書生さんだと評判がよい。其評判を信じて、一たび引上げて何かに使つて見ると、今度は非難が百出する。自分も一度び責任の衝に立つて、始めて居候的人望であつた事を悟つたと同時に、一切萬事道理に依つてやらねばならぬと覺悟したのだ」といつた事がある。佐は而當てにさういつたのではない、其にさう思つて居る。元來大西郷の人望のあつたのは、其天賦の人格によるも、實に其自己を無視して居るが爲めに、自然の人

望があつたのだ。然るに佐の薩摩人が、自己を中心として人望を得るに汲みたるは、全く大西郷の神髓を悟り得ぬものぢや。權兵衛などの政務の道口などを見て居ると、只だ世間の人氣如何を觀察して居るといふに外ならぬ。自家の経綸が、どこに在るかを認め得る事は出来ないのでないか。薩摩特有の人望病に取つかれて結局何も出来なかつたといふ事に終りはせなにかと案じられる、それから金の事でゴロを出す様な事が、或はないとも限られぬ。果して海軍收賄問題で味噌をつけた。

高杉東行

五十年祭

高杉先生の五十年祭か、あれは俺が遣り出したものぢや。其の頃、熱海に出かけ
る前に、フイと考へると。今年が丁度、先生の五十回忌に當るやうだ。暫くを
待たせ見ると、愈々さうぢやから、二三のものに話しをして、あゝいふ事を遣り出
した譯ぢや。何も後輩が先生の回忌に當つて、在天の靈を祭るのは、誰だつて當り
前ぢやないか。

鴉の白糞

今日迄いゝんな人にも接したが、あれ位威厳し信賴した人もなかつた。式のす
りとした、男前も立派だつた。平生は優しい目をして居られたが、それがどうかす
ると、ヤロリ光つたものだ。其時は怖しさが、ぞつと身に沁みるやうだつたよ。總
てが親とは反對でな、先生の親は小心な謹直一方の人で、高杉小忠太といへば、眞
面目なをとない人で通つて居つたものだ。父母の教訓、家庭の養育もあらうが、
それ以外あゝいふ男が生れたのは、天ぢやノウウ。それで高杉は「鴉の白糞」で、眞
州の評判になつたものぢや。女兄弟が二人あつたきりで、男はたゞの一粒種ぢやつ
た。

英雄の半面

早くから國事に奔走したので、書物を読んだのも二十歳位ぢやつたが、それがた
だ字句を穿鑿する腐儒ではなくて、目が根本に注いで居た。其一例をいふと、例の
下の關の攘夷で、藩としての軍艦があつたが、それが打壊された時、早速上海へ右

軍艦を買ひにいつたのが高杉ぢや。今からいへばカンの小高汽船ぢやが、乙丑九と名がついてゐたから、乙丑の年の事ぢやらう。乙丑といふと慶應元年になる。兎に角非常に匆忙な、明日は戦争といふやうな際で、武器の軍艦を買ひにいつたのだから、誰でも心はせく、氣が昂ぶるものぢや、其際に立つて、高杉は「廿一史」を買つて来た。其書物を入れる箱に「擲千金購善買之書、是予一人之私乎」と題してゐた。廿一史と言や、唐本にして随分大部のものぢや、それを買つて軍艦に積んで来るなど、何處まで餘裕のあることかわからん。一體が悲憤慷慨の士で、國事に關することの議論は固より、實行の點に於ても、人並に秀でて居たことは、其性行がいくらでも證人になるが、其裏面に閏日月のあつた事は、又驚くべきものぢや。人は何でもさう往かなくちや駄目ぢや。國事々々でセツパ詰つて苦しがつて居るやつに、まあロクな者はないものぢや。書をかいてもさうだ。人が顔真卿、柳公權でツイツイ言つてる。それを神様のやうにして居る中で、高杉は竹田の書が面白いといつて、

それを習つて居つた。それから刀や鐵砲で血闘いことばかりやつてゐる陣中でも、常に煎茶道具を離さなかつた。煎茶道具もチャンと五つの茶碗に、土瓶敷まで揃つたやうだ。それを提籃に入れて十四五の小僧に持つて歩かせる。さうして參謀會議の中でも、悠々としてそれを楽しんで飲んでゐる。一方は血氣旺盛な國士の典型、言はゞ蓋世の英雄であるが、他方は風流細事を事とする、既に世故に長けた老成の風があつた。

天 稟 の 才

先生は壯年二十九歳を一期として、亡くなられたが、二十九歳と言や、今の若い者にしては、カンの子供ぢやが、先生が二十九歳迄に仕送げた事を考へると、普通の人間が、百歳や二百歳生きたつて出来る事ぢやない。それで事々物々、大變革に際した所謂創業の秋ぢや、一步誤れば、千年の悔を貽す大事な時ぢや、それを大

方針を定めて、着々處理していった手際は、天賦といふより外に説明のしやうがない。それでゐて、一向自分が手柄顔もしなければ、聲大振りもしない。俺のやうなゾット年輩の造つたものを推へて、若い先生々々と大事がつて呉れる。山縣や伊藤などは、オイ任介、オイ俊介、と呼び捨てにして、何でも頭ごなしだ。さうして俺などを上座へ坐らせて、銘々の吐く意見を、ウーンと聞いて居たものだ。國事も略々収まつたゾット後の事だが、先生はもう身體が悪くて床についてゐた。其時分俺達はもう、山縣の道方に不平で、少々衝突しかけてゐた。或日病床を訪ふて、いっつにないしんみりした話を始めた後、僕も君等の年頃にや、人に負ける事が嫌ひで、聖劍を使つても、道具をつけてゐない何處でもナグツつける。槍を持ちや、足でも何處でも突く、随分馬鹿な真似をしたものぢやが、お互にそれ位の元氣がなければいかん。だが狂介の如きを今から眼中に置くやうでどうするか、こつちの敵手にして取かしくない者は、外にもあらうぢやないか、といふやうな意味を自分の事にし

て話された。あとでさう思つたよ。これは俺の短氣な粗糲な性分に、一箱棒を食せたのぢや、と。どうして、さういふ場合でも、露骨でなく含蓄のある老成な言方に敬服させられたのだ。

梅處と行脚

それはさうと、物が行詰つて來ると、液々として智慧が湧いて出る。盤根蹄節に際會する毎に、利器がきいて來るといふ點は、蓋し古今獨歩といふてよい。どんな困つた時でも、チツトも困つた顔もしなければ、それは斯ふするあゝすると、前かちヤンと計畫してゐたものの様に、案がいくつでも出來てくる。眞に靈きぬ衆を汲むやうだつた。これは直接自分が話を聞いたことだが、或は世上に知れ渡つた事かも知れない。慶應元年頃、自分も君公の爲めに相應の力を盡くし、親にも安心を與へたから、かねての宿願を果たさうといふので、各地を行脚することになつた。

當時、乞食をしてあるくのぢや、と笑つて居られた。譯を供にして行くかといふと、この女だ、とかねて妾にしてゐた、後に尼になつた梅處を指すのぢや。餘り突飛な頭遣れぢやと思つたが、先生のことだから、と誰も何ともいふものはなかつた。梅處は馬關の姦殺で小うのといつた女だ。女を選ぶにも變つた處があつた、といふのは、小うのは馬關で評判な薄馬鹿といはれた女で、餘り相手にするものはなかつたのぢや。馬鹿だから、終日密事を談じてゐても、他に漏れる心配はなかつた。其爲めといふのではなからうが、それを可なり愛したものだ。後に梅處が東京へ来て、山縣や井上の姿を見ると、狂介さん、開多さんで同輩扱ひにするので、維新の元勳も大閉口ぢやつたよ。

大阪の危難

高杉が横道へそれたが、其梅處をつれて國を出で、一時船を安治川につけて大阪に

いつた。船頭姿をして心齋橋通りの某書林に入つて、何の氣もなく「後然草」ありますか、と尋ねると、亭主が妙な顔をして「アಂತは妙な人ぢやな」といふ。高杉も不圖氣がつくと、自分は船頭姿をしてゐる。當時は、まだ御維新前ぢやから、勤王の志士を物色する幕吏の探査は随分苛酷であつたのぢや。そこでこれとは思つて、イヤ私が國の物置りの積みで買ひに來ました、と言つても、もうイカンツイ。まあお上り、一服お茶でもお上り、と來る。實は宅の裏座敷にお宿をしてゐる方が、アಂತのやうな方が大好でな、まあいま暫らくすると、お歸りぢやによつて、是非待ちなされ、となかく離さない。其客人はと名前をきいて見ると、高杉が座敷に居つた頃、その熱頭をしてゐた男で、幕吏の中でも、多少腕利きとして知られて居た男ぢや。それに顔を見られては大變ぢや、と思つたが、それを氣色に見せては最早おしまひぢやから、さあらぬ體で、實は私は船に戻れば、ボロ羽織を一枚持つてゐる。さういふ大身な方にお目通りするには、このなりでは失禮ぢや、一寸羽織だけ

引かけて来ませう、とやつと虎口を連れて、船へ走せ戻つた。愚問々々して居る中に川口の船の捜査でも始められては大變だといふので、すぐさま出帆して、今度は四國に渡つたのちや。

琴平詣の眞似

四國に渡つてからは、讃岐の田柳燕石の許を尋ねて、しばらくそこに逗留した。餘り髪が伸びたから、頭を刈りに或る床屋に行くと、その亭主の顔が、どうも見覚えがあるやうな気がした。懐に思ひ出しはせぬが、同じ長州の者だらう位に思ふて、理髪を済まし、其處をアラ／＼散歩して歸つて見ると、燕石の家は上を下への大騒ぎで、女房が泣くやら、下人がわめくやらで様子が一變してゐる。そりやこそと思つた通り、床屋の亭主は、其節の犬ちやつたのだ。高杉をかくまつてゐるといふ疑いで、今しがた燕石が引張られていつたのちや。高杉は例によつて從容として、

さう騒ぐことはない。ワシはそんな迷惑をかける男ぢやないから、と家人に十分安心を與へ、それではこれからワシが、燕石を無事に連れて来るから、とすぐに出發けた。出掛ける前に、自分の居間に進入つて、一朱二朱位の金を机の上などに幾々取り散らして、さうして梅處をつれて出たのちや。丁度雨のしよば／＼ふる日ぢやつた。さういふ危急存亡の場合、女の手など引いて出られたものぢやないが、そこらに大膽不敵な大きな處がある。不圖気がつくと、當時琴平詣りで、上下する男女が幾組もある。いづれも素足のまゝの跣足詣りぢや。高杉は早速自分は固より女も跣足にして、其跣足詣りと前後して走つた。だから二人連れでも一向目立たずに、多度津の海邊までやつと落延びた。船宿を叩いて、親の急病で歸國するものぢや。すぐ船を出して貰ひたいと、早急な誠状をして、又た／＼大事を逃れた。後に高杉の居間を檢分に来た捕吏が、机の上に一朱二朱の金が散ばつてをのを見て、こりや何ぞ知らずに又歸つて来るといふので、始らく待つてゐたといふことぢや。それも

矢張り高杉の計畫が國に當つたのぢや。かういふ風に到る處、神の目遣の目で、自分をつけ狙つてをるやうでは、行脚底の騒ぎぢやない。とそれつきり断念して國へ歸られたが、間もなく征長の戦争が始まつたのぢや。

自然の妙機

斯くの如く先生は、臨機應變、機智縱横、如何なる困難に遭遇しても、常に紳々として、餘裕ある態度を以て切り抜けた事は、何人と雖も、企て及ぶ可からざるものがある。それを普通世間では、單に慷慨悲歌の人、愛國熱誠の士位に考へて、磊落粗豪のみを以て事に當つたやうに、其表面許りを見て居る者が多いやうであるが、却々どうして此の裏には、強ひて思慮分別を煩はさずして、天才流々として、臨時に湧出した事は實に驚く可きもので、其事業の跡を見ると、能く其基礎を固め根底を作るといふ結果を、自然に現はして居る。而して、其活動を爲すに當りては、

奇兵隊

縱横の機智と、臨機の天才とを應用せられたのであるから、何事も當つて迷ふことなく、行つて逃げざるなしといふ次第ぢや。先づ俗論紛々として、歸着するところを知らざる藩論を一定し、續いて、あの猫額大の地を守つて、天下の大軍を引受け何の苦もなく四境に之を破り、遂に薩長聯合の素地を作つて、維新大業の基礎を固められたのである。實にあんな短日月の間に、あれだけの大事を成し遂げた、その神出鬼没の働きは、唯だゞ驚嘆するの外はないのぢや。

先生は先づ奇兵隊を以て、その活動の根本とし、次いで諸隊を作り、従来の階級制度を一掃して、士であらうが、足輕であらうが、其他各種各別、なんであらうが彼であらうが、才氣、膽力、手腕のある者は、一切何者でも採用した。これがために四指姑息の弊風を一掃して、一掃の士氣を鼓舞し、激戦した事は多大のものであ

る。三百年來の封建政治で、階級的に固定し切つた人心が、キンに縮み上がつて居た時代に、町人百姓の別なく、苟も志ある者はその能に應じて、これを採用するといふが如き奇兵隊の組織は、破天荒の仕事であつて、階級打破の點からいふも、兵制創建の上から見ても、人心の機微や、世運の進動を十二分に洞観し得るものでなければ、テンデ頭（テンデ頭）に浮ばぬ藝當ちや、是等が原因となつて、激論を動かした。获から山口へ落を移轉する際などは、家老以下宿屋住居といふ困難不自由があつたにも関わらず、斷乎としてこれを決行したのは、畢竟、先生などの主明に保はる一黨の士氣を刷新して、從來の弊風を廓清し、上下一致して事に當るといふ、その根本謀畫の實行に外ならぬのである。併しその運動のあまり激烈であつただけ、俗論黨の反抗熱を、愈々熾ならしめ、彼等は、積年の因習に囚はれて居る、事物主義の一派を動かし、あらゆる手段を講じて、遂に俗論黨のために、一時時の政府を乗取らるる悲運に陥つた。

幽閉より脱走

話が前後するが、文久四年が元治と改元になつた年、そら、京都の寺田屋の樓のあつた時ちや、勤王方は京都に被れて、一時に多数の志士を失つた。此の頃、長州では例の俗論黨の者共が、先生一黨の改革運動の反動として聲を得た。其結果として、第一大長州征伐の總督たる、彼の尾張大納言に向つて、俗論黨政府は、眞頭平身、只管に謝罪降伏を乞ふといふ様な、妙な風向きになつた。やがて三太夫は高麗する、四参謀は斬られる、藩公は获へ盡伏せられる事になつて、今迄の長州の面目は一時に踏み潰された。其時第二に目をつけられたのは先生で、程の極まらぬ中、親類預けといふので、幽閉せられた。言ふ迄もなく預つた親類が、それを逃がしでもせうものなら、某人は本人以上の極刑に處せらるゝ例ぢやから、預つたものも非常に警戒して居た。高杉も考へると、そのまゝヲノノ／＼縛り出されては、到底首はな

い。何とかして此處を脱出しなければならぬと、二三其隙を窺つて居たが、なかなか油断はない。其中段々気がつくくと、どうも晝より夜の方が嚴重で、夜が明けてしまへば、幾分警戒が緩むやうに思はれる。そこで或る朝、使所に這入つて、いろ／＼考へたが、今之を決行するより外に手段はないといふので、雪隠の草履を穿いたまま、手に持つ手拭を頼披りとして、ソレと使所から抜け出た。畑と言はず田と言はず、無暗に裏道々々と駆けたが、到頭どうしても、山口の町へ通する大道に出なければならぬ事となつた。見ると、其朋輩であつた俗論黨の若者等が、十人許りツア／＼何かシャベリながら連れ立つて来る。こいつ見つかつては大變だと思つたが、嗚呼の間に思案して、其處の松の木の根に向けて、ジャアジャア小便を始めた。既に幽閉された高杉が、今茲に立つて居やうとは、神ならぬ身の氣づかなかつたものと見える。背をすり／＼通つた奴造が、何も知らずに行き過ぎた。ホット一息ついたものの、かう事が度々あつては、そう／＼小便の妙計許りがアタリもすまい。そ

こで、何處といふことなく、野山を駆つて、其晩に、山口から丁度五里許り離れた、徳地といふ山奥に著いて、その百姓屋に身を寄せた。そこから使ひが来たので、我々も始めて、先生の脱出一條を知つたのだ。徳地の百姓屋が一時勤王志士の参謀本部になつて、前後の策を彼是と議したのちや。

徳地から馬關九州へ

かう長藩の政府がひつくり返つては、何も彼も滅茶苦茶だから、どうしても政府を我黨の物にせなければならぬ。順序からいつても、天下の事よりも我黨の事が先きぢや。幕府を倒すよりも、この俗論黨政府を顛覆せねばならぬ。といふのが、先生の意見でもあり、我々の計劃でもあつた。それにしても、こゝではどうにも出来ぬといふので、先生は竊かに馬關に出で、そこから小舟で九州へ走つた。

脱來虎狼穴、 潜伏宿君家

莫余二州業、人心亂似麻。

の五絶が、當時馬關の白石といふ者の家で、出来た詩ちやと覺えてゐる。それから
徳地の百姓家を出る時、其處の角行燈へ

燈火の

影細く見ゆ

今宵かな

の俳句を一つ書かれた。如何に變通自在な先生でも、當時はどうなることかし、少
しは心細く思つた處もあらうといふものぢや。

馬關の爆發と檄文

九州に走つて、筑前の野村望東の平尾山の別荘に、始らく隠れてゐたのは、人も
知つてゐる事ぢや。が、いつまで待つても、正義家は俗論黨に屈せられる許りで、

政府鎮殺の機會がない。丁度甲子の十二月、決然九州から歸られた先生は、それよ
で廣島境に屯して居た遊撃隊を、馬關へ呼びつけて、さうして突然爆發した。俗論
黨が日に、勢を得つゝあつた時であつたから、この爆發は味方共に、意外な轉
機を與へた。俗論黨の本城は固と萩で、先生が山口へ移城したのも、萩のやうな俗
論の各首に入つた土地では、正義の政は行ひ難い。人心を新たにするためには、
その地利を變更する必要がある、といふ理由に基いた程だ。馬關の爆發を觸するた
めには、矢張萩の本城から兵を繰り出さねばならぬが、知つてゐる通り、萩は北の果
であり、馬關は南の果だから、其間二三十里離れて居る。其間には、かねて先生の
下で調育された、遊撃隊が、露處に散在してゐる。それが、馬關の爆發に呼應して
は、事面倒といふので、それを懐柔しようとかうつて、容易に兵を進めない。それ
が却つて此方の僥倖であつた。尤も先生が九州に落ちた後、我々の集團には、屢々
解散命令が出て強行的に解散せしめやうとしたものぢや、が、餘り急激に命ずると、

却つて暴動を起す、愚敵の徒がないとも限らぬといふので、實は時日を遷延して機會を待つてゐたのだから、馬關の爆發と同時に、我々の間には、疾くに決心する所があつたのだ。それで例の討奸檄文を草して、それを四方に傳へた。討奸檄文は、

君上穆爲繼御祖先洞春公之御意志、御正義御遵守被遊候處、森處共御趣旨に相背き、名を恭順に託して其實は謀反、四境の敵と申し合せ、屢々關門を毀ち、御館を墮り、正義の士を幽殺し、右の敵兵を御城下に誘引し、陸に周防一國を南與の儀を約し、恐多くも種々御難題を申立て、君上御身上に迫り候次第、大逆無道、我等世々君恩に沐浴し、森萬義俱に天を敵かず、區々の微忠、聊兵を起し、洞春公の尊靈を地下に慰め、再び君上の御正義を天下萬世に輝かし、御國民を安撫し奉るもの也。

壬の正月

遊撃隊

といふのだ。

順逆を説く戦書

それから萩の兵は遠征して、五里許り離れた繪堂といふ處まで、その先鋒が出た時、又戦書といふものを、向ふの軍師に送つた。

昨春秋、京師變動以來、御兩殿様深く御愛重被爲遊、御恭順御盡し被爲遊、不得止に至り候ては、多年の微衷、一死を以て、奉報鴻恩之外無之に付、其節に至り候ては、一致盡力候様、被仰聞候に付、乍恐御意の旨深く奉體、居り候處、偷安苟且の因、其時に乘じ、頑冥不靈、不忠不義の徒を嗾衆し、投ぐも、君上を朝敵と申立て、御恭順に事寄せ、要して萩御歸城を促し奉り、椋梨壽太其他の好物要路に登り、正義忠識の士を逃げ、剩へ、大夫其他の正吏數十名を、斬殺し、或は幽囚投獄し、且つ御屋形を毀ち、關門を破り、所謂清光黨を後部とし、御國

是を懸じ、恐れ多くも御名義を天下に失せ奉り、未曾有の御國辱を引出し候に付き、私共不情忌言、去冬以來、數度御書を奉り候處、御前には、尤の儀教思召、難有奉存候。然る處、後好臣共、謙依好謀を以て推蔽し奉り、妄に君意を矯め、今日に至り候ては、諸隊退討の御願請一決、既に太夫其外、先鋒として御出馬あらせらるる由、干戈を邦内に動かし候事、臣子の至情忍びざる儀、泣血の至りに候へ共、高國無君、御國辱を顧みざる、椋梨藤太、岡本吉之進、中川宇左衛門、諫早巳次郎、工藤半右衛門、財満新三郎、進藤吉兵衛以下、清光寺、黨數十人と、一戦決雄雄度候間、太夫其外の面々に於ては御國家にとり、寸怨無之候間、參謀岡本吉之進首領、唯今御渡被下候て、早々御引取御國是御挽回に御盡力為御國家肝要と奉存候。泣血再拜。

乙丑正月

諸隊各中

粟屋御刀殿

後にも話すが、高杉の戦法は、主として奇兵を用いたが、かういふ順逆を先づ説くところは、實に正々堂々としてゐる。

繪堂、大田村の戦

この戦書を述べて間もなく、正月三日と記憶する。大雨のドク／＼降つてをる中を、繪堂に向つて夜襲を試みた。それも成るべく空彈を撃てといふ命令で、大抵實彈をこめなかつたが、不意の夜襲に狼狽して、一堪りもなく通過した。この一戦に勝を誤して後、次いで大田村の大激戦となつたが、是も幸ひに我々の大勝利となつたので、茲に全く敵味方の位置を變へた。それ以來破竹の勢で、やがて國論を舊に復し、國是を一定し、政府顛覆の内訌に成功した。この繪堂の一戦と、大田村の激戦は、長州内訌の定つた紀念戦ちやが、それと引いて、御旗新大業の基となつ

高杉東行

たことを思ふと、高杉先生微つせば、といふやうな事が、いつでも思ひ出される。長州の勤王までは、薩摩でも土佐でも、實はまだ、向背が極端してゐなかつたので、この内訌戦後、長州の正義が勃興したから、自然勤王の大業に手を握ることが出来たのぢや。よくいふ事ぢやが、若しこの時の戦に破れて、先生も死んでしまひ、長州が徳詔の天下になつたら、維新の事もどうなつたか解らないのぢや。それで明治三十九年に私が撰文して、大田村碑といふのを立て、其戦跡を記念した。其文中にも、

「敵戦英捷、自是防長國是竟定矣、嗚呼此戰而不提則二州忠義之氣沮、而

二公大節將不傷見焉、而天之所眷、能致克捷、不獨二州之幸、異日得親

大政維新之盛、亦未嘗不基於此役也」

と言ふて居るが、其通りぢや、大田の戦役後、先生は三田尻に駐めてあつた海軍、といふてもおもちやのやうなものぢやが、それを手なづけてゐたから、そいつを日

本海の方に懸して、萩の本陣にまだ餘隙を保つてゐる、徳詔黨を威嚇する道方で、それはあまりと思ふた事迄、ドン／＼やつつた。案の通り、それですつかり參つて、容易に藩論の恢復が出来た。防長二州の都を山口に移されたのも其後ぢや。先生が大坂や武蔵に遊んだのも、この國論一致を見た後の事ぢや、が、やがてまた所謂長州征伐の戦争が始まつた。

四境の戦一

防長二州は、海岸線が廣く瀬戸内海に連つてゐるから、言はば懐は開放しものやうなものぢや。北は雲州石州から、海岸線はさう長い事はない。若し長州征伐の水軍が、この開放の懐へかゝつて來ては、それこそどうにも防ぎがつかぬ。瀬州との國境なら、大軍の通ずる道がきまつてゐるから、寡を以て衆を待つことも出来る。また其方面は表門ぢやから、相當に兵備もしてゐるが、其長い懐は、言はば裏門

勝手口で、どれ程兵を備へても足らぬ事ぢやない。先生は任長軍が、どれほど表門に迫らうが、さまで驚くことはないが、この懐を狙はれては大層心配してゐた。處が任長軍が真先かけたのが、周防の大島郡、丁度其懐に横つた島に押し寄せたといふ報知があつた。それはたしか、伊豫をはじめ四國地の佐幕軍ぢやつた。其報知を得た先生は、當時内宿丸といふ小蒸汽、前の乙丑丸よりもまた小さいものに無理に大砲を二門積み込んで、三田尻迄いつた。三田尻は鹽の出る處で、鹽漬が廣くある。其鹽漬の持主で、以前から心易い金持があつた。船を乗り捨てた先生はどういふ心づもりか、其金持を單身で訪ねていつた。丁度亭主は留守だつたが、常に来馴れた家ぢやから、構はすドン／＼二階へ上つてしまつた。家人が茶を持つて上つて見ると、先生は床の間を枕にして、大の字になつて寝て居たといふ。丁度六月が七月かの頃で、かなり暑い時分だ。家の者は晝寝でもしに來たか位に思つたらうが、先生にしては、既に朝敵の名を負はせられて、任長軍の押し迫まつた、こ

の多難の際をどう切り抜けるか、それよりもこの防長の空つばな、懐へ攻め寄せた敵軍を、どう始末をするか、といふ焦眉の問題に迫られて居る。愚圖々々してをって、三田尻遙へ上陸せられては、徒らに戦線が擴がる許りで、とても遊撃隊や奇兵隊位の兵卒では、應戦に遠がない、といふ心配もある。大にしては長州の運命小にしては目前の敵の處置、それが頭の中を往來してをって、却々晝寝處の騒ぎではない。僅ふにさういふ人の居らん處で、最後の決心を定める積りであつたらう。それとも既に決心はついて居つただらうが、日中では困るので、一つは時間を経過させる積りであつたかも知れぬ。日の暮れかゝる頃には、又來る、といひ捨て、ヒューッと出ていつた。來る時は牛の歩みで、悠然と來た者が、去る時はまるで風の様にヒューと去つた。再び船に乗つた先生は、彈藥や砲丸の調べを十分して、船員にも其目的を呑み込まして、夜半頃に三田尻を出た。さうして大島に集屯してゐる敵船の真中を目がけて、二挺の大砲が、十門にも聞えるやうに、ドン／＼力の

あらん限り撃ち込んだ。真の闇の中だから、丙寅九がどんな小さな蒸汽だか、誰にも見えはせん。敵は退路を絶たれたと思つたのか、大狼狽して逃げてしまつた。先生の奇襲は全く闇に當つたのぢや。つまりかういふ裏門から来ないで、どうか廣島口の木門からお出でなさい、といふ寸法ぢや。それ以來、長州の軍艦が恐ろしくて二度と裏門を窺ふ敵もなかつたのを見て、この奇襲が、どの位有功であつたかが分るではないか。

四境の戦二

それから門司大里方面の九州の敵も、馬關の兵は皆な一の宮といふ邊に詰めておいて、不意に朝がけをやつては、散々敵を慌ました。どんな勝ち戦でも、決して追撃をしない。早く兵を収めて、味方の兵數其他を敵に覺られない様に、サツサと引上げてしまふ。そんなことを度々やつて居る中に、肥後勢と小倉の入口で大敵戦を

やつた。赤坂といふ處であつたが、其爲め肥後勢は、全部兵を引返したので、それまで来てゐた各藩の兵も、遂に風を望んで引上げる。しまひには小倉藩がたゞ一つになつたので、とうとう和議締結となる。流石の舞局も歴史の示すやうな結果になつて、先生の目的通り、計畫通り遂行された。前にも言ふ通り、斯かる場合に先生が居られなかつたら、前後左右の大敵にどう應酬したか、結果はわかつたものぢやない。奇智雄横といつても、高杉先生の如く、事變に應ずる唯應の働きは、到底何人の模倣をも許さないのぢや。

病床に梅花

其頃から既に病氣が重くなつて、とうとう「幕中の人」になられたが、言つて見れば約十年間國事に執掌して、それも、危急存亡の際どひ場合許りに處して、神身を休める邊がなかつた爲めぢやらう。臨終の少し前、俺が病床へ訪ねていくと、かね

て梅の花を好いて居られ谷梅之趣など別名をつけて居られた程だから、其庭先の梅を折らして挿したりなどした。

厭病未飽門外前、爐邊只檢思花句、

同村亦有有心人、爲我移栽梅一樹

の詩も當時の作だ。尙ほ杜邊に一株の松の盆栽があつた。それに眞白に雪がかかつて居る。ハク雪もまだ降らないのに、と思つて其わけを聞くに、ニッコリせられた先生が、俺ももう今年の雪は見る事は出来なくて、きのふ観海堂馬關の風流人として、人に知られてゐた一から之を買つたから、お宿分をするのだといつて「越の雪」を持つて来てくれた。それを振分けて、雪のつもりで眺めて居るのちや、といはれた。一體高杉先生が、今日迄生きて居られたら、何をして居られるぢやらう、と我我老人の仲間、よく話すことぢやが、決して政治などには與からんで、詩句を練つたり香を捻したりして、一生風月を伴として、風流三昧に終られたであらう。と

いふのがまあ衆口一致といつてよい位で、時世に激して儼傲の人とはなつたけれど、それは先生の本心ぢやなかつた。とまあ我々も思ふのぢや。病中の作に

賞刀賞山住、閑臥獨怡々、

多病難辭客、寸心豈負時、

作書書更拙、探句句成遲、

恨我少年日、學兵不學詩。

といふのがある。これは恐らくその本心ぢやつたらう。尤も年少氣銳の時は、葵の紋のついた盃、といへば當時は、神前の供物のやうに崇め奉つたものぢやが、それを足踏にして、病状を呼ばれた様の事もある。また普通人のたばさむ物とちがつた思ひ切つた大刀を、常に帯びて居られた様の事もある。が、言ふ迄もなく、それらは時世に處する變通自在な處で、若し泰平の世に生れたら、恐らく大文豪大詞人となつたであらうと思ふ。固より武士の餘業であつたとはいへ、先生位旅行をすれば

紀行の時、入牢すれば獄中作と、時と場合によらず、胸中の磊塊を吐いた人は、恐らく他に類例を見ない。それによつて略々「學兵不學詩」の遺憾な心持が察せられるのぢや。

愚を學べ

其の當時、他等の様な年少のものに、愚を學べ、愚を學べ、と訓誡を垂れられたものぢや。俺も若い時は、擊劍をやる時に、道具の外れをわざと打つたり、鎗を使ふ時に、煙を突いたりしたものだ、そんな事では駄目だ。どうしても愚を學ばなければ駄目だと、屢々話されて居つたが、當時俺は充分理解する事が出来なかつた。漸く近年になつて、あれは孔子の所謂「甯武子其智可及其愚不可及」といふことを教へられたもので、年少短氣を戒められたものであらうと考へると、實に今昔の成に堪へぬ次第ぢや。

遺物といつても手元には何も無い、書函やなどは大概人に取られてしまつた。一つ残念に思ふのは、先生が上海へ船を買ひに行かれた時、二十一史を購つて歸り、其箱に「揚子金購書賢書、是予一人之私說」と書いたものがあつたが、明治二年に諸隊暴動を起した時、何處へどうなつたか、わからなくなつてしまつたのは、今でも惜しくて堪らない。

天下第一人

大西郷と會見せられた話は、俺は少しも知らん、會見せられたかも知れぬが、それなら何時か話の出る筈ぢやが、一度もさういふ事は聞かん。一體自分に興味のある様な事は、近親者に秘する様な人ぢやなかつたから、若し大西郷と會つて、何をか詳細相照らしたとすれば、それを黙つて蓋してをくやうな事は無い筈ぢや。俺も大西郷は充分知らぬから、何とも言ふことが出来ないが、時勢を見る先見の明

高杉 実行
 とか、國家の難に赴く勇猛心とかいふやうな點では、どうも高杉先生の方が、或は一枚上ぢやなかつたかと思ふ。イヤ誰が何といつても、俺は先生を天下第一人と、今でも信じてゐるのぢや。

川上 赤福

川上彌市が、何とかいふ辭世、さう〜、

議論より

實を行へなまけ武士、

國の大事を

よそに見る馬鹿

といふ痛快な事をいつて死んだが、これはまた向ふ意氣の強い、エライ男ぢやつた。先生も大變信用して居られたが、但馬で兵を擧げて失敗した。何でも十何人の介錯

をした後、自分で腹を切つたといふのだから、膽玉の大きかつたことは、想像の外ぢや。先生にも其死を悼む詩があつた筈ぢや。

それから赤福武人、これも騎兵隊の隊長でしつかりしてゐた。創業の際には、幾び離れた英雄が何處にも出るものぢや、維新の元勳で意張つてゐる人達は、まあさういふ英雄が、献立をしたその献立の、御馳走に箸をつけて居るのぢや。

梅花 一絶

嗚呼春風秋雨五十年、今少しく先生も永らへて居られたならばと思へば、何とは知らず、滂沱の滂沱たるを熱し得ぬ次第ぢや。

祭典に當つて捧げようと、左の一絶を作つて置いたから讀んで貰ひたい。

賦梅花一絶 恭奉供千東行先生五十春息之祭祀

先生曾有愛梅之癖 櫻桃谷梅之蓮亦其一也 詩意故及

英花秀發二州春、
別有早梅盤谷神、
勁質貞姿心鐵石、
邦家長億康家臣。

三頭首會同

會同の本旨

犬養、原、加藤といふ政黨の三首領を、一堂に會合せしめた、所謂三黨首領の會同は言ふ迄もなく他の發意ちやが、その本旨とする處は、内政上の諸問題はまあ見もあれ、外交國防の問題に就ては、一定の方針を定め、各黨派一致共同して、この國家の大事に當つてはどうだ。夫れが爲めには、黨勢の消長や、其他從來の行き懸りなどは、ナンデ眼中に置かず、外交國防を以て、黨争の具に供する様な、あんな馬鹿な事は、此の際一切打ち切りにして、虚心坦懐、肝胆相照して、共にこの大事を謀議せうといふのぢや。

水入らずの熱談

それでこの會同は、まあ承入らすの積りで、俺と三黨首領とが、膝を突き合して熱談し、今後の外交國防に關して、その大方針を定めたものだ。ナリー大方針といつても、要するにその大綱を定めただけで、細目枝葉の方案に就ては、各黨派から二名宛の委員を遣んで、具さに研究し調査する約束ぢや。斯ふすれば夫れで先づ大體の基礎は出来た譯だから、今後の建築は、三黨の國事に對する誠意と、目的達成の手腕に待たねばならぬのぢや。素より其の間には、大工と左官の喧嘩口論は、續々起さるゝだらうが、兎にも角にも、外交國防の大事に關しては、此の方針に準據せねばならぬ。といふ開取り丈けには成功した譯ぢや。

日獨開戦以來の宿題

一體、この三黨首會同の事は、俺に取つては、大正三年の八月十五日、日獨開戦以來の宿題で、俺も色々熱慮した。世間では今度の歐洲大亂は、日本の對外發展の

ために、千載一遇の好機を作つたといつて、上下等しくその條件を喜ぶ筈だが、成程或は千載一遇の好機かも知れぬ。併し一步退いて、熟々國家の將來を考へると、原の言分ぢやないが、實に憂慮に堪へぬものがすくなくないのぢや。見ろ、内には積弊山の如しぢや。之れで以て、どうして外に發展が出来るか、俺は過去二十有餘年間、丁度世間を退いた様な地位にあつて、シット側面から時代の變遷を眺め、あでもない斯うでもないといふ、何時も嘆息を發したものが、此の國家隆替の岐るる大切な時機に、只徒らに愁嘆語を洩らし、心の裡でヤキモキするばかりでは、世間に對しても寔に相濟まぬ事だと思つたから、あんな事を遣り出したのぢや。

舉國一致の方法

此の大切な秋に當つては、何よりも先づ、國論を統一するのが肝腎ぢや。國論の統一には色々な方法もあらうが、少くとも政黨派の反目軋轢を緩和し、從來の様

な、馬鹿な、暇合ひを切り上げにして、更に進んで、元老達の進出を見なければならぬ。これが真正の意味に於ける衆國一致の方法であると信ずるから、俺はこの衆國一致の實現上、先づ山縣公や其他の元老に向つて、極力彼等の奮起を促し、勸説大に努めたが、俺のこの希望は、遂に昨年(大正四年)八月三十一日を以て、事は全然不可能なりと、斷念しなければならぬ運命に達した。そこで俺は、少なからず失望もし落胆もしたが、此の儘引込んで仕舞ふのも、あまり胸甲斐ないと思つて、ヨシ元老意の如くならざれば、せめてその半面たる、政黨派の軋轉だけでも、緩和し除去したいものと考え、爾來密かに、其の機會の到来を待つてゐたのぢや。

對外策の紛雜

然るに昨年(大正四年)の一月以降の事ぢや。あの大陸内閣の日支交渉が始まつた。その當時

俺は、加藤の遺方に就いて、随分手酷しい攻撃を加へたが、また退いて考へて見ると、對支外交のあのブザマは、實に獨り時の外相加藤ばかりの罪でもあるまい。日本の憲政は何といつてもまだ幼稚で、あの通り各政黨は、對内問題は無論の事、對外問題に於ても、何ぞといふとガヤガヤ紛雜を極め、輿論が何やら、國民の後援が何やら、一切譯がわからぬ。それに肝腎の内閣は、各省の間に統一がない。外務、陸軍、參謀本部と、何れも勝手氣儘な事ばかりやる、而かもその内閣の背後には、何時も元老なるものが存在して、動ともすると無遠慮に、政府の行動に掣肘を加へる。これでは誰が其の局に當つても、到底完全な政策を遂行し得べき筈がない。假令加藤に代ふるに原を以てし、大養を以てしても、先づ以てこの惡弊を改革しなければ、誰がやつても畢竟五十歩百歩ぢや。固より黨派の軋轉も、憲政運用の妙理には相違なからうが、その軋轉が極端にはしつて、外交國防の事までも、黨争の具に供するに至つては、國家の不利益はまことに重大ぢや。殊に時局の今日、斯くては

邦家の將來が思ひやられるから、如何にもして速かに、政黨政派の融合を圖り、外交國防の根柢を定めやうと斷心したのぢや。

三回の會同

昨秋御大典の砦り、俺が終山の片岡邸で、加藤と會見したのも、世間では色々の取沙汰をした様だが、實はこの下心があつた爲めぢや。又何時か汽車中で、原に邂逅した際にも、諄々と俺の意見を述べたら、原も至極同意の模様ぢやつた。爾來時折りこの話を進め、色々と斡旋した結果、遂に五月二十四日に、愈々三頭首領の初會を開き、互に意見を交換したが、稍々其の前途に光明を認めたら、三十日に第二回の會合を催し、更に翌月六日に、第三回の會見を遂げた。此の時には仲々八釜敷い議論も出たが、大體に於て意見の一致點を見出したから、茲に、三頭首申合せの形式で、一つの覺書を作成するに至つたのぢや。

覺書

甲 號 覺書

外交及國防の方針は、勉めて一定し之れが遂行の途に當つては、各自黨派の消長に關せず、誓て一致共同するは勿論にして、外界一切の容疑を許さざる事。

乙 號 覺書

對支方針は、東亞永遠親交の目的を以て、相互利益の増進を圖る事。國防費は、相當の限度を定め、其の範圍に於て、謹慎處理せしむる事。

これが三頭首會同の由來だが、爾今この覺書の趣意に基いて、外交國防の大事を黨争の外に置き、この點だけは舉國一致の實を擧げたいものと、俺は邦家將來のため切に之れを祈るのぢや。

牛と云へば牛であれ

權兵衛と牧野

支那問題の騒がしかつた頃、犬養がやつて來居つて……先生ひとつ權兵衛に意見を
 をして下さい……と云ふから、俺は今更彼れに向つて意見をする必要を認めない。
 何故乎と訊くまでもない、最初權兵衛が内閣を組織する時、牧野(男爵傳藏氏)を外
 務大臣にすると云ふから、牧野は止せ、彼は親爺が豪邁さる。苟も大久保甲東の伴
 なる牧野が、へまな事でも仕出かすと、それこそ、甲東に申譯があるまい。外務次
 けは止した方が親切だらうと注告した。すると權兵衛は、大抵はやらせても大丈夫
 だらうと云ふて、最早、大臣の目録が出来上つて仕舞つたから、俺は放つて置いた。
 什麼だひ。いよゝゝ牧野を外務に据ゑてやらせるとあの始末だ。對支問題の道口は

まるで比丘尼以上だ。既に比丘尼の本性が露はれた今日になつて、堂々たる男子の
 墨丸を出せといつたつて出せるものか。俺はイヤだから、行くならお前行け……と例
 付けてやつた。處で犬養は正直な男だから、先方へ行つて來たらしい。又た俺の處
 へやつて來居つて、……イヤハヤ、權兵衛も牧野も比丘尼以上の代物だ……と云つ
 て大笑ひしおつた事があつた。

停車場の喜戯

成年の秋の初めだつたらう。臺上陸下が鹽原から御還幸の御り、上野驛まで御出
 迎へ申上げた事があつた。久方振で、古い馴染とも澤山會つた。其時俺がブラット
 ホームに立つて居ると、後から、チヨイ／＼と背中を突くやつがある。誰だらうか
 と思つて回頭つて見ると權兵衛さ、俺を云ひ居るかと思ふて居ると、
 「三浦君、餘り騒がして呉れては困るせ、ナト穩便にして呉れ給へ……」

牛と云へば牛であれ

とかうだ。其時に、

「俺は何にも仕やアしないぞ。第一貴様の道口は何んだ。見られた態でないぢやないか、支那問題は懸念するんだ……」

と云ふと、近くには澤山政客が居るので、樺兵衛も甚だ持て刺したらしく、

「まあ、餘り大きな聲で云はないで呉れ……」

と退出して行きおつた。

それからまた間のない事、皇太后陛下御在世の折であつた、皇太后陛下、純山御陵御参拜の御西下を、横濱へ奉送申上げた時、上野の驛の時と同様に、チヨイチロイと俺の肩を突く、又たかと思つて回顧つて見ると、果せるかな樺兵衛であつた。そして又、

「三浦君、三浦君……」

と云ふから……此度は此方から機先を制して、

「何んだひ、又俺の事かひひ……」

と怒鳴つてやつたら、樺兵衛面喰らつて、

「まあ宜しく頼む……」

と、二の句が繼げずに、引退つて了つたのは、實に可笑しかつた。

一體世間の奴等と云ふものは五月蟬もので政府などでは、三浦と云ふ親爺は、甚だ危険な奴で、亂暴な事許り企らんで居る厄介者だと思つて居るらしいが、俺はソナナ事に貸す耳は未だ持つて居らんのおぢや。

人間を人間が、牛と云ふなら牛でよい。馬と云ふなら馬で又結構。更に差圖はないが、懸念したものか、何時の時でも、俺と頭山とは、世間からも、政府からも、亂暴者の様に思はれて居る。

俺が初めて頭山に會つたのは、明治二十二年の春、條約改正問題で、日本國中、引つくりかへる様な大騒の打柄であつた。俺は學習院の院長を専断して居たが、會

牛と云へば牛であれ

牛と云へば半であれ
 見する迄は、頭山と云ふ男は、只だ支洋社の壯士を願使する親分であらう……と
 ひに思つて居たが、併し會つて、膝を交えて、しつくりと話して居ると、豫想と
 は全然反對な男であつた。聞は狭ひ様だが、奥行き深い、一種犯すべからざる、
 眞に男らしい男である。と其時から見抜いて居たから、引續き今日迄も、親密の間
 柄となつて相往來し、國家の爲めに更に相許す處があつて、共に働いて來たのであ
 る。

一體、世間の評判などにかまつて、くよくよして居る奴に嫌なものは居ない。牛
 と云へば云へ、馬と笑へば笑へ、自己の信する處を、馬車馬的に、一直線に向つた
 方向へ暴進せなければならぬのぢや。自己の信する道を進むに、誰に何んの遠慮が
 いらう。この點に於て流石に頭山は凡を抜いた豪ひ處のある男である。

頭山と云ふ男は、自己のやつて居る仕事に就いて、眞に勤かすべからざる公明正
 大なる覺悟を持つて居る。それが爲に、一旦君國の爲めに、正しき路に踏み出した
 以上は、如何に世間では思はよが、如何に稱事が五月蠅く附け纏ふが、更に平氣であ
 る、無頓着である。殆んど其様な事は、蚊がしまつたとも思つては居らん。國士は
 是非さう有りたものぢや。左様なければならぬ事だ。苟も自己の仕事に就いて
 ビク／＼して居る様な腰拔魂情では、到底自己の所信を貫徹することの出来るもの
 ではない。

先づ自己を信ぜよ

處で此れも先年の事、例の阿部政務局長暗殺事件の當時、相當世間に名の知られ
 て居る連中が、揃つて俺の處へ、相談を持ち込んで來た。其時、連中に願いて、稱
 事調査が見行して來て居つたのだから、座敷へ通つてからも、連中は何んともそ
 は／＼した態度であつた。俺は甚だ意氣地のない事だと思つて、腹の中では笑つて
 居た。

「連中の来た用談と云ふのは、岡田藩の後始末を怎樣つけたらよからうかと云ふ相談の持込みであつた。俺は、

「岡田が今日の進退は、年少ながら實に立派な志士の振舞ひである。宜しく君等が盡力して、盛大な葬儀を營んでやるが宜い。夫れが又た志士に對する禮である！」と云つてやると、

「そんな事を今日しては、警視廳からの疑を受けねばならないであらうか？」との連中の挨拶であつた。俺は更に斯様云つてやつた。

「君等の行動が、天地に向つて更にやましひ取すべき處がなく、眞に公明正大であるならば、そんな事に憂慮すべき必要はなからう。平氣でやつてのけなければならぬ筈だ。君等の様に、自分で自分に疑を抉むやうな態だから、警察で眼をつけるのは當然だよ。苟も國家の爲めに、立派な行動をとり、志士に對する禮を盡すと云ふに、何の憂慮する必要があらう。君等の心に、俺の云つた通りを是と信ずる事が

出来るなら、何の憂慮する處もなくやり給へ。それは、自分の是と信ずる處を敢行する所以である……」

と斯様云つてやつたら、初めて連中も合點が出来たらしかつた。

自己を信ずる事の出来ないものなら、他からも疑がはれるのは、何明り切つた當然の理ではないか。男子の事業、何事に依つても終始一貫した意氣がなければ、何時迄でたつても、うだつがあるものではない。自分で自分のする事に所信がなく常にビク／＼して居たなら、其の事の成就と云ふ事はあるものではない。殊に、一身を投ずる國家問題に携はるなどは、更にオコノ沙汰だと云はなければならぬ。其處に至つては頭山は天下の絶品だ。火も焼く能はず、水もおぼらす事能はずとは、彼の如き者をいふのだらう。頭山の偉大は只だ其處に在る。彼のなす事業は何んでもない。玄洋社の頭目は何んでもないのぢや。

徳不徳

犬養と頭山

俺れが此の座敷に居て、すつと世間を見渡すと、其處には種々な人物がある。そして徳不徳に依つて岐るゝ意外な現象を見るのぢや。豫想外な悪名を着る人物も澤山ある。其例を謂ふて見ると、此れも前年、矢張り支那問題の沸騰して居る時、當時の犬養と頭山とに就いて見ても判る。兩人とも對支聯合會へは等しく顔を出さなかつた。それでありながら、頭山は更に世間に悪名を立てられて居なかつたに反して、犬養は色々な評判を立てられて居たではないか。

此れは犬養の態度に鮮明を缺く處があるからぢや。此れと云ふのも畢竟するに、犬養に徳の光質して居ない處があるからぢや。犬養と同じく、聯合會には出席もせ

なかつた頭山には、更に何等の悪評をも起らなかつたのは、徳に於て頭山が、犬養より勝つて居るからである。

併し只だ、徳の無有許りを主として、其の行動を聞却しろと云ふのではない。其當時、俺は頭山に會つたから、

「近頃の支那問題に就いては、君も犬養と同じ態度をとつたにかゝはらず、犬養許り攻撃の矢面に立てられて居るが、此れは畢竟犬養の徳の足らない處の致すものでは有らうが、然し、君も不可よ。昔と今とは、時勢もかはつて居るのだから、こんな問題で、若いものが騒ぎ立てゝ居るのに、黙つて許り居すに、チトは教へてやるが宜い。若い者のとるべき方針に就ても、銷りのない様に導いてやるが宜からう」と、話した事があつた。が、徳不徳によつて分れる、其差には、可成大いものがある。

頭山は又た實に豪ひ勇た。決して恐ろしひ人物ではない。話のよく分かる仁依な

武士なんだ。

それなのに、井上(かみかみ)・故(こ)侯(こう)爵(けつ)などは、恐怖(こお)病(びょう)に囚(こ)はれて、遂(つい)に會見(かいけん)し得(え)なかつて他(た)界(かい)して了(しま)つた。彼(かれ)れは一生(いっせい)眞(まこと)の英雄(いゆう)武士(ぶし)と握手(てんてん)せず(せず)に死(し)んで行(い)つたのだ。まあ可愛(かわい)相(あい)な男(おとこ)だよ。

俺の戦争哲學

弱い者の適者生存

支那問題(しな問題)か、どうも困(こ)る。弱(よ)者の切(き)るぞ〜では本統(ほんとう)に切(き)る段(だん)になつてぢや……
 近頃(きんご)の言(こと)で適者(てきしや)生存(せいぞん)といふが、弱(よ)い者(もの)には強(こ)い者(もの)、強(こ)い者(もの)には強(こ)いもの、それ〜この道(みち)で行(い)きやあ、あの道(みち)で行(い)くといふ、それ〜の武器(ぶき)のあるものぢや、どうして、何(なん)千年(せんねん)の歴史(れきし)を経て、あの道(みち)で来た(きた)支那(しな)ぢやもの、日本(にっぽん)の兵(へい)の強(こ)い位(くらい)どうの昔(むかし)に知(し)りぬいてゐる支那(しな)が、あの道(みち)で甘(あま)く脱離(だつり)化(か)さうとするのは當(あた)りぢや、あの道(みち)で？ そりや外(あ)交(こう)術(じゆつ)さ。外(あ)交(こう)上(じやう)真(ま)に太刀打(たちうち)の出来(でき)るものは、今の處(いまのところ)日本(にっぽん)に唯一(たがひ)一人(ひとり)もない。それが即(すなは)ち支那(しな)に取(と)つて、弱(よ)い者の適者(てきしや)生存(せいぞん)ぢやないか。
 信長(のぶなが)が洛中(らくちゆう)に入(い)つて、天下(てんか)に覇(は)を稱(なづ)へようとした時(とき)ぢや。丁度(ちょうど)信玄(のぶのぶ)が死(し)んで、謙(けん)

信一人になつた……、誠信も相手がなくなつて、大に髀肉の嘆に堪へん、そこで誠信上落といふ事になつた。その時ちや、誠信がさういふた……、信長は下駄を穿いていくさをしてゐる……、と信長はこれは大變といふことになつて、越中ちやつたか……誠信を迎へに人をやつた。そりや太刀打が出来んと見れば、下手に出るより外はないから……誠信はその時毒殺されたらしい。

兎に角、物事には表裏陰陽のあるものちや。さう正面から立派に押し立て、仕つても、裏には抜け道がある。その呼吸妙諦を知らんと何でも日支交渉になつてしまふ。そりや切るぞ切るぞで嚇しのさくと思つて居ると、飛んだ茶番を仕出来すから……。

それと言へば、歐洲の戦争も、五分々々の押し合ひで、一寸堪はあきさうにないあれがどう片付くか、譯にもそれはわかる筈がないが、俺は近頃こんな事を考へた。あゝやつて五分々々の押し合ひで、人は無茶に死ぬる、金は無茶に使ふ。さうして

どうなるかといへば、結局はどちらかが勝つて、どちらかが敗ける、……たゞ勝敗の一懸許りちや。その勝敗をつけるために、大きな犠牲を拂ふ。それが段々嵩じて来て、段々餘計に金を使ふことになる、さうすると、いつかそんな犠牲を拂ふことが如何にも馬鹿／＼しい事に思はれて來はせぬか、勝敗をつけるだけなら、そんな馬鹿氣な犠牲を拂はずに、済む方法はないか、といふ事になりはせぬか。

昔の旅といふものは、ミンナ徒步ちや。今から見や、マドロクナイものちや。其當時はミンナ徒步ちやから、遅いも早いもない。今日の様に汽車汽船が出来ればミンナが同じやうに乗るのだから、之も亦遅いも早いもない。早打駕が昔では一番早かつたものちやが、今の汽車で急行列車があるのと同じことちや。昔の戦争は刀に鎧ちやつた。これもミンナが刀に鎧ちやつたから、それに敵對しそれを防ぐものも、同じやうに鎧ちやつた。今の戦争は大砲と機關銃ちやが、それもお互に大砲と機關銃ちやから、それを防ぐ方法も、懸操だの要塞だのになる。も一つ進んで、今度は

飛行機飛行船の完全なエライヤフが来れば、もう大砲も機關銃も用はなくなる。艦艇も要塞も足手纏ひぢや。總てが空中戦争に移つたとすると、もう國境もヘフタクレも無いやうになつてしまふ。

そこぢや、一つよい物が出れば、他にそれと平均するものが出る。大きな人殺し機械を發明すりや、又それに敵對するものが出る。さうやつて一つ／＼上へ／＼と、立見の大勢が爪立てするやうに張り切れさうに首を伸ばしていつても、人間の背丈が、まあ五尺内外ときまつて居れば、ミンナが坐つてゐやうと、立つてゐやうと、物の對抗する理合にかはりはないぢやないか。つまり何處まで往つても、同じ事なので、昔の戦争は一人／＼の戦争ぢや。今の戦争は何百萬と纏つた人間の戦争ぢやといつた處で、勝敗のつく理合に何のかはりはないのぢや。物は外形は大變に違ふが、たゞ餘計に人が死んで、餘計に金を使ふといふまでぢや。一人の戦争が野蠻で、幾百萬人と纏つた戦争が文明といつた處で、一向何にもならん話ぢや。

尤も大人と赤ん坊の喧嘩なら、大人の方がすぐ勝ちもしやうが、今後の戦争は、大仕掛に行くだけ、段々今度の歐洲戦争のやうに、五分々々の押し合ひになるものと思はなければなるまい。さうして後はどうなるかといへば、其爲めに馬鹿々々しい人が死ぬ。多大の富を消亡する事となれば、それを幾度も繰り返してやる程、人間は馬鹿でもあるまい。どうしても一生懸命瓜立した奴が、あゝ草臥れた、といふ時が来るのは間違いない。

野蠻ぢやの文明ぢやのいふても、神の前でお圖を引いて勝敗をさめる。あれもさうぢやが、力士を代表に出して、それで最後の決裁をしたなどが、俺は如何にも意味の深い、尤もな事に思はれるものぢや。今の戦争も、このまゝ押していつた揚句の果が、矢張り同じやうな、何か代表的のもので勝負をさめる、といふ事になりはせぬかと思ふのぢや。尤も相撲取を出すといふのも變ぢやが、まあ優勢な飛行機を出して、その勝負によつてさめるとでもするか、又一方から考へるとぢや、この世の

中には、いつまでたつてもわかりさうにない、ナンデ解らん事が滿ち充ちて居るのぢや。どうして春夏秋冬の區別があるか、どうして晝夜があるか、一に一を加へてどうして二になるか、人間の手に謀でも何故に五本の指を持つてゐるのか、それは科學とやらで或處までは説明するが、根本の道理になれば、一向わからんものぢや。皆土臺が假定のものぢや。それは考へたつてわからんから、謀でも承知する度合ひに落着けて置いて、まあさういふものぢやと標準的にきめて置くのぢや、そのわからん處になると、神といひ、造物主といひ、天といふて来る。つまり人間の智慧でわからん處の異名といふてもよいのぢや。知識の圍けん昔は、其わからん所もわかる範圍も大層狭かつた。電が鳴つても神様が怒られた。日蝕がしても神がくれぢやといふ。そこで喧嘩でも戦争でも、人間のわからん事は、神の前できめるとなる。神の加護を頼んで、力士を一人出して、勝負をさせるとなる……餘程簡單に運ばれた。今後設け人智がどれほど進んでも、進めば進む程、わからん事も段々に殖えて来る

つまりわかるわからんの範圍が擴つて来る。何處まで往つても、もう何も彼もわかつてしまつた、といふ事はある可き道理ぢやない。矢張り或る度合の假定の上で、まご／＼して居るのぢや。どうして神や造物主や天がもういらぬものになつて、お拂ひ箱になる時は来るものぢやない。して見ると、昔のやうに至極簡單に、それを神とはいはぬかも知れぬが、やつぱり神にお頼み申さなくてはならぬ場合が、ないとも限らぬぢやないか。

どうぢや、佛の戦争哲學は……

此間も犬養に會つたら、頻りに國防の根本方針といふから、根本とは何か、と大にこの哲學を浴せかけたわけぢや。根本といふて、段々押し詰めて行けば、何一つわかつたものはありはしないのぢや。國を立つる上でも、まあさういふものぢや」といふ標準、謀にでも納得出来る假定から割り出すより外はないのぢや。國防方針でも、假令ば海主陸従とするか、陸主海従とするか、といふた處で、露國が強くな

つて、ドン／＼駆迫して来れば、勢ひ陸主海軍になるし、米國がドン／＼軍艦を作りや、已むなく海主陸従にもなるし、始めから海主陸従と物を限つて、扱て英國が逼つて来たら、真逆の時に一向お役に立たんぢやないか。そんな根本方針なるものがあつてたまるものが、と笑つた次第ぢや。

犬養 木 堂

味のある話せる奴

天下犬養を知るものは唯だ俺一人、天下俺を知る者唯だ犬養一人だ。犬養を語り犬養を論ずるもの、俺を指して他に見えまい。併し今はまだ犬養の事を扱是れ言ふべき時でない。大丈夫の眞價は、折を盡よて後に定まるといふのは此處の事だ。これが一山三文の大間なら兎も角、犬養といふ奴は、千年萬年に、漸つと一人しか出て来ない男だ。未だ死にもしない中に、傳記を作るなどは、生きて居る中から銅像になつた様なものだ。

犬養といへばあんな男だ、と一口に言へば夫れ迄の事だが、得失を論せずには短を論ずる事となると、オイソレと左から右に一朝一夕に、價段を決めるといふ譯に

は行かぬ。要然、後れ位味のある人間は、後見付からんよ。まあ今の世の中で、話せるものは、奴位のものだらうよ。

俺が喧嘩の仲裁役

犬養は能く喧嘩をする奴だ。些と静かにして居るかと思ふと、直ぐがタガタ行り出す。又始めたなと見てみると、チア騒ぎだ。傍に居る奴には、ドイツにもロイツにも喧つてかゝる。面かも血を見ずんば止まぬといふ方だから耐らない。大概腰の弱い者は、吃驚して逃出して仕舞ふ。今の國民黨は進歩黨時代から、大分内訌があつた。世間では昔な犬養が張本人のやうに喧してゐるが、實はあの大隈のお鏡舌から出た事だ。喧嘩するのは、何時でも犬養だ。何時も大勢を向ふへ廻して突つかかつてゐる。何事といふと、直ぐに俺を喚に来る。そこで俺が出掛けていつて大隈に「何故お前さんは相手になるのだ。犬養、大石なんていふ子供供の喧嘩に、阿婆のお

門前の黒犬

爺さんが飛出すのが、全體間違いだ。阿婆は黙つて引込んで笑つて見て居りや、それでいいのだ。好奇に片ツ方に扇を持つたりするから、火の手が大きいなるのだ。今日の處は、まあ俺に任せてくれ。斯ふ何時までも喧嘩ばかりしてゐては仕様がなから、俺の處へ双方共寄越してくれ。喧嘩は家の中でするものぢやない。往來に出でするものだ。喧嘩するなら立ちかけに、家を叩潰して了へ。左様して行る處まで行つつける。家を潰す前には、多年政友だから、別離の水盃だけは、俺の家で爲せてやる、お前さんも餘り鏡舌らぬ方がよい」と答めてやると、若い顔をしてゐた。大隈は鏡舌るばかりが能く、腰から上は、がらがらしてゐるので、頭から抑付けると、赤くなつて了つて駄目な奴だ。遂に進歩黨を彼んな事にして了つた。

其當時はまだ、神機知常が生きてゐた頃だが、犬養が怒り出すと、有象無象が、

他の處へ被んで来て、拜むやうにして「大養を静めてくれ」と頼む。譯來太郎や加藤政之助、その御大將が大石正巳で、門戸開放といふ看板で、大養に反対する。其處で他が頼みに来た奴に「マア待て、お前達は門戸開放といふが、それは大養開放の事だらう」といふと、急所を突かれて「イヤマヤしながら」「イヤマヤの盛衰に關する事で」などと胡麻化したものだ。當時、或新聞で、進歩黨と大養とを評して、慈懷事をいつてゐた。寺の門前に酒屋がある、酒が旨くて値段が安い。處が買ひに人が一人も来ない。能く能く其評を訊いて見ると、寺の門前に黒犬が居つて、吠ついたり、噛みついたりする。的確、大養は黒犬になつたのだ。而も彼の眼の玉をギョロ付かした、あの恐ろしい黒犬の御面相では、成程酒屋の繁昌せぬのも無理はない。大石などは、始めつから内密で金んで居たが、三年程も立つと、例の改革非改革問題で、大養放逐論を真向に振擧して駈出した。彼の時は、彼は熱海に居たが、大養から電報やら、手紙やらが頻々と来るので歸つて見ると、もう大養は大立廻を始め

てゐる。其時も大隈に種々教へてやつたが、滅茶滅茶に糞糞を出して居つた。他も大養の喧嘩には骨折らされたものさ。

活殺自在天下一品の演説

其頃は犬養も、盛に火のやうな毒舌を吐いて、三寸不爛の舌頭に、活殺自在をやつたものだが、此頃では餘程行らなくなつた。鈍つたのぢやない、相手が大きくなつたのだ。考へて来たのだ。彼の面貌を見よ、骨の上に皮を突張つたやうな意地の悪い顔を、決して美しい顔ぢやない。彼の恐しい眼付で、怖い顔して睨むから、弱い奴は、尾を巻れてヒョロヒョロ逃出す。面は人間の看板だ。思想は直ぐ面に表はれる。陶器屋には陶器の看板がある。八百屋には八百屋の看板がある。看板がなければ家の中に何があるか解らない。看板で商賣が解るのだ。人間だつて同じ事だ、俗な奴は俗な面してゐる、巾着切は巾着切の面をしてゐる。大養の面を見ろ、怖い奴ぢ

やないか。處が此頃では、元からではあるが、段々氣品が高くなつて来た。龍のやうな顔になつて来た。眼の付け處が大きくなつて来た證據だ。看板に飾りなした、毒舌を餘り振廻さなくなつたのも、此處だよ。犬養は幾番の事の大嫌な男だが、演説になると天下一品だ。尾崎なんどの様に、餘を延ばした様な、甘つたるい事は少しも言はぬ。言ふ事に無駄がない、ピラつと胡椒が利いて、ヒヤヒヤさせるのは犬養の獨特だ。猪突べらべら長くさへ遣ればいいと辯論いしとる演説屋などには、眞似は出来ないぜ。

俺も心配してる

先達、胡蝶といふ支那人がやつて来たから、その歓迎會を開くといふので、俺にも出て呉れといふ譯で、唐人の會など、餘り感心もしないが出て見ると、肝賢の犬養は、自宅で園遊會を開いてゐるとかで、未だ見えて居ない。餘り寂し相だから

柴四郎をトツ掴まへて、今の政黨は鳥屋の様なものだ。お前の方の新政黨にはレゾホンだの、マクホンだのといふ、數ばかり澤山集めたので、彼方でも突ツキ合を造る、此方でも突ツキ合をやるといふ風で、鳥合馴れてゐない。中には若鳥だといふので買つて見ると、もう羽根が抜けてコゴ／＼した老鳥で、固くてトクモ喰へないといふ代物だ。其處になると、政友會は違つたものさ。ソレ外の鳥屋よりは何廻りは良いし、第一鳥合馴れて居るから、打拵つて置いても、飛立たせやうとしても、却々飛立たない。鳥屋の阿婆のいふ通りに、チャンと大人しく落付いてゐる。實に見上げたものだ。處が犬養の國民黨になると、何れも是れも、皆な親合鳥の軍鶏的ばかりだ。朝から晩まで喧嘩通しで、一疋として完全なのは無い。鶏冠が裂けて、だらりと下つともあるもあれば、顔が血だらけになつてゐるものもあり、中には鶏爪が一本折れてゐるものもある。四十何羽といふ軍鶏的が、眼ばかり怒らして、血だらけになつて居る。加之に、何廻りが悪くて、復せかけて元氣ばかり出すので、肝が立

つて、外處の鳥舎の鶏を見ると、飛んでいつて眠る笑く、酷いものだ。ソレ其處に居る美和作次郎などは、聯合鳥の大將林だ。今夜の園遊會も、聯合の様な事だらう」といふと、ツアといつて普な大笑だ。今までは聯合ばかりで行られたが、日本人といふ奴は、行くと醒める、去ると眠るといふ方だから、訓練が却々六ヶ敷い、俺も感ながら、國民黨と犬養に就ては、心配しとるよ。

俺が犬養を男にして見せる

犬養は四十餘人を率ひて居るが、まああれでいつて貰ひたい。大政黨といふものは、政友會の様に行かなくては駄目だ。當時の政友會は飽く出来てゐた。西園寺の冷淡に食パンの様な味のない松田や、ビスターキの様に脂肪濃い厚とで、熱然と役者が揃つてゐる。黨の下らぬ仕事は、第二流に任せておけばよいのぢや。此間山本權兵衛に、稱密院で會つたら「どうも政友會は、不得要領で困る」といふて溜した

から、俺が「イヤ不得要領でいゝのだ。不得要領の後に、要領を見る位の處で、お茶を濁しておけ」といつてやつた。蓋し不得要領な大政黨は有つても無くても良いやうなものさ。其處になると、犬養は傲然も態様も一人でやらねばならぬ。併し、此處が犬養のよい處だ。國民黨を政友會や、榎多村と一所に論じて耐るかい。犬養もあんなに働いちや、身體を壊しはせぬかと憂へてゐたが、此の様子ぢや、却々精力が強い。まあ是れからが犬養の本場だ。憲政擁護などは、三番更に過ぎぬ。憲政の神様だナンて祭上げるのは止してくれ。犬養はあれでも矢張り人間だよ。今に此の三種格様が、あれを男にして見せるぜ。

明治天皇の御事ども

聖徳無量

畏れ多くも先帝陛下が、御徳文武に在りまして、古今東西に卓絶し給ふた御仁君であつた事は、茲に申す迄もない事であるが、自分は、陛下が御大患以來、御隆修造の御態度を拜察し奉り、今更ながら、御徳量の無窮なることに、たゞ感服するの外はないのである。

明治三十七八年以來、御病氣にお罹り遊ばしたといふ事は、今開始めて承はる處であるが、何と申しても御健剛の御氣質で、皇子の事を御慈念あらせられ、政務にいそしみ給ふの御餘り、玉體の如何といふが如き御事には、あまり御氣をお止め遊ばす遊なく、時々御不豫等あらせらるる際でも、只だ捨て置けとばかりの御體で、

物々しく騒ぎ奉る事を、お喜びにはならなかつた。

然るに、今回の御重態に陥らせ給ふや、萬事を侍醫や左右の者にお任せ遊ばして、何等の御意もあらせなかつたが、皇后陛下の御願ひにより、始めて三浦、青山、兩醫學博士を、宮中にお召し遊ばす事となつた。其の際でも、これは先例のない事であるから、十九日に、陛下の御意可を乞ひ奉つた。陛下に置せられては、唯首肯し給ふのみで、何の御異存も仰せられず、二度迄も御意を伺ひ奉つて、始めて「ヨシ」と只一言仰せられた計りである。

其後、昏睡状態に陥らせ給ふ迄は、御知覺も極めて御明瞭にましまし、御悩みの程も、拜察するにいと餘りある程であつたが、片言隻語も御苦痛の御言葉を、お洩らし給ふやうな事になかつたのは、平素御修養の程も拜察せられ、感涙にむせよの外はなかつたのである。

陛下が、時代の盛衰に際會し給ふて、維新の大事を御成就なされたのは、決して

偶然の事ではない。豫てから、新くも御修養の深きによる事であつて、百千の老將も、民間の豪傑も、何々に金及し能はざる處であつて、只管成順の極みである。

主上が、此の御病氣中や、御臨終の際に、衰弱し給ふたその勝れたる御徳度は、申すも畏しき事ながら、無窮の御徳量と、聖怒の御氣象を、遺憾なく御示し遊ばされたので、奉仕の臣は平生に於て、其の然る所以を知らず、今日の御事あるに及んで、始めて、其の因つて來たる所以を拜察し奉り、たゞたゞ、萬感禁する能はざる次第である。

日露戦争の際、畏しこくも 陛下は、遙かに兵士の寒苦を思はせ給ふて、夜半ストロブの火を消させ給ふた事の如き、いとも御仁慈に富ませ給ふた。その御聖徳の數々は、茲に枚舉に遑はないのである。

是等は皆な、陛下御親らの御意に出たものであつて、決して左右の臣の計らひではないのである。風にや玉體を冒され給はん、雨にや御尊體痛のさせ給はん

陛下は只管に、御床の褥を重ね、御居間の爐火を熾ならしめやうとこそすれ、如何にかお側から、あの様な有難い御行を、諷あつてお勤め申す者があるであらうぞ然るに、陛下に於かせられては、御躬親ら、昔の聖王堯舜たらんと、御心がおはしたであらう、おこそ有難き御逸話の數々を、お遣し遊ばした次第である。

東西を問へば名主多く、古今を釋ぬれば仁君も少くないが、彼等海外諸國の英主と稱せられた人や、幾百萬の大軍を動かして、大規模な戦争をした人々などは、自己一身の野心からして、強いて人の子を暴君し、之れを以て無名の戦を事とし、勝てば即ち、一勞功成りて萬骨枯れ、唯々帝王の榮譽を誇り、臣庶を虐げる様な事はするが、寒宵爐火を消して、掘土の夜露を餐する程の仁君は、いまだ嘗て世に多く出た事を聞かないのである。

茲に我國御歴代の、名主のお方々の御事蹟を案じ奉るに、英雄の君は、必ず之れに伴ふ御聖徳あり、志氣猛き御方は、仁慈おはさざるの誤りあり、才識勝れ給へば

慢心おはしますの憾みあり。彼の御禮文武なる後醍醐天皇でさへ、申すも畏き事ではあるが、實は御一人の御慢心から、あたかも中央の大業を破り給ふたのである。

然るに、先帝陛下に於かせられては、建國以來の大事業たる、維新の皇業を成し給ひし後と雖も、寸毫の御慢心とはあらせられず、世界に稀なる、此の活氣ある新興國の皇帝として、御老齢に渡らせ給ひながら、尚ほ御壯年の御時、鳥羽伏見御祭の間にあらせられた、その當時の御心持で、聊かも衰へさせ給はず、嘗て元田永平の御遺講を聽かれ、村田新八や山岡鐵太郎等を、御對手となされたその當時の御銳氣を以て、今日に處し給ふた御有様は、何と申してよいか、讚美の辭に窮する譯である。

今や我帝國は、渾圓球上に於ける國際上の地位より見るも、國家内部の充實よりいふも、新造興隆の半面に伴へるその憂患は、一にして足らないのである。そこで今日、苟も時務を知るの士は、維新當時に十倍するの決心を以て、國家内外の諸國

題に對し、之れに處して行かねばならぬ、至極大切な時である。

然るに嘗て、彈丸雨粟の間に出入して、徳伴にも生を全ふし、今日の地位を處り得た、所謂元老なるものや、重臣と稱せられる者共を見るに、彼等は、國運の隆昌に伴ひ、文明の進歩につれて、漸く皮想の潮流に馴れ、徒らに慢心を起して、漫りに大政維新の功業に辜負し、意滿ち氣驕つて、本来の面目を忘るゝ様なものが、果してないであらうか。

自分は、陛下が、數十年一日の如く、其の明德を養ひ給ふた御精勵に比べて、自から貢むる處は多大である。そこで今切に、陛下の御勗御を哀悼し奉ると同時に、修省自覺、御盛徳の高分の一を學ばんとする志を起さば、是れ實に、陛下在天の英靈を慰め奉つる、臣子唯一の本務であると信ずるものである。

明鏡の如くあらせらる

明徳天皇の御事、御徳高くあらせられし事は、今更申すも恐れ多い次第であつて、實にその御一言御一行か、悉く、教訓とも模範とも、仰き來るべき程であるから、彼れ是れ、御逸事などを取り立て、申す迄もない事である。其の御明察の、鋭くして正しくあらせられた事は、恰かも明鏡の物を照らして、誤らざると同様で、御傍に奉侍した者の、常に恐懼措く能はざる所であつた。

顧みれば明治六七年の頃、東北を御巡幸遊ばされて、仙臺に御駐蹕になつた事がある。時の縣令は、長州の者で、宮城時亮といふものであつたが、御前に出で、縣治の状況等を言上に及んだ。其の晩になつてから、陛下は、御傍に奉仕して居た木戸公に向はせられて、如何に木戸、今日縣治の模様などを話した此處の縣令は、曾て汝の使つて居た男であらうと仰せられる。木戸公は、何の御意たる事を解し兼ねて、ちと御尋ねが解り兼ねますが、どうして左様の事を、御考へ遊ばしましたかと、申し上げると、陛下は、御微笑を含ませられて、イヤ何といふ事でもな

いが、先刻縣治の事を話す時分に、一言云ふては汝の顔を見、一言云ふては汝の氣色を窺ふやうにするから、蛇皮これは、元と汝が使つて居たものだらうと思つた迄ちやと仰せられたので、流石の木戸公も、其の御明察の鋭きに、覺えず平伏して、相違ない旨を言上したといふ事である。

此の話は木戸公が、御巡幸の御伴をして、歸つて來ると、よい御土産があるといつて、自分に話された。共に成沢にむせんのであつた。實に此の如く、御巡幸の明かにおはしませし事は、些細の事と雖も、御見通しにならぬ。恰かも、明鏡の物を照らして、殘さぬが如くである。従つて、縣治の善惡、人物の適否などは、充分御察しになつて居られたに相違ないが、夫れ等の事は、一に轉河の臣にお任せになつて、一言も仰せにならん所に、御徳量の洪大無邊なるを、仰き奉る次第である。能く御徳をお守りになり、平常御實素に、御一身をお持ち遊ばされる事は、拜察してゐた處であるが、此度、御大患に就いて、始めて大患に伺ひ奉り、實に其

の御質素の非常なるに、驚き入つた事である。僅か十八歳許りの御居間に、電燈もなければ、扇風機もあらう筈がない。平生燈油を御用になるので、黒く煤けてゐる。餘り古く見えるから、徳川時代の残つた建物かと思つたが、矢張り、御建てになつたものであるが、永く御手入れをなされぬからと、承つて、實に恐懼に堪へぬ事であると思つた。

面かも、其お敷きになつてゐる絨氈に至つては、申すも畏れ多い事であるが、昔しは學校などに敷いてゐたのを見たことがあるが、當節中流の紳士の應接室にも、あつた云ふ物は敷いて居らぬ。撫でると、プタ／＼する毛の筈で、誠に御粗末極まる品である。それが平生の御居間にお敷きになつてゐるから、恐れ入らざるを得ないではないか。

此の絨氈の毛に解れた時、云ひ知れぬ威に打たれて、涙の滂沱たる事を禁じ得なかつた。何人でも御車寄せから、豊明殿、正殿風風閣、麝香閣と伺つて、どの御間

でも、其の莊麗なる御様から拜察して、どうして大奥が、斯く迄に御質素であるかに考へ及ぶものあらう。申す迄もなく、これは表御殿は、外國の使臣などの御關係から、御設備をなされてあるが、大奥は、御一人の御住居に過ぎぬといふ御考へから、斯く迄、御素質になさるゝ事で、其の大御心の難有さに、六千萬の同胞誰か、感泣せぬものあらうぞ。

斯かる御天子を戴いて居たればこそ、我國は強國とも、一等國ともなつた次第である。我々臣民は惜くまで、此の御徳に學び、皆な各々其分を守り、願じて各修賢潔の行を遂げ、夫れ／＼力を致して、新帝陛下を輔翼し奉るは、先帝陛下の御遺志であつて、又た御英靈を慰め奉る、最大の臣道たるを覺悟せねばならぬ事である。

天佑に就いて

先帝陛下は、寛仁大度海の如くに渡らせられたのである。神武天皇以来の御名君であらせられるのだ。

世間の奴等は、只だ何事かと云へば、天佑天佑と云ふて、天佑を見安く擔ぎ出すが天佑と云ふものは、左様矢多羅にあつてたまるものぢやない。又たひとりて出て來るものぢやない。イクラ天佑でも、天佑に照應するものがなくつてはならぬのだらうが、いくらお月様でも、水が清くなければ、お月様の影が奇麗に映るものぢやない。天佑もその通りだ。天佑があると云ふのは、つまりその天佑が先帝陛下の海に如くに、渡らせられた御徳にして始めて映るのぢや。天佑、天佑と云つて、天佑許り、さう結果ばかりに見てはならぬ。静なくとも、天佑にあらせられた、原因即ち先帝の御徳に就いて申しあげねばならぬのぢや。吾々臣民は此れを忘却してはならないのだ。

慨世談

乃木に犬死をさせたくない

乃木の死が、確かに國民全般に一大刺戟を與へ、國民的反省の動機をつくつたには相違ない。併し物事に熱し易くして冷め易いのが、我が日本國民の通弊ぢや。今でこそ、乃木の死につき、耶して世人が熱狂的に讚美し、且つ反省の模様も見えが、これは忽ちにして冷めるに違いない。左様なると乃木の死んだ當時は、世間の人氣に押されて、言ひたい事も言ひ得なかつたものが、ソコソコ例の屁理窟をつけ廻はして、色々の異説を持ち出す様になる。夫れがために、世人の信仰が禪めて來ぬとも限らぬ。夫れでは折角の死が、無意味になつて仕舞ふ譯ぢや。俺は何うか乃木に犬死をさせたくないと思ふてゐる。

輕薄千萬な識者

處が、一體に今の學者とか、政治家とか、教育家とか、乃至は探偵者とかいふものが、其だ輕薄千萬なもので、假令ば、乃木の自殺に就ても、論ず可き反對の意見があるなら、何く迄輿論に反抗しても、堂々と争ふて見るだけの勇氣があるなら頼もしいが、左様でないのぢや。所謂面従腹背で、腹には異論があつても、輿論の大勢非なりと見れば、當分黙つて居て、餘熱の冷めた時分になつて、ソロソロと反對を始める。又一方では、腹の中では左程に感心して居ないでも、世論に迎合するために、ヤンヤと持て囂したり、諷刺をちぎつたりする、實に心細い譯だよ。

乃木の葬儀と會葬者

夫れ計りぢやない、今の上流社會といふものが、其だ不真面目極まるもので、現に彼が乃木の葬式に往つた時、立派な粉、任、官の人が、娘を連れて會葬して来た。而かも其の娘の装を見ると、如何にも華美な打扮で、是れ見て夾れと、言はぬ計りの有様ぢや。這んな者が、何んな考へで乃木夫婦の葬儀に來合したかと、他は何とも不思議でならんのぢや。左様いふ類が、この會葬者の中に、幾千もあつたから、實に驚くぢやないか。

上流社會の腐敗

夫れから見ると、中以下の社會では、存外真面目なもので、往來に立つて葬儀を見て居たものの中には、許然と涙を流してあるものが少くなかつた。彼等は確かに心底から、乃木夫婦の死に感服して、それを涙を流すのぢや。上流社會の者とは、まるで趣きが異ふ。而かも之等の現象は、決して偶然の事ではないと思はれる。今の上流社會で、チャンと乃木の像を佛壇にでも祭つて、朝夕拜禮する様な敬虔な心

得のある家が果して洋山あるかどうか、多くの者は、祖先を崇敬し禮拜する事さへ忘れ、甚だしきに至つては、神佛を拜禮する事を、何だか一種の葺の如くに思ひ、宗教心の無いのを自慢にしてゐるものが多いのちや。左様した家庭に、何うして堅實な思想や、忠良の精神が養成せられようか。そこで上流社會の腐敗墮落は、日に益々甚だしきに至るのは、まことに止むを得ぬことであると云はればならぬのちや。

禍は上から

昔は禍は下からといつて、中流以下が言はず腐敗し墮落して居たが、今はそれと反對で、禍といふ禍は皆な上流から起るのちや。上流のものは早いはなしが衣食住でも、金のあるに任せて贅澤の仕放題ちや。それを中流以下のものが見まねをする、虚榮といへば虚榮だが、その源は皆な上流にある。上の爲す處下之れに倣ふで上流のものが、堅實な世の流り方をすれば、中以下のものは、之れに倣つて自然に堅實になる。金があるから贅澤が出来からといつて、何をしてもよいといふ譯のものでは決してない。上流社會は上流社會として、中流以下のものに對し、好模範を示すといふ處に、その存在の意義があるのちや。愆んな事は、皆なよく解つてゐる筈であるに、實行が出来ないとは、一體どうしたものか。

中以下はまだ健全

上流社會の腐敗墮落に比べて、中流以下の社會は、今の處では夫れほどまだ腐つて居ない。夫れ夫れがまだ幾分頼もしいと思ふのちや。是れは決して一片の想像ではない。他は何時も暇さへあれば、帽子も被らずにブラリブラリと、商店でも横町でも覗いて見るが、僅か九尺二間の棧棚長屋でも神棚と佛壇だけは必ず祭つてある。爾して彼等は終日勞働して歸ると、先づ神佛を拜む。然る後食膳に向ふといふ

有様で、是れは決して見舞のためでも、外聞のためでもなく、彼等が眞實の心から出て居る事で、従つて彼等の社會の方が、上流社會よりも、何事も誠意に満ちて居るのちや。

俺が常に感心するのは、同じ長屋内といつても、何時引越して行くか分らぬのに其の情誼の濃かな事や。何事かあると、直ぐ長屋中が寄り合つて、親身も及ばぬ程、親切に世話をする。お前達は、何うして左様するのかと尋ねると、お互様ですから」といつて、その翌日には、直ぐ引き越して行くかもしれないものでも、互に親切を盡し合ふのは、如何にも床しい事や。造んな事は、上流社會では、とても見られない事だ。マア汽車にしてもや。一二等の乗客となると、肩と肩と摺れ合ふ様にしてゐても、互に済まし込んで、確に言葉も交はさぬといふ有様やが、三等客の方は、却つて打ち解けて、互に氣を附け寄り合ふ處は、實に成服の外はないのである。

俺の地租増徴反對

夫れで俺は昔てから、上流社會は腐つても、斯く申す中以下が眞面目でさへあれば、國家の基礎は大丈夫であると信するので、或る可く其の根底を崩したくないといふ考へを持つてゐるのちや。夫れで數年前、地租増徴反對運動の時も、俺が之れに加つて、増徴に極力反對した。その趣意は、全く按にあるのちや。國民中、最多數を占めて居る農民が、只さへ重税に苦んで居る處へ、又々増徴をしたら立ち行くものぢやない。夫れで生活が困難になれば、自然墾荒に傾くは、勢の止むを得ぬ處である。何うか左様しなくないと思つて、いろ／＼心配したのである。處が丁度その反對運動のため、大阪へ行つた際、京都で山縣に逢ふたら、

「何故君は、若い者達に交つて、あんな騒ぎをするのか」といふから、俺は此處の趣意をくりかへし、何る様に山縣に徳く話した事も

今日の自治政治と以前の自治制度

然るに今や、地方の人心も段々惡くなつて來た。夫れには色々の原因もあらうが自治制度などいふ人為的のものを避へて、舊來行はれ居た、眞の自治制度を打ち毀はした坏も、儘かに其の一原因だと思ふ。昔は五人組といふ制度があつて、去止共に互に、相寄り相扶け、解うして一村一部落は、總て一家族の如き有様をなし、何事も庄屋名主を中心として、古老株が村内の世話を焼き、極めて圓満に親密に、一村落が治まつて往つたものである。此の時代には銘々の印形なども、一束ねにして名主の所へ預けて置いたもので、夫れは名主は決して惡い事をせぬものだといふ信用があつたからの事で、是れは現に藩政後迄も行はれて居た地方がある。然るに印形などは預く可きものでないといふので、戸長から銘々へ返すと、アノ戸長は不

親切な人だといふて、不信任問題が起つたといふ奇談もある。以前萬事が夫れだけ質村であつたのぢや。處が自治制度が行はれて以來、何事も村會へ持ち出して、多數決で決めるといふ様になつて、形式は至極結構だが、自治の精神は全く消滅して唯だ小才のある口利き者が、幅を利かして、村政を左右するといふ有様で、昔しの如く何事も熟議でやるといふ譯でないから、其の間に誠意といふものが少しもなくなつた。従つてヤレ村長の使ひ込みとか、村會議員の收賄とか、何とか彼とかいふ様な事が、到る處に起つて來るのである。之れで何うして、眞の自治が行はれるものか。

議員選舉の醜態

斯んな風で、從來の淳朴な氣風は次第になくなり、日一日と惡風向が熾んになつて來る。其處へ重税、又重税と來るから、地方農民が、益々惡化して行くのも止む

を得ぬ次第で、先年などの議員選挙の有様を見ると、憲政の前途は何うなるかと、實に嘆息の外はないのぢや。憲政の前途が危ぶまれる譯だから、國家の前途も何うなるか、憂慮に堪へぬ次第ぢや。下は村會から、郡會、縣會、上は衆議院といふ様に、大なり小なり民意を代表し、輿論を代表せる議員共が、度々の選挙毎に、殆んど全く神聖な事は出来ないうで、因縁情實はまだしも、最も善管に金銀を以て、當落を定むるといふに至つては、最早や何とも沙汰の限りぢや。これでは、上御一人の御思召に對しても、毫に畏れ多い次第ぢやといはねばならぬ。

主智教育と詰込主義の弊

一體に此の上下を通せる斯かる惡風潮は、どうしたら取り直す事が出来るか、部分的の救済策はいろいろあらうが、俺はその根本的なものは、教育の力によるの外はないと信じて居る。處が今日の教育状態を見るときことに、不都合千萬なものだ

單に形式の一方に偏し、智育に重きを置いて、徳育を疎外し、何でも彼でも、詰め込み主義で、無理に一定の類型に押し込めようとするから、到底完全な人物の出来る筈がない。智育に偏した詰込主義は、その結果として、單なる智識は或は豊富になるかもしれないが、徳性涵養の不充分と、意志鍛練の不足なため、まるで氣骨のないヒヨコ／＼した人間が出来る。そこで剛健篤實な氣風は失はれ、淺薄輕佻な風潮が生じ、徳義徳操の念が、次第に薄らいで来るのぢや。

教育中毒

殊に俺の不成服なのは、山の中の百姓の娘や、海邊の漁師の娘にまで、行燈袴を穿かせて學校へ通はす事ぢや。マア考へて見るがよい。一度海老茶の袴を穿いたものが、漁師の娘になつて、引綱の手傳をしたり、百姓の女房になつて、草履をする氣になるか何うか、何れも是れも、生意氣な事許り覺えて、仕末に行かぬ様な事に

なる。女子計りぢやない男子でも其の通り、何も字探をしたり、網走きをするのにあまり長く學校へ通ふ必要はないのぢや。ナトに少し位覚えてゐても、山へ行つたり沖へ出たりする間には、大方忘れて仕舞ふのぢや。だからこんな仲間には、讀み書き算盤の大體で澤山だよ。國民としての志探さへしつかりして居ればそれでよいのぢや。あまり教育教育と、雑多なお勵立てをするから、教育中毒に罹つた結果は男も女も兎角生意氣な奴ばかり出て来て、何うも始末に往かなくなるのみならず、高等教育の盛んなもの結構だが、あまり高等遊民が澤山出来ても仕方がないよ。

俺は今、此の點に就て深く考へ居る。何れ迄からや意見を發表して、大に國民的教育のために、努力したいと思つて、目下折角考究中ぢや。

乃木大將

屁理窟を許さず

どうも今頃の連中は、何ぞといふと、直捷屁理窟をつけ、あゝのかうのと、自分勝手な定規に當て、理窟攻めにせんとするから困るぢやないか。何も自分共の至らない拙くれた考へから、四方八方に理窟を附け廻はして、小刻みに辯んだ揚句、終には神聖にして犯す可からざる權威のあるものでも、一種變態なものにして下ふこれは固より、惡氣があつてする事でないのは、よく分つてゐるが、あまり勝手な理窟をつけるから、それが最賢の引き出しになるやうな事が仕々ある。乃木の殉死に對する長論の如きも、確かにその好例であつて、俺は此の場合、乃木の殉死に就ては、斷じて斯かる屁理窟を許さないものであると信じて居るのぢや。

何も言はぬが一番ぢや

乃木の死んだのは、乃木に何か死なねばならぬほどの不平があり、理窟でもあつたとすると、つまり乃木は、御大喪を利用したといふ事になる。處が乃木には、毛頭不平とか理窟とか、そんな考へのなかつたのは貴論の事で、今更彼是れ言ふ迄もない。又世間でもそんな心で、乃木の殉死を批判せうとするやうな、間違つた考を持つものは、一人もあるまいと思はれる。神聖にして權威を感ずる事は、其の儘にして置くがよい。何もあゝのかうの言はぬが一番ぢや。

遺言狀の第一

併し、強いて理由をいへば、あの發表された遺言狀の「第一」にして置くがよい。
遺言條々

第一、自分此度、御葬を遣ひ奉り、自殺候段、恐入候義、其罪は不輕存候、然る所、明治十年の役に於て、軍旗を失ひ、其後、死所を得た

心掛候も、其機を得ず、皇恩の厚きに沿し、今日迄、過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立ち候事も、餘日なく候折柄、此度の御大變、何とも恐入候次第、茲に覺悟相定め候事に候。

第二、兩典親死の後、先帝諸氏親友の諸賢より、毎々懇諭有之候へども

養子の弊害は、古來の議論有之、目前乃木大兄の如き例、他にも少からず、特に華族の御優遇を蒙り居り、實子ならば致方も無之候へ共、却て、汚名を遺す様の憂無之のため、天理に背きたることをば、致すまじき事に候、祖先墳墓の守護は、血縁の者有之限りは、其者共の氣を附け可申事に候、即ち、新政府は、其爲め區又は市に寄附し。然るべき方法願及候。

乃木大將

第三、賞財分配の義は、別紙の通り、相認め置き候、其他は、静子より相識仕るべく候。

第四、遺物分配の義は、自分軍職上の副官たりし藤氏へは、時計、メ

トル、眼鏡、馬具、刀劍等、軍人用品の内にて、見計らひの儀、堀田

大佐に御依頼申置候、大佐は、前後兩度の戦役にも、盡力不少、静子

承知の次第、御相談致さるべく候、其他は、皆々の裁断に任せ申候。

第五、御下四品(各殿下よりの分も)御杖付の諸品は、悉皆取纏め、學習院

へ寄附然るべく、此儀は、松井、猪谷兩氏へも、御依頼仕り置候。

第六、書籍類は、學習院へ採用相成る分は、成るべく寄附、其餘は、長府

圖書館へ同断、不用の分は、兎にも角にも候。

第七、父君、祖父、曾祖父の遺書類は、乃木家の歴史ともいふ可きものな

り、故に嚴に取纏め、眞に不用の分を除き、佐々木侯爵家、又は佐々木

神社へ、永久無限に、御預け申置候。

第八、遊就館への出品は、其儘寄附致し可申、乃木家の記念には、保存

此上なき良法に候。

第九、静子義、追々老境に入り、石林は不便の地、病氣等の節、心細し

の義、尤もに存候、右は、集作に譲り、中野の家に居住可然同意候、

中野の地所家屋は、静子其時の考へに任せ候。

第十、此方死骸の儀は、石黒男爵へ、御願置候間、然るべき醫學校へ、寄

附致す可く、墓下には、毛髮、爪、齒(義齒共)を入れて、充分に候、

(静子承知)

恩賜を須と書きたる金時計は、玉木正之に遺はせ候密なり、軍服以外

には、持つを禁じたく候。

右之外、細事は静子へ申付置候間、御相談被下度候、伯母乃木家は、

乃木大將

乃木大將

静子生存中は、名義有之べく候得共、吳々も断切の目的を遂げたく大切なり。

右遺言蘇の如く候也。

大正元年九月十二日夜

希 典(華押)

湯地定基殿

大館集作殿

玉木正之殿

静子 どの

(遺言状は編者挿入せり)

あの西南の役の時に、乃木が既に自殺せむとしたのは事實であつた。あゝいふ正直一途の心では、終始それを苦にして居たであらう。所が過ぐる旅順の戦で、更にその苦を、大にしたやうな考へを持つに至つたのも、事實らしいのぢや。

頂門の一針

乃木だつて人間であるから、不平もあつたらうし、また理窟もあつたであらうが、之れを他から彼是れも、推測したり風刺したりするにも當らぬのぢや。それよりも乃木殉死そのものに對しては、萬人等しく不言不語の間に、乃木の精神を感得してこれを實行するのが肝腎ぢや。そうなつてこそ今度の事も、邦家民生のため、どの位、藥になるかわからん。我國本來の健全な思想が、いまだ全然消滅して居らぬといふ事は、乃木の殉死によつて、證明せられたやうなものであるが、これと同時に乃木の殉死は、強かに六千萬同胞に對する、所謂頂門の一針ぢや。至上の勇脚について乃木の殉死、憶へば其の間に、言ふ可からざる神秘な、何物をか感得するであらう。

其の感化

併し乃木の殉死の一事を以て、我國家的正義の發露となし、直に我が日本の前途は、いまだ悲觀するに足らぬなどと考へるのは、大なる間違へちや。兎に角乃木は此の事がなくとも、平生から武士道の權化、軍人の模範であると、天下萬人に認められて居たから、乃木に取つては極めて當然の事といふ可く、此の一事を以ていままの様に、我國家的正義の發露であるといふ事は出来ないのである。乃木はあの通り的人格で、それに位階勲等も高く、萬民の等しく敬仰する位置にあつた人であつたから、今度の事が世道人心に及ぼせる感化は、實に非常なものであらうと思はれる之れと同時に今や乃木は、日本の乃木でなく、世界の乃木となつた譯だから、世人は其の影響の及ぶ所を熱慮し、つまらぬ理窟をつけて、世界の誤解を招く事などない様に、暮れ〜も注意せねばならぬのぢや。

俺と御所で別れ

乃木が殉死する前、俺は乃木と八月の五日に、丁度御所でお會つたから、二人でお庭の方の廣い操場に出て、煙草を喫みながら、長時間色々の話をした。其の内に話所へ出る時刻が来たから、俺は顔を洗ふ所に来て、水を取つたりなどしてゐると、何時の間にか、乃木も其處まで置いて来て、何やらまだ話でも足らぬやうな風をして、シラと立つて居たが、此方は何分にも急ぐものだから、つい其儘になつて別れてしまつたのは何だか名残が盡ぬらしかつた。

御養生なさいとの一言

御大葬の日にも、御所の廊下でお會つたが、何だか乃木が、疲れてでも居るのかの様に見えなから、

乃木大將

「オイ乃木、君は大變顔色がわるいせ」

といふと乃木が、

「少し気分がわるい、併し貴方も血色がよくない」

といふから、

「俺も此間から、気分がわるい」

といふと、乃木はその眞面目な顔を、なほ眞面目にして、

「充分養生なさるがよい」

といふて呉れた。俺はそれなりに別れたのちやが、遂にあゝいふ事になつて了つた
今から思ふと、何だか思ひ合される筈がないでもないのちや。

乃木の殉死は、一個莊嚴なる事實として、世の常の屍理窟を許さないのちや。そ
れよりも個人個人の考へに従つて、不言の間に乃木の精神を感得し、これを體現す
るやうに努力す可きである。決して乃木の死を無駄にするやうな事があつては、誠

に相濟まぬ譯ぢや。

乃木大將

居眠り和尚と袖引小僧

國民の無自覺

今日の處ぢや、大隈の問題は通り過ぎてしまつて、大隈は論外、大隈問題、乃木問題の火の手が盛んになつて来た様ぢや。何んぢやかんぢやとわひ／＼騒ひとるが火がつひて来てボンブの用意をして居る様ぢや駄目だから。大隈を獨り責めるのは間違つて居る。大隈に詠法螺を吹かせて、當てさせて居るのは……大隈の行動も責めたものぢやないが、それをやらせる國民が悪いのぢや。

今日の處、大隈の善音器で承知する國民ぢやないか。大隈はよく群衆心理の應用を知つて居る代物ぢや。何んぢやかんぢや謂つても大隈の方がまだ利巧な譯ぢや。憲法政治が何んぢやかんぢや、俺はモウ憲法政治を二十年も拜見して来た。其御手

際には、呆れ果て、居るのぢや。憲法政治が何んぢや、ちやちやらおかしひわひ。まだ、大隈の善音器に満足する國民にや、憲法政治は少し早や過ぎるよ。

居眠り和尚の話

だから國民自身に自覺するより外にみぢはな事になる。面白い話がある。宗教が一向振るはぬ、此れは坊主が憂ひばかりぢやない、世間の人々も憂ひのぢや。それで今日は徳僧が高座に登つて、大に説教して衆生の眼を醒させなければならぬのぢや。處が、自分はどうも居眠りする癖があつていかぬ。それでお前に頼んでおくが、高座で自分が居眠りしかまつたら、お前は後に廻はつて居て、其時には袖を引ひて起して呉れろ。斯様頼んでおひて、勿々高座に登つて説教を始めた、暫時やつて居る間に、段々眠くつて仕方がなくなる。そしてこつくりとやる、と眼が覺めるから驚ひて一段大聲に説教を始める。が、又段々眠くなつて、こつくりと始める。

眼が覚める、説教をする、説教を始める。こつくり居眠りが来る、それで説教は更に辻褃合はないで了つて仕舞ふ。

高僧先生、高座を降りて来て、袖を引つ張つて呉れる様に頼んでおいた和僧に向つて、お前はなせ自分が頼んだ通りに、袖を引つ張つて呉れなかつたかと云つて、叱ると、和僧先生曰く、私もつひ眠つて了りましたから、怠慢する事も出来ませんでしたと……。

日本の今日の現状がよく此の語に當て嵌まつて居る。當局者が高座で居眠りをすれば、後ろで國民が袖を引つ張らなければならぬのを、國民自身が既に後ろで眠つて居るから、はや仕方はない。まあ、憲法政治や、なんぢやかんぢやと云はふより、そんな小面當呉ひ事は抜きにして、此の和僧と和僧との對話をよく吟味して見るが宜ひ。此れが一番早途ぢやないかとこつちは考へる。理窟もなにもあつた話ぢやない。

幕がらがふ

大隈が辭職した後釜に、俺を政友會の連中が引つ張り出さうとしたと云ふ噂も坊間には有つた様ぢや、此れも無理もない話ぢやらう……だが、俺は自選投票をする連中とは違ふからの——。

政友會の者共に、馬鹿を云へ、俺の出る幕ぢやない、と云つてやつた。俺の仕事は別に任務がある。大隈もあなたが内務大臣になつて呉れると宜いがな——と云つた事がある、まだ年はとつても左様迄は老練はせぬぢや。

左様ぢやな、目賀田もなか／＼やつて居る。あれも、俺に出て呉れぬかと云つた一人ぢやつた。あれもなか／＼しつかりして居るけれど俺は出る男ぢやない。左様な人間と思つて居る先方が間違つて居るのぢや。國家を思はぬか、思ふなら是非此際出てやつて呉れるといつた連中もあつた。國家を思ふ點に於ては、國家を看板にす

早稲田のボンブは有害無益
のぢや。

早稲田のボンブは有害無益

そこで俺は、其年の八月十七日に、思ふ存分山縣に話してやつた。思樣も此次の調子がいかぬぢや。どうかせぬと、此の國家が未曾有の大困難にのつて居る今日、政府の連中は何をして居るか、逆も此際大隈に任せて置いては危なかつかしくつて危なかつかしくつて、はたからは見て居られぬ。はら／＼する様ぢや。恰も大隈には片足がなくつて、危なかつかしくつて仕方がない様に、あれのする事は又その通り實に危なかつかしくつて見て居られぬ。逆も大隈なぞに任かせて置く譯には行かぬ。全體大隈の役目はモウ済んで居る。ぢやから……大隈が此度出たのは、海軍問題の火の手を消し止めるには、早稲田のボンブに限ると思ふから俺も賛成して、種々と注告も

したのぢやつたが、モウ火事は消えて了つた。火事のない焼跡にはボンブは有つて有害無益ぢや、だから、大隈が、侯爵を欲しがらるのなら、心配してやつて、早くあれは引つ込ませなければいかぬ、火事場の勳章ぢや……

就いては、此の未曾有の大時期に、政黨の憲法屋連に任して、議論許りやらせて居てもいかぬ。逆ものことに、山縣に、此處は夫後の思ひ出で、最後の御奉公の爲めに、元老が昔な藥瓶を下げて、此の難病を救はにやならぬと云つたが、一向クンと云つて呉れぬ。元老には元老の考もあらう、強ひて云ふ處でもないから、後は一向押し黙つて了つた。俺の斯様した獻策は實行されなかつたが、中にも松方は正直な男だからぢや。御説通り一つやつて見ませうかと云ふたのぢや。そこで井上の雷も鳴つた様な譯ぢやつた。

それ切りモウ、俺は一切何にも言はぬ事にして、熱海に引つ込んで仕舞つたのぢや。處がどうぢやい、今日の有様と來ては、見る通り手も附けられないぢやないか、

居残り給向と強引小僧
 世の中には善い事許り有るものぢやない。少しは悪い事もあると同様に、少しは善い事もなければならぬのぢやが、此頃の有様はどうぢや。善い事は一つもない。惡い事許りで、他たちはもう大悪觀ぢや。

山縣も一言なし

此間山縣に逢つたから、どうぢや、他の云ふ通りに、一々適合して來るぢやないかと云ふてやつたが、事實が事實だから、山縣も一言なしさ。

彼の注告した時に、元老が總出で、一切の私情を抛つて、やり切つて仕舞つたら斯様な事もなかつたらうと思はれる。二十年來の、憲法政治の積弊が山の様にあらうとも、何の事があらう。先づ元老の總出で、あらゆる方面に向つて大改革を斷行して、是れならと云ふ處まで押し切つて仕舞つておいて、そしてそれを後進に譲れば、其時は國民も眼が覺めるぢやらう。憲法屋も餘り馬鹿な眞似も出來なくなる

ぢやらうと思つての建策であつたが、遂に實行されなかつたのぢや。原に此の事を話したら、至極尤もだと云ふて居た。犬養も最初はぐすん／＼言つとつたが、此れもつひに同意して居た様な譯で有つた。俺がこんな事を言ひ出す以上には、俺にも又多少の覺悟がないでもなかつた、必ずやつて見せう又、乾度やつて居たに相違ない。

日獨戰爭

日支交渉、日獨戰爭もまづい事をやつたものぢやあないか。あの時だつて、大隈に注告しても空念佛で、駄目、大隈の耳は實に、へんな耳である。大底人の耳は、先づ耳から進入るとすつと頭へ通つて、それから口へ流れて來るものぢやが、大隈の耳は別流へと見えて、耳に入つて來たものが、すつと頭へは通らないで、一直線に口の方へ出て仕舞ふ。是は御話にならぬ。加藤は又加藤で、英國患者であるから日本人の言葉が通せない。逆でも致し方がないから、俺は口の利けぬのを幸に、

單獨に通牒を遣はして行つて、獨逸公使と會合して、

「實は由來日本は武士道を守つて居る國である。故に此際彼の中の眞同様な青島を攻撃するのは實に心苦しひ次第で、此れは日本武士道の欲せない處である。昔、上杉謙信、武田信玄の兩雄が、一時に陣を迫めて、川中島での大激戦をした事がある。大將同志の一騎打と云ふ珍らしひ勝負をした謙信は、敵國の武田方が、鹽に苦しんで居ると云ふ事を聞いて、戦争の將に、膽であるにもかゝらず、敵を救ふ爲めに其膽を送つた」と云ふ美談がある。尙ほ其他に此れと同様な日本武士道の美談は尠なくない。其の武士道を守る國であるから、今日英國との同盟上已むなく、袋の中の青島をも攻撃せねばならぬ。此れは實に日本男兒の快事とせない處であるから、袋の中の青島を攻撃するのは誠に大人氣ない話である。故に此際は、武士道を以て立つ大日本帝國、青島の處分を一任して呉れぬか」と斯様云つて、そして武士らしき行動をとれば、華國に對しても都合も悪くはなし、獨逸からもそれ次に將來恨みを

買はないで済むのぢや、流石に日本は武士道の國であると云はれて、双方共に快ひ結果を見る事が出来るのであつた。然し若しも獨逸の頑迷、此の注告にぢやゝゝを入れるなら、其時にこそ、開戦するも決して遅ひ話ではない。斯様してこそ、始めて後暗ひ事のない、正當の陣も張られもし、又た一門の開戦もせないで、青島の處分方もつひた筈ぢや、俺は左様思つて、其の方法をとつて、事の結果を大隈に話してやらうかと思つたが、此れも遂に實行しなかつたやうな譯ぢやつた。モウ萬事が過ぎた事、老の發言を聴く若者もなからうが、事實左様な事もあつた。併しモウ致し方はない俺は何でも大慈觀で、此れから將來有爲の青年に出て貰つて、眞に國家の大改革をやる事を祈る様に思つて居る。

即事而真

佛敎の世に誤解せらるゝや久し矣。然れども火無ければ煙も亦無し。要するに説く處、専ら教理に偏して、世間の事に遠し。故に人をして事と理とを隔置せしむ。其の弊や歴世に隨し、空理に没す。一歩佛壇を離れ、一足伽藍を出れば、脚下の實際に眩惑して、倍々出世間の清渠を深からしむ。即事而真の妙體をして、殊更に佛法臭き一面にのみ偏行せしむるは、甚だ歎息に耐えず、頃者白居易の詩集を讀んで、偶々感服せり。ナメガ哲人の言は迂遠ならず、當面の事實を、事實の處に解釋して殊更に佛とも法とも、乃至因果とも説かず、表面全く佛法臭き口調を離れて、然も言々句句の裏、妙法自ら存す。天下の佛法者のために、白居易の詩を記載す、以て寶とせらるゝ處あらば幸甚。

燕詩 示劉叟

世序

又有愛子、背叟逃去。叟甚悲念之。叟少年時、嘗如是。作燕詩以諭之。

梁上有雙燕。翩翩與雌雄。嗚泥兩椽間。一巢生四兒。々々日夜長。索食聲
 咿々。青蟲不易捕。黃口無飽期。荷介雖欲繁。心力不知疲。須臾十往
 來。獨恐巢中飢。辛勤三十日。母瘦雛漸肥。喃喃教言語。一々刷毛衣。一旦
 羽翼成。引上庭樹枝。舉翅不回顧。隨風四散飛。雄雌空中鳴。聲盡呼不
 歸。却入空巢裏。嗚啾終夜悲。燕々爾勿悲。爾當返自思。思爾爲雛日。高
 飛背母時。當時父母念。今日爾應知。

極めて尋常の事に即して、却つて風化に關し、以て大に世を警むるに足る。庶く
 ば心を空うして嘖嘖し、以て其の真味に接せられんことを。

三 三重の教綱

諸佛能生の本元

諸惡莫作、衆善奉行とは、御り過去七佛の通誠のみぢやない。これは現在未來諸佛能生の本元ぢや。故に滯凡人天乃至鬼畜も、此の實行の分量如何によつて、其の影響の現する處である。主として人間社會は、最もこの目的標準に基因して、人たるの面目を發揮するのぢや。故に社會は恒に此の目的のために、三重の教綱を張つて成立しある。然らば三重とは何か。

教育の大本

その第一は、各個人之力、即ち人々個々に就て、人の人たる道を教ゆるは教育の

大本である。この大本の基礎は、即ち如上の通誠であつて、此の通誠は決して佛敎者の一點張り專賣特許ではないのぢや。凡そ人類のあらん限り、佛敎たり、耶蘇敎たり、回々敎たり、乃至一切の敎として敎のあらん限り、是を以て基因とせざるはない。併し是れは單にその根本に就てのみいふ譯で、其の枝葉末節の方法に至ると空巖千里の差を生じ、氷炭その姿を異にするのぢや。各々敎法の差別は別論として、今日單にその根本に就いていふばかりである。抑て人道の大本は、是の如く殆んど自然的に定まつて居つて、此の大本から流れて政事となり、百般の學術となり、乃至農商たり、器械工藝たり、萬能千様、種々の華實を結ぶ譯であるのぢや。

政治の力用

第二に政事の力用とは、諸惡莫作、衆善奉行の實行獎勵の關門であつて、此の標準底裏に國利民福を増進せしむる責任である。故に治者被治者、同一の標準に向つ

て進行するを、最上の國家、文明の社會と名くべし。そこで此の實行に就ては種々の法律となつて現はれ、公人は公人の服務規律あり、私人はまた一般の法律に隨順するのちや。凡そ善を嗜まし惡を懲し、賞勳、位階、懲罰、禁誡、一々皆なこの目的を達する方法手段たらざるはない。

社會の制裁力

第三に社會の制裁力とは、天網は恢々疎にして漏さすちや。人網は漫々粗にして漏漚する。故に第一に各人の教育力を、一重の網とし、第二に政治力を以て二重の網とし、是をも尙ほ漏漚する憂がある。依つて此上は、最早や漏さぬと、善きにも惡しきにも、社會の制裁力が、第三重の最極に控へて、常に油断せず監督してゐるのちや。又時々當路者に注意を興へて、社會としてその過失に陥らしめない様にと、忠犬が家を守る如く、又閻魔殿前の淨玻璃鏡の如く、此の目的の爲には常に眼を瞬

つて、社會は番をせねはならぬ。ナク斯様にして人間社會は、安寧に幸福に、人の人たる本分を達し得るのちや。

網の目を張れ

然るに人世意の如くならざるは、十に八九で、兎角三重の網の目が、一ツ破れ、マア好いツイとツイ等閑にし、二ツ三ツと段々に破れ、終には網のみあつて、其の目がない様になるのちや。一目の網は魚を獲すで、何の役にも立たぬのみならず、網の破れは社會の破れで、遂には人網ともに破壞する。抑々この網の破れの第一のキザシは、貪慾といふ蟲が付くのちや。何でも物を貪り、欲がり、我受我欲の毒のために、人も我も俱に困苦の淵に沈溺する。それから賊志といふ火が燃へ、それから愚痴といふ盲目か、破れ目を組合すことも知らず、火が燃へるのを消すことも辨へず、斯く如く貪慾痴の三毒が、社會人心を常恒にクケネラヒ、一時の利那も油断

せぬ、故に人間は、この三重は愚か、五重にも百重にも種々に防禦の術を施さなければ、遂に大變に立至るのちや。

星亨と伊庭想太郎

先年の事、星亨氏が、何の怨恨もない伊庭想太郎といふ人に殺された。當時よるとさざると、何處でも彼處でも此の話の持切りで、其人の毀譽褒貶を、益々明らかに喋々とする。洵に大人らしくもない事ぢや。この事の是非はナラ指さず。兎に角二人共に異常の人たるに相違はない。豪傑か英雄か、それはどうでもよい。生を捨て、此の事をなし、生を喪ふてこの事をなした。善惡元來、力は一つじや。心性に自性なければ、是ぞと定まり固まつた物は見ぬ。心中に何も障者の藥籠氣筒のやうに、分々別々に仕込まれてあるのぢやないさ。

諸惡莫作、衆善奉行

生死即涅槃、煩惱即菩提ぢや。引張棒ではどうでもなる。縁に惡に強ければ善にも強しと。これが無自性の常體ぢやが、凡夫はオオそれと早合點は大我我のものとぢや。それ故縁に隨ふが捷徑である。縦合窮屈でも、規矩準繩に入り、人道のレールを踏みはづさぬ様にせぬと、つい顛覆死滅に至る。洵に氣の毒の至りぢや。佛星をして、力を一方に偏して用ひさせ、伊庭をして力を一方に偏して用ひさせたのは、社會のため如何にも殘念な事で、惜しむ可き限りぢや。なきなれば、前にもいふた重々の網の目が、たしかに。なれば、星一人に氣の毒も見せず、伊庭一人に氣の毒も見せず、つまり謂へば社會の網の目が破壊して居るため、此の少數の人々に氣の毒を見せたといふ様なものぢや。そこで三重の網の防禦線が、充分維持されてゐるや否やの分厘に随つて、此の社會に、直に其の影法師が寫るのちや。分厘

次第では、一人二人の非命位では済むまい。然らば如何にすればよいかといふに、それは矢張り、諸惡莫作、衆善奉行で人々の罪を固め、教育を振興し、政治の關門を守り、制裁力の店開きをするちや、まあ此位でをこう、餘りいふと抹香臭いと叱られるかも知れんつて。

百 雜 碎

鳥巢禪師と白樂天

世間の事は、明白簡單、讀んで字の解り切つて居るものゝ中に、最も實行の困難なものがある。口に忠孝を説くは易く、躬に之れを行ふ事は困難ちや。昔者、白樂天少にして議論を好み、實行に疎であつたが、或時、時の大徳鳥巢禪師に見えた時、禪師は樂天を觀て、童子海の可しとなし、「諸惡莫作、衆善奉行」と諭された。樂天これを聞いて嘆ひ、「夫れは三尺の小童も、能く知り居る處ならずや」と道りかへした。處が禪師は言下に「然り、八十の老翁も、能く行ふ能はず」と答へられた。すると流石に白樂天ちや、鳥巢禪師のこの一喝に、豁然として悟り、解來銳意勵精、遂に天下に大名を成すに至つたとの事ちや。如此、口に言ふ事は極めて容易ちやが

行に行ふ事は至難中の難事ぢや。唯、このヤクザ者、口耳三寸學を磨して、諸事本行の眞諦に就けぢや。

ブルな

世に、共同一致の働きをせんと思へば、何よりも先づ、俗に所謂「ブル」といふ事から止めてかかれ。ブルは達達の病で、これがあつては大を爲さぬ。例へば、政黨組織の上に於ても、多數の黨員を得やうとしたとて、黨の領袖が變にアツては逆も多數の人心を收攬することは、決して決して出来るものぢやない。蓋しブルといふ事は、小は一身の徳を害し、大は政黨の結合を破り、結局支離滅裂の外、何等益することろはないのぢや。見ろ、眞諦はいくら研いでも金にはならぬ、人はいくらアツても、本来の價打は極つてゐるのぢや。そこで同じことなら、洒々落々、毫もアツたり極つたりせぬがよい。凡そブル奴の癖として、平生はナンザ威張り散ら

すが、此處だといふ難局に當ると、早速尾を巻いて逃げを張る。斯ふいふ奴には、到底共に大事をやる事は出来ぬのぢや。ブル間があつたら上皮を剥げ、人間はラツキヨと違つて、剥げば剥くほど大きくなる。爾が大きくなるといふ事は、多數者を包容して、共同の大仕事に成功する所以ぢや、解せりや。

禪那の眞相

得度居士や、使禪居士等は、近頃めつきり者沙汰がない。これが本當の禪那の眞相だらう。——唯、この鯨呑漢、——風無きに波を起せり、早く己に寶珠に眼を生じたぞ。

業力相應の果報

燕はイッ左官學校へ入學したか、蟻の兒はイッ游泳學校に調をうけたか、見た事

もなし、聞いた事もない。是は業力相違の果報ぢや。泥といひ水といふ縁に、業力果報の智徳が現はるゝぢや。人間は財を費し、勞勞して殊更に教育する。小兒の臨味増も養えかへる程困しい。これも木芥其足する人間相應の智徳を、教育といふ外縁で以て、誘發すればそれでよいが、態々財を費し、臨味増を費して、人間本分の事はソツチのけで、鸚鵡的な眞似言を習つて、その得る處は、失ふ處を償はない、鸚鵡のマネ言は、重てもその本物には及ばない。其の間に、己れが本分特有の言はさつぱり忘失するも可笑い。

正法外護の眞面目

治生産業正法と違背せずぢや。大工が木を削り、左官が壁を塗り、軍人が劍を揮ひ、商人が算盤をはたく。各自各別その裏に、正法の光を求め得べきぢや。これは佛法、これは世法と分々別々に解釋を窮屈にしては、正法が佛法臭くてたまらぬ。眞面目は外に淡白な皮があつて、眞に甘い餌をつゝんで居るから、風味も奥味しいのぢや。頭からアンコロをなすりつけては、大抵の人は見た許りでウンザリするぢや。數百年來、よくも氣水に誤解して來た正法の眞理を、今世人に教示せんとするには、全くこの呼吸が大事ぢや。それを一も二もなく、眞向に佛法／＼と説き立てたら、矢張り強きはすヤラヒの人を拵へるに過ぎないのぢや。正法外護の眞面目も、まあこの邊であらうと思ふよ。

先導者

先導とは讀んで字の如く、先だつて導くの義ぢや。人の危ない道にさしかゝるのを見ては、先だつて危ない處を指示し、その危ない所以を訴へ、明つて他の坦々の大道を教示し、若くは其危險の場處を根本的に修理し、踏み固めて、一切ありとあらゆる行人の安全を期すること、苟くも先導者たるべきものゝ任務ぢや、徒らにそ

百 難 神
 の類相隔落を見て、後から兇角の辭を弄する様な奴は、言巧みなりと雖も、文妙なりと雖も、要するに一の報事者たるに過ぎないのぢや。報事は誰にでも出来る、先導……真正の先導者の今の世の中は、腐弊一パイの闇黒道を、貪利痴の三毒が、總身に沁みわたつて、足元しどろの當世人が、アチラコチラと闇の裡を彷徨ひ歩くのは、何とも危険でたまらぬのぢや。早くこの四恩十善の光明を認めて、安全の行路を辿れるやうにしてやりたいものぢや。

佛教の死活

その衰頹を挽回すべきは今

實に今日、佛教が衰頹して居るといふ事は、現前の事實ぢや。佛教衰頹の由来を言へばあまりに長くて漚りはないが、早い處で、我が明治御一新の初めから、今日に至るまでに、佛教の及ぼした効績に就ては、是れぞといつて賛す可きものは恰んどない。明治の佛教史は、實に無價値な記録に過ぎないのぢや。併し以前から今日迄、佛教を信じて居るものは、相變らず信じて居る人もあらうが、日々佛教が衰頹に赴いて居ることは、眼に見えて居る。凡そ人間にして、病に犯されて死ぬる場合は何とも嫌ないが、併し是れとて、その病む時に當つて、療治に力を入れ、藥を與へ、看護の道を盡したなれば、如何なる病人でも、随分快復も出来るものぢや。

これにはその時機といふものが何より大切である。見るべき時に當つて診察せず、薬を投すべき時に當つて投じなければ、談にも講ゆる手遅れといふもので、全快の出来る病人でも、遂に全快せずして死んで什鮮な事になる。今佛教も其の通り、今日は有難の道を盡し、薬を投じなければならぬ時節になつて居る。此儘に打ち捨て置いては、後日に至つて取返へしのつかぬ時が到来するのは、もう今から分つて居る。それで今日の現状に對して考へて見ると、成る程一面に於ては、甚だ悲むべき哀類の有様であるが、又一面から考へて見ると、今日を措いて、この哀類せる佛教を活す時は外にない。今日この病を助けたならば、無病健全なる金剛不壞の身體になると思ふのぢや。今日はその好時節に迫つて居る。

佛教衰退の歴史

何故なれば、今日到る處、佛教は甚だしく衰頹して、我が日本を除いては、世界

に完全な佛教はないと思ふ。彼の釋迦牟尼世尊の御誕生の地といはる、印度、それから續いて傳播した所の、支那や朝鮮に就て考へて見ても、實に佛教は衰頹し切つて最早や最初の形骸もない位墮落し變形してゐる。處が我が日本の佛教は、等しく衰頹に傾いたとはいふものの、先づこの日本には、完全な佛教が踏み止まつてゐる殊に日本佛教の隆盛であつたことは、千三百年以前の昔に、溯つて考へて見ても、上流社會が原と爲つて、最も佛を信仰し、それから一般に及んで居る。それが素平が續いた時代などは、僧侶が御所車に乗つて歩くといふ様な、盛んな時世もあつた。またさういふ制度も行はれたこともあつたが、それが段々と衰へて來た。これはつまり僧侶の身分がなくなつたせいでもあらうが、それと同時に在家の方でも、色々

衰運挽回には共同一致を要す

先利から聞いて居ると、前辯士がお寺の攻撃をされた。すると諸君が拍手して喝采する。此處にかうして集つてゐる佛教徒が、お寺の攻撃を聞いて喝采するといふ事は、實に悲しむ可き事ではあるまいか。自分はこの有様を見て、斯くては末が案じられると考へて居るのぢや。お寺の攻撃や佛教の衰頽に、誰が涙を流すものがあるか、お寺攻撃の話聞いて、親の仇でも取つた様に、喜ぶといふのは、何たる無慈悲な事であらう。また斯様な事をいふものもいふものである。斯ういふ攻撃談を慎まないといふ事は、甚だ遺憾千萬な次第ぢや。只でも衰頽した僧侶、それを内輪から強いて公衆の前に向つて、いろ／＼の事を打たり攻撃したりするといふ事は、これは大變な誤りぢや、まことに戒しむ可き事である。内輪の事は裏面から注意するがよい。全體斯く僧侶を攻撃する人は、何れ程の人であらうか、先づ僧侶が悪いとすれば、裏からよく／＼注告して、外護の任に當るのが本分であらう。誰が今日教界の裏面から、大徳の僧侶を養ふことに努めて居るか、畢竟するところ、寺や僧

侶を、まるで怨家かなどの如くに思ふて居る。中には少しは心配する在家もあらう併しこんな事では、折角我が日本に踏み止まつて居る佛教を、兎てもその衰頽から挽回する事は出来ぬのぢや。そこで今日は、お互にこの衰頽挽回のために、努力し盡力しなければならぬ時節である。これをこの儘に打ち捨てて置く譯には行かない今日成せば必ず成る。何とか挽回の方法は立つ時ぢや。

基督教の惨逆

殊に今日、佛教以外の他宗の布教状態を見ると、實に慷慨に堪へないのぢや。彼等は神の使とか何とかいつて、甘く表面を飾るが、その行為は全體何を爲すのであるか、人の厭がる宗旨を、手を代へ品を代へて無理往生に押しつけ、時には人民の厭苦に堪へない干戈を取つて、無残な目に會はせるではないか。宗教によつて社會が破壊さるゝ有様は、一葉帶水の支那を見れば直ぐわかる。之れを名けて宣教師と

か教師とかいふてゐる。若し神の使なるものが左様なものであるなれば、此の神は惡神である、邪神である、嫉妬の神である。既にその證據が現はれてゐるではないか。彼等は口には文明を唱へ、人道を説いて居る。而かも彼等の爲すところは、斯此慘絶である。彼等は恰かも堯舜の名を假りて、晝路の事を行ふものぢや、これでどうして世界の人類をして、無事安寧を保つことが出来るかどうか。

頭燃の急を救へ

今日は實に優勝劣敗といふ様な言葉假り奉りて、弱いもの爲めに全力を盡すといふ有様である。如此き悲惨なる有様を、佛敎徒として重視して居らるゝか。佛敎は實に慈悲を先として立つものであるから、只一向に念佛や坐禪ばかりして居つて、他の同胞の憐れむべき状態を知らぬ顔で過ぐすといふのは、それは外道の最も外道であるのぢや。實に今日は前からもいふ通り大切な時機である。佛敎が衰頹したとは

いふものゝ、今日回復の出来ない事はない。充分回復す可き分子が裏面に含まれて居る。若し此の儘に打捨て、置けば、後日に至つて辨を唱むとも及ばない。今日は實に危急存亡の時機であつて、焦眉の急に迫まられて居る。焦眉の急といふことは文字にも見て居り、耳にも聞き慣れて居るが、實地の觀念はまるで行き届かない、誠に遺憾千萬ぢや。罪を焼いて茫然して居る馬鹿ものが何處にあるか、佛敎にはこれを指して、頭燃を救ふ可しとある。頭の上に火が着いては、その儘に打ちやつてはおけないのぢや。身命に關する事である。今日は實に眉を焦し、頭に火のついたと同一の時代である。それを悟として捨て置く様では、將來の信仰も何處へ行くやら辨が分らぬ。我々佛敎徒は、この佛敎の死活問題に就て、大に奮發せねばならぬそれが大乘佛敎に對する吾人の本分であるのぢや。

雲照律師と觀樹將軍

編者曰く

三浦將軍と、故雲照律師との因縁深かりし事は、佛敎界の美談として何人も知れる所なり。即ち將軍は律師に由て心華を開發し、律師は將軍の外護に由つて、大に傳道興法の便宜を得られたるなり。然るに將軍は、往年朝鮮の事件の爲め、人も知れる如く、廣島の獄に投せらるゝや、律師は遂に、金剛經一部並に聖圖書を送られ、三世不可得にして、鏡像水月、無體即空、色即是空の觀、肝要たるべき旨を示されたるが、斯く遠境に處して彌々法味を味ひ心地透明せる將軍は、律師への反信として、左の書簡を贈られたり。

贈釋雲照律師書

其一

去る十六日御榮筆の高誠、銘肝、先以大和上前、御少極爲法欣舞無窮奉賀候、弟子、依舊健全、況や道縁に順し候て、日々注性無業の眞諦も、少しづつ臆膽に徹し候。且赴任前より、往々今日に到るまでの、不思議の示現も有之候得共、身平常に住しては、逆も感せられざるの處、此遠境に入り候故、生來の罪相も、逐一明了に現前す、然れば宿業も亦畢じて知る可し、砂石集の三の卷、摩訶法師の説法の所に、隱岐の御所より梵字を書られ、明遣條を高野の御室に頼まれ候處の條に到り、世亂れ遠國へ御移されさせ給へる事、一旦の御歎きに似たれども其を善知識として、宿業の過をもはらし懺悔し、當來の善思を思召し、來世を恐れさせ給ふ云々、又千手觀音の持者七體に遇ふと云ふこと有り云々、後白河法皇の事など書き記しあり、少し憶ひ當ることあり、丁度目下項戴する千手觀音は、出發前より護持せり、最清の自作なり、之を憶ひ彼を思ひ、不肖此度の因縁は、恰も無始の無明を斷くの初歩と相成り、往生佛國の素懐も、眞實に法界の衆生と

共に、發心趣向致され可申か、其苦も忘れ罷在候仕合故、伏て願御放懐、向時下向寒偏に御自重、爲人天千轉高所す、末に阿闍梨以下大衆一同、並に信者方へも、宣敷御致聲奉、煩候。

明治廿八年十一月廿五日

弟子 觀樹 頓首和向

目白僧團戒師大和尚法前

其二

一昨廿五日、一書を左右に呈し、重疊の慈訓を謝し、併して目下の心地を呈露仕度之處、未だ充分に意を盡さず、依て再應陳述仕候、伏して願くば、慈悲垂教せられよ。

抑も十月廿六日、宇品着港直に拘引、俄然圍圍の人となり、茫然夢の如く、逐日内外の苦惱逼迫し、晝夜眠る能はず、困苦漸く最頂に達し、稍調伏の端を見出

し、段々修正觀念の夾に到り、忽ち覺ふ、畢竟此の苦は何より來り、何れを本になすやの疑、起り、推究するに、遂に身上我見と云ふの外はし、さて身我の見は考ふるに是れ亦無明より胚胎す、無明は如何と底を敲き考ふれば、無明即ち明にして、自體即、清淨、無自性の法身より示現す、是れ平等にして、而かも是の法身又不可得にして自性なし、而れば無念無想にして、一切分別を離るゝを、諸佛菩薩といひ、分別熱心するときは凡夫となる可し、然れば今吾が惱苦は、畢竟分別熱心の虚妄を實として起せり、又是の苦は、現在是の身と是の賦とに依て現すとせんに、身は是れ四大の假成、賦も亦四大の假成なれば、二にして而も一、一にして而も二なり、平等にして彼此隔異なし、嗚呼、色即是空空即是色なる哉、相を執すれば輪廻の業となり、妄を離るれば妙果に到る、況や今此の苦懼、何ぞ貪着する事を須ん、老病死病部に迅速なり、願くば今日以往、盡未來際、堅く十善戒を守り、歸依三寶し、無縁の慈悲を行じ、法界の衆生と俱に、安養に往生せ

密教律師と觀樹居士

んことを。

對那生滅の心を、

しばしだに、

とどまりかぬる水の面に

月はながれぬ、

ものと思ひき、

此書着の上は、重て御慈訓の程奉願候、猶ほこの狀は實に御現載被成下
度候、弟子此度違縁の苦惱に依て、此の無上の法樂を得たることは、愉快樂ふ
るに物なし、仍て此の法樂を以て、若は苦境に沈み、若は樂境に耽り、法門の眞
樂を知らざる所の一切衆生に法施致し、益々正法興隆の助業にも致度奉存候、
書外時分辨猶人天の爲め折角御自愛被成下度奉願候。

十一月廿七日

廣島縣廣島監獄署中にて

弟子 三浦觀樹頓首和南

日白僧圓戒師大和尚大法前

將軍よりの書簡に接し、律師は左の通り更に返信せられたり。

贈觀樹居士書

去月廿五日並に、同廿七日の玉振到着、益御健康の條、觀苦仕候、兩度
の心地御陳述の趣、何れも感佩致候、御意見の外、申分無之候得共、更に御
請求に應じ、左に申述候、蓋し三心不可得にして、色空無異なりと雖も、此中
更に逃情表徳の二觀あり、若し逃情の時は、能成所成の四大俱に不可得空なるの
みならず、無明即法性なれば、法性も亦空なり、生死涅槃即空なれば、此中何ぞ
苦樂思歸の別あらん、密觀に依らば、心下に一の文字あり、大灰燼を放て、無明
煩惱所成の依身及び、苦界苦器乃至法界の一切、淨不淨の法を燒盡して、唯一圓
明の法性空あるのみ。

密教律師と觀樹居士

若し表徳の觀に依らば、心佛衆生の三法無二平等なるのみならず、依報の器世界も亦復法性空の圓明の中に即現して、同一圓融無二平等なること、譬へば、猶ほ彼の帝釋の羅網の明徹し、彼此相映して、互に涉入形現するが故に、一珠の處に一箇の朱點を下すとき、直に諸珠の中に影現し、又諸珠の中點に還て一珠の處に反射し來て、無量の朱點となる。又此の一珠の處の無量珠點、亦諸珠の中に影現して、無量盡々なるが如く、地獄と天堂と人畜等の十界、彼是相入して、發顯即顯光なれば、誰か淨穢を隔て、誰か苦樂を執せん。是を輪圓具足の曼荼羅行と云ふ。此中何ぞ、小毫と圓圓と、圓者と幽因とを隔てん。故に十住心論に曰く、地獄天道佛性開提煩惱菩提空有偏圓二乘一乘偏邪中正皆是自心佛之名字焉捨焉取と、南昌坊の法語に云く、自心即佛の觀成する時は、自身の前後左右に五智五佛現前し給ひて、草毫の極微に至るまで、併しながら法界宮殿の材才なり。諸衆又は賤く、需菩薩等は貴しと思ふ。併しながら偏執の甚しきなり云々。凡そ一輪の

飯、一杯の茶に至るまで、必ず本尊諸尊、及び法界の衆衆に奉獻し、座前の一華を見るにつけ、窓間の明月を見るにつけても、皆な華菩薩燈菩薩等と、入我々入一體の觀に住して、至尊と父母と法界の衆生と共に、同じく法界の諸尊に手持供養すとの觀念を凝し給はば、是れぞ即ち、地獄天堂不二曼荼羅界會の修行にして眞正に君恩を報答し、如實に十善護持の君子なりと謂ふべし。昔し三蔵の比丘あり、戒を破して地獄に入る、熱鐵湯の中に入らんとするとき、忽然として浴室に入るの觀をなし、偶を唱へて曰く、

沐浴身體

當願衆生

内外光潔

身心無垢

此の受應の功徳に依て、頗に惡趣を脱して善處に生ずることを得たりと。又立提悉夫人の獄中に在て、日々舍利佛尊者に従ふて、八尊戒を受け、後世尊の影現を得て、十方淨土を成見し給へる事等、思ひ合するに、いと貴き事ならずや。右不取取脚回答流、如此に御座候、當願阿闍梨以下、諸衆、佛天の擁護と、檀越

聖賢傳と前編序

の淨信に依て、四大平和日々解行雙修實踐國、慈願退散の御願能、在候條、御
 放念被成下度候。謹空

明治二十八年十二月三日

觀樹居士殿 願無病長壽

夢菊雲照合掌

名稱の偏用

心法と教育

一切諸法は心をもととするのちや。これには萬法唯心とか、心外無別法とか、已法の
 變作なぞと、種々聲明の方法はあるけれども、つまり心の大切な事を知らしめん
 がためちや。處が世上を見渡すと、この心法の修養に意を注ぐものがなく、而かも
 之れよりして、日々にその害毒を齎らし来るをも念とせず、無開形の上に因はれ、
 形の上に勞するものが多いやうちや。その教育といへば、直に宗教とは別物である
 かの様に誤り認め、更に宗教の教育的價値を顧みるものがない。近頃が大分氣がつ
 いた様だが、まだ私目ちや。心法の修養を本とし、道德の基本たる宗教をすてなが
 ら、ヤレ人心は腐敗せり、道德は墮落せりと、そこからこゝからも、矢然に愚痴

曼荼羅を滿すとは、何たるたわけた事ぢや。それで以て能くも教説は方便ぢやの、因果は處安ぢやのといふことがいはれうぞ。これ畢竟教育上に於て、心法修養の設備が缺けて居る儘かな遊樂ぢや。さて弊様に因果の顯然たるにも關せず、なほ心法の修養を怠り、たゞ有形上の一端の發達にのみ、財を竭くし力を盡すのみぢやが斯くてはその得るところ、その失ふところを償はない。譬へば、首のない骸骨が踊つて居るやうなもので、世を擧つて片輪の製造所に終らしむるのぢや。

宗教教育の必要

佛法は心法ぢや。この心法は一切教育の根、一切事業の根本ぢや。單に極樂參りのみを教ふるものだと誤解しては困る。先づ極樂よりも近く人間とならねばならぬ。人間の道を行ふことの出来ぬものが、極樂往生とはあまり勝手過ぎる談ぢや。箇様にいふと或は難問が來るかも知れぬ。かの法華經の龍女成佛の事やら、淨土の惡人

往生の事やら、又は眞言の即身成佛の事等、數々の道理を立て並べるかも知れぬが是等は如何にも頓悟のやうであるけれども、ある一派の思ふ様に、そんな手拍子のやうなものぢやないのぢや。一心に十界を具するとあれば、十界いづれの衆生にも佛界は滅せぬ次第ぢや。まして我々人間の上、佛の順はれぬといふ理はない、洵に大切な心法ぢや。この心法をありのままに發現すれば、大覺の如來ぢや。これを粗末にし無用にするから、人心は腐敗し、道德は地に落つるのぢや。更に墮落すれば誰として之れを覺へ悲しむものすらなき、地獄、餓鬼、畜生等の淺ましい境界は、必然の結果として現はれて來るのぢや。だから人間を教育するには、人間の最も大切な心法の教育に注意し、これを基礎として、諸科の藝能を注入すべきぢや。斯くする時は、是れぞ虎に題、龍に雲を得しが如く、立派な人間に育て上げることが出来るのである。

心 育 衛 心

(272)

教育教育といひつゝ、心法の修養を除外にすることは、如何にも惜しむ可き限りぢや。智育の徳育の體育のと、ナンザ八釜敷いひながら、なせに心育には氣がつかぬであらふ。體育は別として、その徳なるものは、何の母體より出で、その智なるものは何を根本として發達するぞ。心法を除外して完全な智徳を求むるは、丁度種を下さずして、收穫を求むる様なものではあるまいか。又この頃は、切りに衛生々々といふことを耳にするが、何故衛心の聲を聞かぬであらうか。全體心法は、諸病の源なることが知れぬと見へる。肉體に如何に滋養を施すも、心法の衛生を缺く時は、神經病とか癲癩病とか、つひに名醫の七にもあわぬものが、續々出来てくるであらふ。不衛生として、滋養分をくわぬとも限るまい。すべて心法の衛生さへ確にしているならば、よし肉體は病患に罹ることがあつても、その快復は、驚くほど速か

論 論 論

(273)

であるといふことは、既に諸大家の證明する處である。然るにも係らず、心法の修養をば、衛生の地帯とはせず、むやみに鼠をかり、犬をころし、おまけに大屋を灰にして、なほその効を奏しないのみならず、人心畏怖のあまり、更に他の種々の病を誘發するものが尠くないのぢや。毎期流行病の甚だしい際には、かゝる現象を多く見るといふ事は、常に醫者から聞くところである。斯様に詮じて見ると、何れも名稱の備用から来る間違ひであつて、本來分つべからざるものを、強ひて割つから、萬事は實に過せず、利は害を償はず、遂に悲しむべき多くの事を産み出すものぢや。一から十まで敬て佛法とはいはぬ。たゞ現在の教育の上に、衛生の上に、今一重の心法修養なる教科を加へたき事である。左なくしては、明治三千年來の國家の鴻基も、如何にやと實に心算せらるゝぢや。

各宗諸大徳の反省を請ふ

緒論

凡そ洋の東西を問はず、其國にありて其國憲を紛更紊亂するは、即ち是れ國賊なり。佛敎僧侶にして、佛制嚴律を犯すは、即ち是れ法賊にあらざるべけんや。國憲を紛更する者は國法の律する處、法賊何ぞ佛制に依て處罰せざるべけんや。國憲を紛更する者に對して、國法を施すこと能はざるは、其國なきなり。佛制を破る者に對して、佛制を以て律すること能はざれば、佛敎なきにあらざるや。今や佛敎は佛制ありと雖も、之を行ふ人跡に絶んとす。若し法ありて行ふものなきは、是れ死法のみ。

それ僧侶の法服は、佛制嚴乎として勤かす可からず。佛世尊は最も鄭重にまた最嚴密に、その條項を規定し、晝夜護持して身皮を守るが如く、須臾も離衣す可からずと制し給ひたるのみならず、其體色量等皆て嚴制ありて、その原質を變更することを許し給はざるは、一罰の圖釋等を繕くもの、誰かこれを知らざらん。故に鑑眞弘法等の諸高祖を始め、中世に至り、榮西、俊芻、道元、興正、大悲、忍性等の諸祖は、皆これを欽奉して、異轍なかりしと云ふ。

鼠を見るに皮あり、人として禪ならんや、鼠を視るに毛あり、人として禪ならんや。禪は衣冠に始まり、郡祭に移る。俗類その禮節を嚴にす。況や出家の道士、豈其禮なからんや。蘇に考ふるに、世尊始めて出家して、嶺特山に入り、值殊高の寶衣瓔珞を脱し、車匿に附して、之を父王に贈り、自ら藍布の僧伽梨衣を被看し、勤苦修行して降魔成道し給ひ、祖を傳承して、此衣鉢を以て、付法傳燈の印璽となし給へり。是を以て蓮華は、西天廿八祖傳承なる青黑色の九條大衣を以て、二祖に衣し、提摩和土は、如來の陀陀色衣を傳へて來朝し、弘法大師は、八祖傳承の乾阿色大衣を以て、藏宗の靈、真空の鏡とせられたり。獨り慙しむ、今世の佛弟子と自

稱するもの、非法の紫衣紅袍金色燈籠、以て自ら法衣と稱し、一も佛戒祖訓に背はざるもの如きは、果して何等の因縁ありや、俗間に於てすら分外の装飾は、婦女子と雖も之を憐る所なるにあらずや、質素を旨とする僧侶の身分にして、相競ふて華美を装ふの所態を呈す、嗚々怪事ならずや。

佛敎は嗔心を本とす。何ぞ外相を装ふこと佛優待の如きや、内心若し道服と相應することあらば人天龍鬼の崇拝する所たるは、佛説祖訓の常に唱導する處にして少しく佛典を繕くもの、誰かこれを知らざらん。然るに今の頭頂者は、事竣に出でずして、其内心の腐敗するに従ひ、徒に外觀を街ひ、愈々粧ふに虚飾非禮の服色を以てし、以て愚民を欺き、邪利を釣らんとす。何ぞ其心術の野卑陋劣なるや、夫れ身に壯嚴を飾るものに壯嚴の實なく、口に正直を唱ふるものに正直の實なし。僧侶が其軀に紫袿の衣を着けて、壯嚴を飾るは、偶々以て内心の腐敗と無識とを表證するに非ずや。退きて其の羞面を視るに、此非法衣を着せんとして、其本山に哀願

す。其本山は末徒の賤しむ可き虚飾心を奇貨とし、服色の規定を設け、納財の多寡に應じて、之れを許すに各々差ありとは、實に淺ましき限りならずや。最者が夷鼠を餌にして狐を釣るは、敢て惟むに足らざれども、若し老狐が夷鼠を餌として、小狐を釣ることあらば、誰か聞いて絶罵せざらんや。同類相欺き、血肉相食むは、人類の忍びざる所、強者が弱者の虚飾心を奇貨として、非法非律の服色を以て、己が財源を造らんとは、邪命非義の極、世間くに忍びんや。

抑々宗教家は、人を道徳に誘導するを任とするものなれば、其一舉一動は、社會全般に影響する極めて大なり。それ人徳は華美に流れ易く、奢侈に耽り易し、是等の弊風を末前に防ぎ、既發に矯正するは、即ち宗教家の責任ならずや。されば僧侶たるもの、平素勉めて敦厚質朴の風を守りて、人心を感化せしむ可きは論なし。然るに舞伎俳優も則は及ばざる服色を装ふて、愚民を惑はし、却て人を弱者に導かんとするが如きは、社會の徳義を改良維持せんとするものも、監視するに忍びざる處

なり。されば僧侶は、いかに頑然として非法の服裝を爲さんとするも、社會公衆は將來決して等閑に看過せざる可し。或は前して曰はん、されどは數百年來因襲の懸弊なれば、その懸弊を懸弊と知らざる僧侶が、一朝俄に之を廢するの勇なかる可しと。曰く然り。其懸弊を言はず、海に溺るなり。然れども佛祖は三千年來の昔、既に破乎不拔の衣法を制定して、非法の體色服を禁せられ、官家は維新の初め、已に業に見る處ありて、是等虚飾の有害無益の制度を斷然廢止して、立教開宗の本義に基くべき旨を令せられたるにあらざるや。彼の俗よりも俗なる凡僧に在ては、素より一朝俄に改め難かるべしと雖も、天下有數の高僧、何ぞ其弊を知て、之を改むるの勇なきの理あらんや。切に省察せよ。内、佛祖の禁止する處の外、社會の禁忌する處となりたる、非法の衣色をば、其本山の高僧たるもの、何の理由ありて、自ら之を着し、何の特權ありて、他をして之を着せしむる事を得べきや。少しく條理を知るもの、決して爲し得べき處にあらざる可し。余は去る頃、偶々某新聞記者に語る

に、此事を以てせしに記者は直にその紙上に於て之を世に公にせり。然れども語甚だ簡略に過ぎて、未だ余が意に充たず、今少しく布衍して記せんとす。請ふ觀者之を諒せよ。

本 論

夫れ袈裟は、出家解脫の幟相、賢聖沙門の大標、佛々同道の章服にして、其體色量及び制戒離刺の法、簡練被看護持の制に至る迄、一々皆な大聖世尊の金口の直説なり。若し裁制法に違ふるときは、看々に罪を結し、受用教に乖くときは、念々に福を損くし、聖制の至嚴なることこれ如此。佛院の立制勸々としてそれ至れり。佛門の大徳覺悟にして可ならんや。

過般、畏くも、國母陛下の御大喪にあたらせらるゝや、内務省は各宗管長に訓令して曰く、宮中喪期間、皇后行在所に参入するものは、各宗既定の服裝に由るべ

しと然も、服色は雲綺等の華美の色を避くべしと、嗚呼天下十萬の方袍は、之れに對して如何に感せられたりや。思ふにこれ由來僧侶の服裝が、紅紫紋綵、綾羅縷織、俗臭芬々たるものあるを以て、大爽の大徳に下り、特に當路者の注意に出でたるものなるべしと雖も、之れに依つて世人が平素、僧侶の服裝に對して、如何に嗤笑し、彈斥し、嫌惡し居るやのほども、察知するに足るものあるにあらずや。此の一片の訓令が、他く佛僧數百年の弊風を刺斥し、之が矯正を促したるは、これ國門降下の神聖、正法を好ませらるゝの致すところか。抑々亦、佛祖幽冥、嫌惡默示の然らしむる所が、吾人佛敎を信するものは、此刺斥を蒙りて、三百の鋒を以て、骨を刺すの痛苦に堪へざるなり。然れどもまた衷心竊に、歡喜排擯する所なきにあらず。何となれば、熾眼なる各宗當路者は、已に業に顧りみる所ありて、之が改善に着手せられつゝあるを信すればなり。否此頃聞く所に由れば、或宗の門跡等の高僧は、御大葬祭列を許されたるにつき、服色の麻衣に、木蘭の麻袈裟を新調して、被着さ

れたりと、さすが頭敏なる高僧の所爲、洵に感ずるに餘りありといふ可し。然れども今茲に、少しく疑慮なき能はざるものあり。そは、先回の御大爽につき、俗官一片の省令に由つて、斯く頭敏なるも、未だ僧侶自身に反省して、斯く頭敏なるにあらざるか、況や佛制嚴乎として、寸毫も革むべからざるものあるに於て、未だ顧みる所なきかの成なき能はざればなり。余不肯信て之を聞けり。凡そ葬儀は固り、天地山川及び宗廟の祭祀には、必ず舊戒して、美服甘味を祛らることは、儒宗の誡しむる所、本邦古典亦固より傳りとす。然るに僧侶たるものは、常に他の施を受けて、天地を斬り祖宗を祀り、それをして剛苦得脱せしむるを以て、任とするものなれば一日として潔齋禁戒せざるべきの日あることなし。故に之を呼んで、終身の爽といふと、且つ常に服色を着するは、自ら皇國古典の喪服と相符合するも亦奇といふべし。然るに今或高僧等は、自己の本心に違ひ、佛祖の嚴訓に背りて、永くこれを體服とせらるゝならば、予が洵に拮据して止まざる所なりと雖も、或は意發に出でず

して、但だ今、回省合のために、威制割欲せられて、事巴むを得ざるに出でたるものとせば、余が犯愛は上に反して、益々熱度を高め、三百の鉢のみか、千刀萬杖を以て、此身を刺すに過ぎたるものあらんとす。何となれば、僧侶は其の恐るべきを恐れずして、恐るゝに足らざる、吾之を教化済度す可き俗士に向つて、阿り謏ふ卑劣心のます／＼増大なるに驚愕慨嘆すること甚だしければなり。其の恐るべきものとは何ぞや、即ち佛勸阻諷にあらすや。

蓋佛意深甚、帝制幽遠にして、凡愚の容易に冀測すべき所にあらず。況や戒律の如きは、世尊既に天龍八部、及び在家俗士を避けて、必ず闍若淨地に在りて、清衆のみの中に於て、之を割し給へることは、即ち戒律をして威嚴あらしめ、清衆をして、尊諱ならしめんが爲めなるべし。豈吾人俗士の容貌すべき所ならんや。然れども幸に、會て聊か其の一端を聞く所なきにあらず。

袈裟は梵語にして、譯して埵色衣といひ、又不正色衣、和合色衣といふ。是濁色

の義なりと。所謂木蘭樹の皮等を以て染め、或は泥土を以て染めて、其色澆濁ならしめ、紫紺五大等の色を壞して、華麗綺飾に亘らざるを以て、之に名けたるなりとされは袈裟とは、直に之を埵色濁色の義にして、決して紫紺絳緋等の衣の名にあらざるや明なり。故に經には雜染服と名け、出世服、解脫服、蓮華服、忍辱衣、憍慢服等と名く。是即ち欲界世染を離れ、直然として深く憍慢を懐き、小欲知足に住して、貪瞋痴を解脫し、遠く無上菩提を期し非悲忍辱を以て、人天の福田たるべきの標相なればなり。余曾て之を問けり、凡そ袈裟の制たる、袈色、兼共に教檢ありて、嚴として動かすべからず。袈色、兼とは、袈は袈裟地の衣袈なり。謂ゆる絳羅錦縹一切有文の類、細薄、生疎、紗綾等の非法物を除き、餘の麻布等の文綜なきを、その財徳とす。智度論に曰く、如來は常に、十三條の麁布の僧製袈(大衣)を着し給へりと。次に色とは、袈裟の着色なり。聞く着色は、青黃赤白黒の五大色、及び紅紫絳綠碧等の五間色を然じ、之を除きて、餘の青(黒色を帯びたるもの)黒(鼠色及

び泥色の類)木蘭(木皮染)の三色を加法とすと。次に量とは、袈裟の横堅の量といふなり。聞く諸律小異なきにあらざると雖も、大差なし。今且らく聞く所に依れば、三衣(五條七條大衣なり)は横五肘、堅三肘(每肘一尺五寸にして長七尺五寸、廣四尺五寸なり)若し其極少なるものも、横四肘、堅二肘半を下りすと。是れその量なり。この體色、量の三法に應ずるを以て、如法衣といふ。されば此の三法に戻るは、不如法の衣たることを言を依たず、何ぞ不如法の衣と知りつゝ、これを被着するに忍びんや。この體色、量は、釋尊親しく制し給ふ所にして、曾に體色量のみならず、其裁縫洗染皆この法あり。故に釋尊は、過去に五種の觸を發して、此の法衣を着するものは、必ず久しからずして、解脫せしめんと誓ひ給へりと、亦尊からずや。されば在世の諸大弟子と雖も、唯々隨順奉行するのみにして、決して一事にも舉措することを許し給はざるなり。それ在世の諸大弟子すら、尚ほ一辭も増減する能はず、況や末世の僧徒、何ぞ親りに之を制定す可きものならんや。今人已が胸臆に任せて、

種々非法の衣を制して、自ら着するのみならず、剩へ之を末徒に許可し、其財源を造らんとするが如きに至りては、豈佛弟子の所爲といふ可けんや。
俗士尙は言はずや、先王の法服にあらざれば、敢て着せずと。況や出世の大士は、佛服を服し、佛戒を行して、頗に佛道を成する、これその本分にあらずや。故に榮西禪師出家大綱に、偏さに如法の佛衣を論じ、後、明惠、解脫、法然等の諸師、皆鼠色伽藍の法衣を被奉し、道元禪師は、袈裟功德、及び傳衣の二卷に立り、懸々體色量如法にすべきことを勸誡せらるのみならず、曾て始開の袈衣を固執し、一切を賦して、

永平谷燈淺。

轉命重疊々。

翠霞笑嶺鶴。

紫衣一老翁。

と誦せられたる芳烈の如きは、豈正法千載の龜鑑にあらずや。古に曰く、知見正しからざれば、餘事皆黑闇なり、餘事の如法ならざるは、これ知見の邪なるが故なりと。今や各宗の僧服多くは體色量如法の佛制を喪ひて、唯其名のみ遺るを以て、

之を思へば、僧伽胸を衝て、言はんを欲して言ふ能はざるものあり。僧服の素麗非法今日の如く甚だしきに至りたるは、蓋しその弊源種々あるべしと雖も、要するに僧侶自ら正知見を失して、因果を信せず、佛戒の何たるを知らず、重禁を犯して待たざりしに由るの外ならざるべし。若し僧侶にして因果を信じ、佛戒を遵奉せば、何ぞ獨り法服のみ如此甚だしき服飾を招かんや。嗚呼破弊縫綴の酒衣は、漸く轉じて、錦繡紋綵の華飾と爲る。その五條七條は、唯々名のみ残りて、紋白袴白と爲り、展轉變化して底止する所を知らず。按に於てか、世人をしてその非法の袈裟を惡むと共に、佛教そのものを嫌厭し、正法そのものを聞信せざるに至らしめ、遂に佛教をして、今日の惡境に陥らしめたるは、それ將た誰れの罪ぞや。在誠懇懇にして、立脚嚴密なること、諸經律に明説のあるありて、固より諸大徳の知る所、吾人愚俗の疑を容るべき所にあらず。請ふ諸大徳よ、情を離れて理に取り、自ら反省して、此既陞の正法を挽回せられんことを、敬んで諸大徳に白す。

僧服改正餘論

問く佛教の僧服は、神聖にして改むべきものにあらずと、然るに今敢て改正といふも、決して新に異儀異様の服装を制よといふにあらず、只現今各宗の醜麗華美なる僧服が、佛制本來の埒色鈍色に違背するは、僧侶自己内心の道服と、相應せざるのみならず、亦て社會の風俗を害し、風化を傷り、矯奢淫靡の素因媒介となりて社會の進歩發達に、其影響を及ぼすや鮮からざるを察し、この有害非法虛偽腐敗なる、錦繡紋綵風彩の僧服を全廢し、如何にも質素如法にして、人の見て以て款仰の心を生じ、自ら矯奢の心を抑制す可き、彼佛制本來の法服に改正せよといふに外ならず。

苟くも此神聖なる佛制本來の僧服を論せむと欲せば、則ち佛院世尊の至嚴なる律制を、主眼とし精神とし、根據として、其言を立てざるべからず、若し佛制を外に

して、僧服を論せんか、其論や如何に精微を穿つ如くなるも畢竟これ無主義無精神の空論にして、一も取るに足らず、何となれば、已に是れ佛子それ自身の法服にあらず、佛弟子の法服は、常に佛制に依違すべし、佛制に依違せざるは、佛弟子の法服にあらず、然らば佛弟子の法服を論するに、佛制の明文を根據とせざるべからざるは、無論而已。

夫れ剃髮染衣出家受戒は、佛弟子の通規にして、佛陀の律制中、最も尊嚴、最も神聖なる者なり、殊に僧服の如きは、法王一たび勅して十方之れに遵ひ、金口一たび印して凡聖異議なし、豈管僧服のみならんや、凡そ佛制の法律なるものは、其立法の大權、獨り究竟圓滿の佛世尊にのみ存じ、世尊三世通達の智を以て、其制す可きはこれを制し、其開す可きはこれを開して、欽定せられたるものなれば、誰人も更に不可改の法律なり。

世尊、優婆塞の問に答へて、我正法は、汝等比丘、我所制の法律を嚴守する時に

まで至る。若し此法律を廢する時、正法隨つて滅すと懸記し給へり。故に今僧服改正といふは、新に考案制定するの謂にあらず、彼中古有志の諸碩徳のこれが改正を企圖せらるゝも、皆末代現今の如き、非法の服裝を廢して、全然佛制如法の體色量に改むる外、更に別的手段なきと同一轍なり。

予聊か佛教に正信を惹起し、教界窮下の状態を見て、慷慨激昂はざるものあり。乃ち居士の身として、敢て僧越を顧みず、遂に僧服改正論一篇を草して、曩に之れを公にするや、圓らざるも、各宗の諸大徳、及佛野有識者の賛同を得たるは、正法恢復及社會風俗矯正の一端とも、成るべしと信じ、深く歡喜する處なり。然るに或る一部の僧侶にして、往々評議の筆法を弄するものあるが如し。素より言論批評は相互の自由なれば、敢て之を答むべきにあらずと雖も、而も曾て佛制嚴律の如何を究めず、一定の根據もなく、釋迦一化尊是比丘形なるの理趣を明めずして、只一時の感の浮べるまゝに、己が局情に任せて、容易に是非し、蛙鳴蟬噪々々論評し去る

が如きは、予は人天の導師たる僧侶其の人のために、轉た痛惜に堪へず。畢竟これ紛々たる糾紛の評、狂悖の言、素より顧みずして可なり。只或は誤て惑者に雷同するものあるを恐れて、彼一二の甚だしき暴言に對して、少しく辨駁を試みんとす。

惑者曰く、填色鈍色は、小乘聲聞の袈裟にして、大乘は、雲袿金襴益々美ならしめて可なりと。

可是れ何等の亂調ぞや。夫れ制教嚴律は、佛教の通規にあらずや。剃髮染衣は、出家佛弟子の通則にあらずや。何れの處にか、大乘の剃髮、小乘の剃髮、大乘の袈裟、小乘の袈裟の徑庭差別を説き給ふ經律ありや。填色鈍色若し小乘に限らば、何故に彼大乘なる梵網經、文珠問經、心地觀經、大智度論經、大日經疏等の無量の經に嚴しく填色にせよと、誠勸説示し給へるや。今試みに一二の經を引證して、惑者の誣妄を破斥せん。

夫れ梵網菩薩戒經は、大乘圓頓の戒經にして、大乘菩薩の精要肝心なり。若し此

戒を犯するものは、國王の地上に行き、國王の水を飲むことを許し給はざるにあらずや。然るに經中に嚴制して曰く、應教身所著袈裟、皆使填色與道相應と、又曰く、一切染衣乃至臥具、盡以填色と、大乘圓頓の經文、明なること如日月、惑者尙は此經文をも、小乘經なりといふことを得べきや。此經は大乘菩薩の心地戒品にして、天台真言禪淨土諸宗所依の戒經なること、誰か敢て疑はむ。然るに經文明了に填色を制して餘蓋なし。此經既に關り、填色鈍色大乘の通規なること言論茲に定まる、飽覽なる絳羅錦繡紫絳紋綵の非法なること、又論を俟たず。然れども尙更に之を證せば、大乘本生心地觀經には、特に出家の菩薩の爲に世尊愍愍に袈裟の勝徳を讚歎して曰く、出家菩薩於所著衣不應貪著若細若麁隨其所得恒於施者爲生福田勿嫌羸惡不得爲衣廣說法要起諸方便與貪相應と、又次の世間の凡夫、衣服のために非法に貪求するの過を舉げ舉つて曰く、出家菩薩、即不如是隨其所得不嫌羸惡但壞慳慳以充法衣と、但し此文に就ては、惑

者の注意を促さんとすることあり、此是經文は、決して感者の言ふが如き、錦綺等の金大女彼の出家の不可善ものに付て制し給ふにあらず、假令麻布等の法衣なるも、好衣を食求することを厭呵し給へる經文なり。若し感者の主張するが如き、金剛重大の衣は、餘長の什物としても、善ふ可からず。況や之れを以て法衣となすことあらば、釋世尊は何とか言給ふべきや。又經に袈裟の十勝利を説きて、第六勝利に曰く、木制袈裟染令淨色離五欲想不令生貪憂と、感者尙は淨色は、小乘聲聞に限るといふか。又文珠問經に曰く、云不赤不黃不青不黑不白如法三衣とされば、淨色にあらざれば、不如法なることを知る可し。此經及び心地觀經の大乘なるは、誰人も皆知る所なり。感者之れをしも尙は小乘經なりといはんとするか、凡そ無量の大乗經より、淨色淨色の證を引き來らば、日も亦足らず、紫綉金襴は、一切出家の佛弟子に開許し給へるの文、何の經にありや。世尊の曾て聽許し給はざるのみならず、如法の三衣も、尙は齋臘を嫌はず、好衣を食る勿

れと、誦め給へるに、感者尙は、紫綉金襴益々美ならしめよとは、それ將た何等の暴言ぞや、佛祖を誹ひ、世人を騙すのも、亦甚だしといふ可し、又感者の意味なるや、動もすれば、婦母所献金襴袈裟、慈氏成佛留以傳付の文を珍重して、唯一の權とするも、是豈一切出家佛弟子に、紫綉金襴を通關するの文ならんや。寧ろ證憑とするに足らざる文を擧げて、無二の證文と呼ばるゝ感者の暗愚や驚く可し。南山道宣律師、この金襴を釋して曰く、黃色之種、細妙珠絕同金と、祖師既に如此、明辨し給へり。感者尙は金襴なりと堅ひ得るか。假令金襴果して今日の如き金襴なりとするも、決して一切出家に通關聽許し給へる文に非らざるなり。況や金襴は黄色の種の細妙殊絶なるを稱美せし語にして、金襴にあらざるをや。感者少しは反省して可なり。思ふに今日流行の紫綉金襴の袈裟の起源を探究せん乎、六百餘卷の律藏を始め、一代諸經の上は、曾て其片影だも認むる能はずして、只古今檀香僧侶の胸間を往來せる、奇好心態、佛心の妄想の塊物に歸するの外無らむ。彼傳教大師の山宗

學生式、東西師師の出家大綱、承闡大師の正法眼藏等を、正眼に見れば、惑者の妄想塵埃は蕩盡す可し。就中出家學生式の如きは、畏くも螺順天皇之れを批準し給ふて、天台末徒の恒式とする所なり。其書や充衣の題下に曰く、上品者路側上衣中品者東土商布下品者乞索隨得衣とありて、曾て金襴の文なし。其隨得衣とは何ぞや、即ち施主の供養するに任せて、貧乏を嫌はざる、出家の欲の本意を示し給へる文なり。出家大綱には、特に出家の綱要真髓として、如法の三衣を明示せり。正法眼藏には、壞色の如法なることを、懇々指示せられたり、又明惠解脫開光等の諸祖、皆な黒鼠の法衣を着し給へるの芳躰を聞く。亦何ぞ俱優然たる索練金襴を被着し給ふの理あらんや。其他興正、大慈、俊禱、明忍、忍性等の諸徳、皆な如法の壞色衣を被着し給へるは、言ふまでもなし。溯りて經真、弘法等の諸高祖の、壞色如法の三衣を受持し給ひて、今尚ほ彼れの靈場に、符重保存せらるゝにあらすや。惑者尚ほ以上の諸祖を以て小乘とせば、惑者の祖師は誰とかなる、嗚呼諸祖既に、壞色

衣を欲奉し被着せられ、六百餘卷の律藏を始め、諸大乘經皆悉く壞色量の壞色衣を以て、佛弟子の通規通則とし給ひたるに、佛祖に對し何の顏ありてか、狂暴なる謬言を呈するや。

予は律文に依り、略して僧服の體色量の定義を定め、體の本論に明かにしたるに、惑者無色迂濶なるや、此れを是れ察せずして、予を以て改正の成案を示さずと誣ふ。惑者の謬妄に巧みなる驚く可し。元來俗士に向つて僧侶自家の服制を問ふ、吁天下亦斯る奇談ありや。改正の成案は、僧侶が必ず學す可き如來の法律、即ち彼六百餘卷の律藏に明了ならずや。僧侶が其の流弊を脱して、斷然佛制に改めんと欲せば、眞に如來の法律に由る可し。亦何ぞ俗士の説明を要せむ。如何に世の風潮に動かされ、流俗に混ずるとはいへ、佛制本來の僧服の如何なるか位は、研究し置くも亦可ならずや。

又惑者曰く、僧服は枝末なり、之が改正を唱ふるは迂濶なりと。

それ僧侶の無戒破戒にして、其服を欲にし、其髪を長くし、其品行を汚すものに向つて、僧服の如法不如法を問ふは、迂遠なるに似たりと雖も、セメては、今僅に頭を禿するものに向つて、之れが改良を求むるのみ。即ち今の僧侶にして、若し其僧服を外にせば、僧侶たる特色何處にあるか、昔者佛理を講ずるは、俗士も亦之れを能くす。今や佛説邪解縹素の間にもつ。如此僧侶にして、若し法衣を脱し去らば如來の遺法何處にか留めん。悲哉。悲に今日の僧侶に、精神的學徳の完備を望むは、僧服改正の難きよりも難し。學徳の素養は、一朝一夕に望むを得ず、然るに僧服改正は、如法不如法正儀不正儀が、其主眼なれば、本山と未派とを問はず、僧侶たるの一念、佛制に順する志だに起らば、其日より改正し、實行することを得べし。惑者何ぞ遷て迂遠なるや。予が老悖心は、此僧服改正を端緒として、懇じて佛教の汚濁を一洗せんと欲するにあり。何ぞ嘗に僧服の改正に止まらんや。思ふに僧服の神聖なるや、觀聽の表に出て、言思の域にあらす。若し果して惑者のいふが如き、

枝末的のものならば、世尊は何故に、先佛の前に於て、別願を立て、袈裟に五種の功德あらしめんことを、發願し給ひ、無相爲宗の廿八祖、及各宗の諸祖は、何故にこの佛衣を以て、付法の印履とせられたるか。又何故に大小嚴密の諸經律に、一々其廣大深遠の功德あることを、懇諭し給へるや、吁枝末的とは何事ぞ。然れども予は今日の如き、展轉訛替し、體色量とも佛制に違背したる袈裟に於ては、如此殊勝の功德あるを知らず、蓋し其殊勝難思の功德ある所以のものは、一に佛制に準じて體色量とも佛制に合するのみならず、三種の好奇心及び四五の邪命を離れて如法の衣財を求得し、浣染縫刺皆法に稱ひ、而も離衣離宿の易を離れて奉持し、尊重恭敬するが故なるべし。

又惑者曰く、今日の僧侶には、僧服の改正よりも、内心悟道の素養を先きとせざる可からずし。

吁何ぞ言の愚なるに驚かさらんや、佛の在世に、若し來て出家せんと願ふものあれ

ば、必ず先づ剃髮染衣せしめ、而後其國に隨つて、法を授け給ふ。故に後世支那日本に至つて、古今の真僧傳を見るに、必ず剃髮染衣を先とするにあらずや。それ僧侶は、如來滅後住持三寶の隨一なる、僧寶の尊位に居して、正法弘通法燈相續の責任あり。天下蒼生の依つて以て、師表と仰ぐものなれば、其威儀風彩は、最も尊嚴にして、社會の風紀を維持し其一舉一動皆な、實踐道德の標準とならざるべからず。某翁の所謂、道德は目より入るとは、知言なりといふ可し。僧侶が如何に、其語言を巧みにして、佛陀の妙法を布演するも、若し其威儀尊嚴ならず、其行為卑劣ならば、一見、人をして輕賤の念を生じ、厭背の情を起さしめて、僧侶を惡むと共に、其所説の法門をも捨つるに至らしむるは、隠れなき事實ならずや。されば僧侶が、今日尤も急に改正す可きは、其外形の醜陋華美なる紫絳金縷の服裝にあらずや。嗚呼外は世人の譏議を懼らず、内は佛祖の嚴戒に違ひ、着々過を招き、歩々罪を結する、虚飾非法の紫絳金縷の服を何として、愚民を欺き、邪利を釣らんとす

が如き、野卑陋劣なる心術にて、何の悟道をか論せん、何の學道をか言はん。然れども或る一部の僧侶が、飽茲經律の明文に違背し、佛祖の祖訓を侮蔑して、質素なる如法の壞色衣を嫌ひ、有害無益なる紫絳金縷の衣を飾りて、邪利を釣るの具となし、社會の大勢人心の歸向の如何を知らずして、斯かる卑劣極まる姑息手段に、其の日を送り、佛祖の嚴禁する邪命的の生活を以て、其口を解せんとせば、予亦何をか言はん。而して予の改正論に對する評論中、或は利便的方面より云々せしものあれども、真正なる佛制を根據とする予の眼中には、毫も反駁するの價值を認めざる故、之れに及ばず。

終りに臨んで一言せん、僧侶は非法なる金縷紫絳の美服を纏ふて、信者の布施を貪らざるも、質素なる如法の三衣をさへ、其身に纏ざれば、信徒は決して僧侶をして飢渴に逼らしむるものにあらず、古徳曰く、衣食の中に道心なく、道心の中に衣食ありと、さて斯くはいひたるものも人各意あり、況や各宗の歷々には、種々御

贈呈正録

尤の道理あるべけれども、予が本論の起りは、畏くも過般大葬に際し、成ずること淺からず、仍ては諸大徳も、皇室の御葬儀に倣ひ、兎に角葬儀の式だけになりとも、喪服に似合はしき、法衣に定められんことを、是れ予が外護一片の婆心より深く哀訴する處也。



觀樹將軍豪快錄終

大正七年九月十九日發行
 大正七年九月二十二日發行
 大正七年九月二十五日發行
 大正七年九月三十日發行
 大正七年十月五日發行

觀樹將軍豪快錄

正價金壹圓五拾錢

編者 三戸 十三

發行者 東京市麹町區西三丁目二番地 福田 滋次郎

印刷者 東京市小石川區西江戸町二十一番地 土谷 清平

印刷所 東京市小石川區西江戸町二十一番地 小石川印刷合資會社



不許複製

發行所

東京市麹町區西三丁目二番地
 振替口座東京一〇八六番

日本書院

TRC102095

秋市立図書館



111392585